岩橋千塚周辺古墳群

緊急確認調査報告書

序

和歌山市東郊の丘陵地帯にある岩橋千塚古墳群は、おもに５世紀から６世紀にかけて築造された６００基以上の全国屈指の大古墳群として早くから有名でありました。

昭和６年には国史跡の指定を受け、現在は特別史跡として保護され、その主要部分は史跡公園「紀伊風土記の丘」として整備公開されております。

しかしながら、指定地外の古墳については具体的な保護策が講じられないまま、近年はゴルフ場等の開発計画がたびたび持ち上がってくるようになりました。そのため、古墳群の詳細な分布状況を把握し、開発計画に対応できる基礎資料の整備が求められてきました。

そこで、本県教育委員会は、文化庁の国庫補助を得て、平成７年度から５カ年計画で、特別史跡の指定地周辺に所在する古墳群の確認調査と精密な古墳分布図の作成事業を実施してまいりました。

ここに、その成果を報告書として刊行いたしましたので、開発と古墳群保護の調和を図るための資料として、広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたり、格別の御配慮を賜りました地権者をはじめとする関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成12年３月

和歌山県教育委員会

教育長　小　関　洋　治

例　　言

1．本書は文化庁の国庫補助金を得て、和歌山県教育委員会が実施した「岩橋千塚周辺古墳群緊急確認調査事業」の調査報告書である。

2．事業の対象地域は、国特別史跡「岩橋千塚古墳群」の指定地外の古墳分布範囲で、民有地部分である。

3．事業では、この地域の古墳の分布調査・発掘調査を実施した他、詳細な古墳分布図を作成して、古墳群の保護のための基礎資料を得た。

4．事業は、文化庁、および和歌山県教育委員会の組織した調査委員会の指導のもとで平成７年度から平成11年度にかけて、合計５カ年の間実施した。

5．本書の執筆は黒石・武内・藤井幸司が分担して担当し、文責は目次に記した。

調　査　組　織

調査委員

森　　郁　夫　（和歌山県文化財保護審議会委員）
巽　　三　郎　（和歌山県文化財保護審議会委員）
和　田　晴　吾　（和歌山県文化財保護審議会委員）
藤　沢　一　夫　（和歌山県文化財保護審議会委員）

調査担当者

平成７年度から平成９年度

吉　田　宣　夫　（主幹、現財団法人和歌山県文化財センター次長）
辻　林　　浩　（文化技術班長、現文化財課副課長）
藤　井　保　夫　（文化専門員、現文化財課主幹）
黒　石　哲　夫　（技師、現財団法人和歌山県文化財センター副主査）
阿　部　　真　（嘱託調査員、現禅林寺副住職）

平成10年度

藤　井　保　夫　（文化技術班長）
武　内　雅　人　（主任）

平成11年度

武　内　雅　人　（主任）
藤　井　幸　司　（技師）

凡　　例

1．挿図として掲載した古墳および石室の図に示した方位は、平成７～９年度の調査分は磁北で、平成10年度調査分は座標北である。

2．付図・挿図に示した座標値は国土座標第Ⅵ系のものである。

3．掲載遺物の番号は通し番号で、本文・挿図・図版で共通する。図版のみに掲載した遺物は1000番台の番号を使用した。

4．遺物一覧表に示した法量は、口径＝ϕ・器高（最大遺存高）＝ｈ・最大長＝ｌ・最大幅＝ｗ・重量＝ｗｔの略号を使用した。表示の単位はcmおよびｇである。

5．遺物一覧表に示した遺存率は、遺存する最大高もしくは最大長での推定遺存比率である。

目　次

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境 …… 1（黒石）

第２節　歴史的環境 …… 1（黒石）

第Ⅱ章　調査経緯

第１節　岩橋千塚古墳群の概要 …… 4（黒石）

第２節　研究史 …… 5（黒石）

第３節　調査経緯 …… 6（黒石）

第Ⅲ章　調査成果

第１節　平成７年度花山古墳群の調査

①花山33号墳 …… 8

A　立地 …… 8（黒石）

B　墳丘 …… 8（黒石）

C　石室 …… 8（黒石）

D　遺物出土状況 ……11（黒石）

E　出土遺物 ……11（藤井）

F　小結 ……11（黒石）

②花山36号墳 ……13（黒石）

A　立地 ……13

B　墳丘 ……13

C　埋葬施設 ……13

D　遺物出土状況 ……15

E　小結 ……15

③踏査 ……15（黒石）

第２節　平成８年度大谷山・大日山古墳群の調査

①大日山70号墳 ……16

A　立地 ……16（黒石）

B　墳丘 ……16（黒石）

C　石室 ……16（黒石）

D　遺物出土状況 ……19（黒石）

E　出土遺物 ……19（武内）

F　小結 ……19（黒石）

②大日山71号墳 ……21（黒石）

A　立地 ……21

B　墳丘 ……21

C　埋葬施設 ……21

D　遺物出土状況 ……21

E　出土遺物 ……21

F　小結 ……21

③大日山58号墳 ……21（黒石）

A　立地 ……21

B　墳丘 ……21

C　石室 ……21

D　遺物出土状況 ……22

E　小結 ……22

④大日山43号墳 ……22

A　立地 ……22（黒石）

B　墳丘 ……22（黒石）

C　石室 ……22（黒石）

D　遺物出土状況 ……26（黒石）

E　遺物 ……26（藤井）

F　小結 ……28（黒石）

⑤まとめ ……28（黒石）

第３節　平成９年度井辺前山古墳群の調査

①井辺前山24号墳 ……30

A　立地 ……30（黒石）

B　墳丘 ……30（黒石）

C　埋葬施設 ……30（黒石）

D　遺物出土状況 ……30（黒石）

E　遺物 ……30（武内）

F　小結 ……32（黒石）

②井辺前山26号墳 ……32
A　立地 ……32（黒石）
B　墳丘 ……32（黒石）
C　埋葬施設 ……33（黒石）
D　遺物出土状況 ……33（黒石）
E　遺物 ……34（武内・藤井）
F　小結 ……41（黒石）
③まとめ ……42（黒石）
第４節　平成10年度井辺・寺内地区の調査
①寺内64号墳 ……43（武内）
A　周溝 ……43
B　墓壙 ……43
C　墳丘 ……43
②寺内22号墳 ……44（武内）
A　墳丘 ……44
B　埋葬施設 ……44
C　出土遺物 ……45
③寺内23号墳 ……45
④土壙 ……46
⑤その他遺物 ……46
⑥まとめ ……46
第５節　総括 ……47（黒石）

挿図目次

第１図　遺跡 …… 3
第２図　調査範囲 …… 6
第３図　花山33号墳墳丘測量図 …… 9
第４図　花山33号墳石室実測図 ……10
第５図　花山33号墳出土遺物 ……12
第６図　花山33号墳出土遺物 ……13
第７図　花山36号墳墳丘測量図 ……14
第８図　大日山70号墳・71号墳墳丘測量図 ……17
第９図　大日山70号墳石室実測図 ……18
第10図　大日山70号墳・71号墳出土遺物 ……20
第11図　大日山58号墳・71号墳石室実測図 ……23
第12図　大日山43号墳・58号墳墳丘測量図 ……24
第13図　大日山43号墳石室実測図 ……25
第14図　大日山43号墳出土遺物 ……27
第15図　井辺前山24・26号墳墳丘測量図 ……29
第16図　井辺前山26号墳石室実測図 ……31
第17図　井辺前山26号墳ＳＸ－01・02 ……32
第18図　井辺前山26号墳ＳＸ－01・02
遺物出土状況 ……33
第19図　井辺前山26号墳ＳＸ－01出土遺物 ……34
第20図　井辺前山26号墳ＳＸ－02・24号墳
出土遺物 ……35
第21図　井辺前山26号墳出土埴輪１ ……37
第22図　井辺前山26号墳出土埴輪２ ……39
第23図　馬形埴輪出土部位位置図 ……41
第24図　寺内地区トレンチ配置図 ……43
第25図　寺内64号・22号墳土層図 ……44
第26図　寺内22号墳埋葬施設実測図 ……45
第27図　寺内地区出土遺物 ……45
第28図　寺内23号墳石室実測図 ……45

図版目次

ＰＬ－１　花山36号墳墳丘・花山33号墳墳丘
花山33号墳横穴式石室羨道部土器出土状況
ＰＬ－２　大日山43号墳墳丘
大日山43号墳横穴式石室羨道部
大日山43号墳横穴式石室
ＰＬ－３　大日山58号墳墳丘
大日山58号墳横穴式石室
大日山58号墳横穴式石室
ＰＬ－４　大日山70号墳横穴式石室
大日山70号墳横穴式石室
大日山70号墳玄室床面遺物出土状況
ＰＬ－５　大日山71号墳墳丘・大日山71号墳石室
井辺前山26号墳竪穴式石室
ＰＬ－６　井辺前山26号墳竪穴式石室
井辺前山26号墳くびれ部ＳＸ－01・02
同上　蓋石除去後
ＰＬ－７　井辺前山26号墳くびれ部ＳＸ－01・02
同上　ＳＸ－01・同上　ＳＸ－02
ＰＬ－８　井辺前山24号墳前方部
井辺前山24号墳北側面
井辺前山24号墳後円部トレンチ
ＰＬ－９　寺内64号墳調査前の状況
寺内64号墳岩盤を掘り込んだ墓壙
寺内64号墳墳丘の基底線
寺内64号墳周溝土層
ＰＬ－10　寺内22号墳調査前の状況
寺内22号墳全景・寺内22号墳埋葬施設
ＰＬ－11　寺内22号墳竪穴式石室遺物出土状況
寺内22号墳周溝の土層・土壙
ＰＬ－12　寺内23号墳付近調査前の状況
寺内23号墳竪穴式石室・同上
ＰＬ－13　花山33号墳出土遺物
ＰＬ－14　花山33号墳出土遺物
大日山43号墳出土埴輪
ＰＬ－15　大日山70号墳出土遺物
ＰＬ－16　大日山71号墳出土遺物
井辺前山26号墳出土遺物
ＰＬ－17　井辺前山26号墳出土遺物
ＰＬ－18　井辺前山26号墳出土遺物
ＰＬ－19　井辺前山26号墳出土遺物
ＰＬ－20　井辺前山26号墳出土遺物
寺内地区出土遺物

岩橋千塚周辺古墳群

緊急確認調査報告書

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

和歌山県は本州最南端に位置する紀伊半島の南西部を占めており、大部分が紀伊山系を中核とする山岳地帯である。諸河川の流域には平野部が開けている。山地は大阪府と境を接して東西に延びる和泉山脈をはじめ、長峯、白馬、果無、大塔等の山脈があり、概ね東北東から西南西に走り、標高1000ｍ前後の比較的急峻な山が多い。河川はこれらの諸山脈に源を発し、紀伊水道や太平洋に注いでいる。

主要なものに、紀ノ川、有田川、日高川、富田川、日置川、古座川、新宮川などがあり、弥生時代以降多数の遺跡が営まれてきた。海岸線は北部の加太・友ケ島から南の新宮川河口まで総延長623㎞に及ぶリアス式海岸で、南部では山裾が海岸まで迫り、怪石、奇岩が多い。

本県を紀北と紀南に大別する場合、面積的には偏りがあるが、自然環境や気候風土などで紀ノ川流域から有田川流域を紀北地域、それ以南の日高川流域から新宮川流域までを紀南地域と呼ぶ場合が多い。古代の行政区画では南海道に属しており、「木の国」紀伊と称され、森林資源に恵まれた山国である。気候は海岸を流れる黒潮のため一般に温暖である。紀伊水道に面して、天然の良港にめぐまれ、古くから造船技術が発達し、海上航路が開拓されていた。

本県の地質構造は紀北地域を東西に走る中央構造線によって内帯と外帯に区分される。紀ノ川がそれに沿って西流し、河口部では和歌山平野を形成している。紀ノ川の北岸には内帯に属する標高900ｍ近い和泉山脈が存在し、主として白亜紀の和泉砂岩層からなる。南岸には外帯に属する標高750ｍ前後の龍門山脈が延び、三波川系の結晶片岩類からなる。この山脈は標高を減じながら西方に連なり和歌山市東郊の岩橋まで延び、天王塚山（152ｍ）・大日山（142ｍ）・花山（77ｍ）・福飯ケ峯（101ｍ）などの山塊に分かれ、全国でも最大規模の群集墳である岩橋千塚古墳群が築かれている。

第２節　歴史的環境

岩橋千塚古墳群（第１図１）の所在する岩橋山塊周辺には各時代にわたる多数の遺跡が存在している。縄文時代の遺跡としては前期の吉礼貝塚（第１図13）・禰宜貝塚（第１図14）や中・後期の鳴神貝塚（第１図15）・岡崎縄文遺跡（第１図16）が知られている。

吉礼貝塚は紀ノ川流域では最古の貝塚で前期前半の北白川下層Ⅰ式からⅡ・Ⅲ式、前期末の大歳山、中期初頭の鷹島式、これにつづく船元Ⅲ式・里木Ⅱ式土器併行期の土器が確認されている。鳴神貝塚は岩橋山塊の西端に位置する花山丘陵西麓部の標高6～11ｍに位置している。明治28（1895）年に近畿地方で初めて発見され、鳥居龍蔵や直良信夫等によって調査された著名な貝塚で、昭和6（1931）年に

国の史跡に指定されている。

中心部の貝塚からは、船元Ⅰ式土器や五領ガ台式併行期の土器・船元Ⅱ式土器などの中・後期の土器が多く出土し、西方の低地部からは主として滋賀里式・丹治式・橿原式・船橋式の晩期の土器が出土している。貝塚からは伸展葬の門歯を抜歯して猿のとう骨製の耳栓をした壮年女性が見つかり、シャーマン的な人物ではないかと推定されている。

弥生時代の遺跡としては紀北地域で最大規模である太田・黒田遺跡（第１図11）がある。ＪＲ和歌山駅東側の標高4ｍ前後の紀ノ川の自然堤防上に立地する中期を中心とした集落跡で、多数の竪穴住居や井戸・溝等が確認されている。前期の遺構も土坑や井戸等が確認され、本県における弥生時代社会の開始を考察する上で大変重要な遺跡である。

本遺跡では現在紀伊型甕と呼ばれている縄文晩期の船橋式につづく縄文深鉢系の土器と底部が穿孔された弥生土器である遠賀川式の甕形土器が共伴して出土している。弥生時代後期から末期の遺跡には井辺遺跡（第１図９）がある。

井辺遺跡は井辺前山古墳群の築かれた福飯ケ峯北西山麓の標高５ｍ前後の紀ノ川の沖積地に営まれており、団地造成に伴う調査で、2列に並べられた弥生時代後期後半の土器列と、庄内式土器をアラカシを刳り抜いた井筒内に納めた井戸等が検出されている。

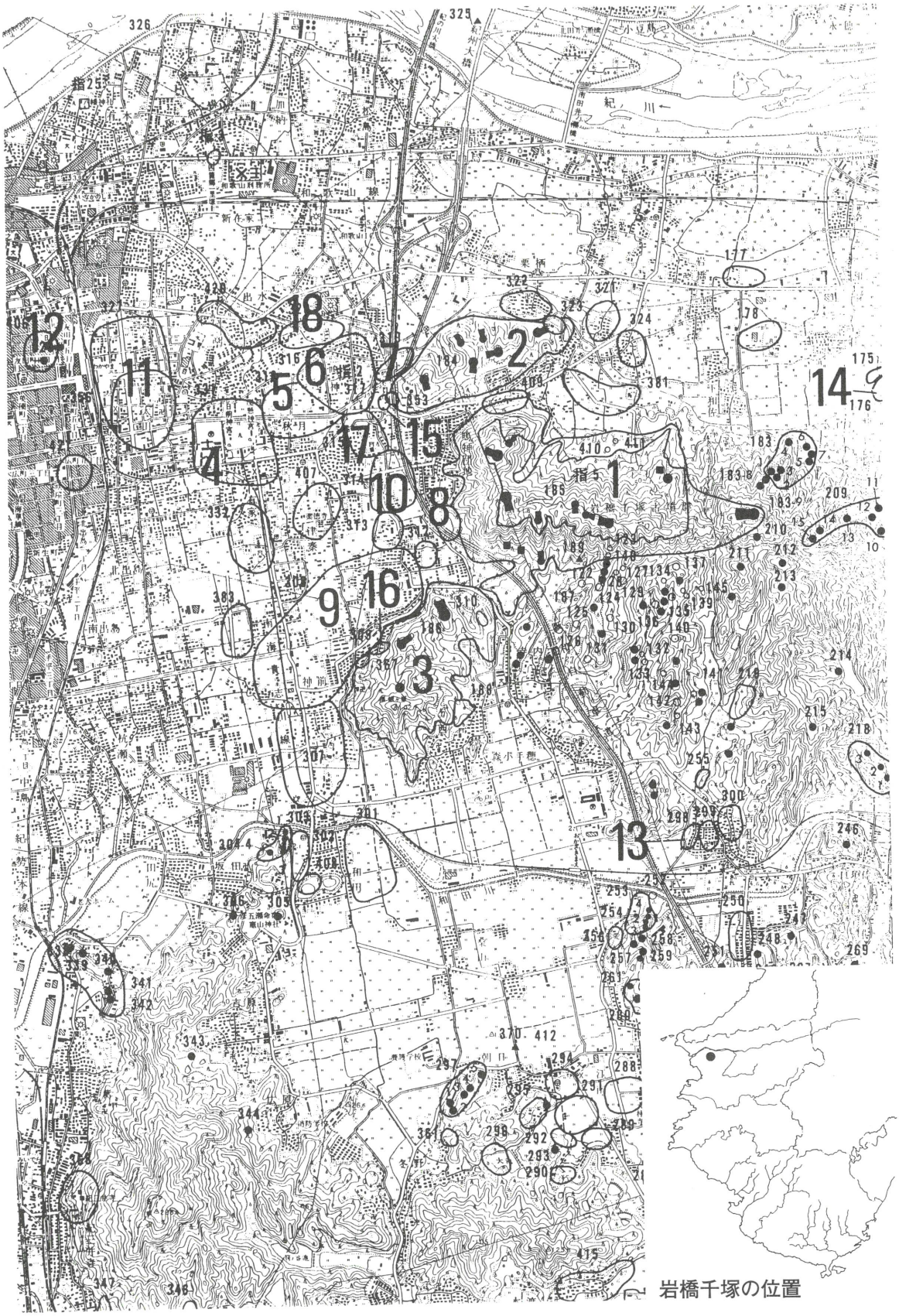
また、岩橋山塊の最高所に位置する天王塚古墳の封土や周辺から弥生時代後期の土器や柱状石斧が発見されており、付近に同時代の高地性集落が営まれている可能性が高い。

古墳時代には岩橋千塚西側の微高地に鎮座する日前宮周辺を中心として山麓部にかけて多数の遺跡が存在する。日前宮の西側に隣接する秋月遺跡（第１図４）では庄内期の井戸や布留式土器古段階の前方後円墳と方墳が確認されており、集落が途絶した後、墓域化している。

前方後円墳は秋月１号墳と呼ばれ、墳丘長は約27ｍで、幅や底面のレベルが一定でない周溝がめぐり、前方部先端の片端が途切れている。後円部には幅１ｍ前後のテラス状の平坦面がみられる。墳丘の上部は削平され、埋葬施設は不明であるが、周溝内から布留式土器古段階の広口壺・小型丸底壺、東海地方のＳ字状口縁台付甕が出土しており、本県では現在のところ最古の前方後円墳である。

日前宮から山麓部にかけて鳴神Ⅱ（第１図10）・Ⅲ（第１図17）・Ⅳ（第１図６）・Ⅴ（第１図５）・Ⅵ（第１図18）遺跡や音浦遺跡（第１図７）、大日山Ⅰ遺跡（第１図８）等が存在する。これらの遺跡の中で、古墳時代前期の幅数ｍの大溝が各所で検出されており、当時の灌漑用水であった名草溝だと推定されている。また、これらの遺跡の出土遺物には韓式系土器や陶質土器が多数みられ、滑石製模造品などの祭祀遺物が多いのも特徴である。

近年、ＪＲ和歌山駅西側の市街地域で友田町遺跡（第１図12）が確認され、古墳時代中期の掘立柱建物や溝等が検出されている。集落が日前宮周辺のみならず、さらに西側の平地部にも広がっていたことが明らかになってきた。



第1図　遺跡

古墳時代に続く遺跡は岩橋千塚周辺では顕著でないが、秋月遺跡で奈良時代の井戸や土坑が検出され、「太田」と墨書された馬形が出土している。太田・黒田遺跡では奈良時代の溝や井戸が確認され、上野廃寺や紀伊国分寺出土の瓦に類似した白鳳期から奈良時代の軒丸瓦が出土しており、郡衙等が存在した可能性も指摘されている。この時期には、紀伊の国府や国分寺も紀ノ川北岸に存在し、岩橋千塚周辺地域の勢力は衰退していたものと考えられる。

第Ⅱ章　調査経緯

第１節　岩橋千塚古墳群の概要

和歌山市の東部、紀ノ川下流南岸の標高約150ｍの岩橋山塊周辺には、現在知られているだけでも約800基近い古墳が現存する。国内では最大規模の群集墳であり、また石梁や石棚を備えた特徴的な石室構造から学術的価値が認められ、その一部は国の特別史跡に指定されている。古墳の築造時期は中期から後期にかけてで、６世紀後半がピークにあたる。現在確認されている古墳を墳形別にみると、前方後円墳27基、方墳４基、その他が円墳である。

古墳の内部施設は約半数程が判明しており、横穴式石室が約67％、竪穴式石室が約24％で、他に箱式石棺、粘土槨、粘土床、礫槨などがある。石室や石棺の構築には、近辺で産出する結晶片岩の板状節理面をもつ石材が使用されており、石棚や石梁・扉石などをもつ近畿地方では類例をみない構造の横穴式石室を成立させる要因となっている。

これらの造墓集団として日本書紀や古事記に記されている古代豪族紀氏が想定されている。紀氏は出自等不明な点が多いが、朝鮮半島に度々出兵したことが記されている。それを裏付けるように紀ノ川下流の大谷古墳から半島製とされる馬冑が、有田市の椒古墳からも半島製の蒙古鉢形冑や鉄戟が出土している。また、半島から搬入された可能性がある陶質土器や韓式系土器も多くの古墳や遺跡から多数出土している。

このように古墳時代、とりわけ中期から後期にかけての紀伊では半島から海上交通で直接招来された文物が多数広まっていたことが窺える。

同時期の古墳に目を転じれば、墳丘は前方後円墳や円墳など他の地域と同様であるが、内部施設に関しては、中期に河内や大和などでみられる巨大な長持形石棺を納めた竪穴式石室はほとんどみられない。

後期に盛行する横穴式石室も他地域の石室と大きく異なる構造をしており、海を隔てた朝鮮半島や四国の吉野川中流域、九州中部の肥後地域の石室と類似性が認められる。

岩橋千塚古墳群は地形的条件と過去の調査経緯から、①花山地区、②大谷山地区、③大日山地区、

④前山Ａ地区、⑤前山Ｂ地区、⑥前山Ｃ地区、⑦井辺地区、⑧寺内地区、⑨井辺前山地区に分けられる。この中で、古墳群形成期にあたる５世紀の中期古墳は北部及び西部の花山・大谷山・井辺前山地区に多く、造墓数が飛躍的に増加する６～７世紀の後期古墳は前山Ａ・Ｂ地区や井辺・寺内地区に多い。全長30ｍ以上の前方後円墳のほとんどが山頂の稜線上に立地し、小型の前方後円墳と大型の円墳は支尾根上に立地し、小型の円墳は谷状の部分に立地する例が多い。

第２節　研究史

岩橋千塚古墳群に関する最初の論考は、大野雲外が明治40（1907）年に著わした「紀伊国海草郡古墳石槨構造に就いて」『人類学雑誌』23－1である。これは当時の東京帝国大学理学部人類学教室教授の坪井正五郎たちのすすめで、大野が和歌山市の岩橋千塚古墳群を調査して報告したもので、現在の天王塚と将軍塚の平面図と断面図が載せられており、岩橋千塚古墳群の最初の学術的調査であった。また同じ頃、日本滞在中のイギリス人Ｎ．Ｇ．マンローが『先史時代の日本』の中で岩橋千塚古墳群を紹介し、天王塚などの実測図を載せている。

大正７（1918）年に和歌山県は岩橋千塚古墳群の調査保存を企画し、東京帝国大学教授黒板勝美に調査を依頼した。黒板の指導のもと、岩井武俊と田沢金吾が現地を調査し、現在、前山Ａ地区と呼んでいる地域の27基の古墳について写真撮影や実測図作成を行い、大正10（1921）年に『和歌山県史蹟調査報告』第一として出版している。これらの調査成果により古墳群の学術的価値が明らかになり、昭和６（1931）年に国の史跡に指定され、昭和27（1952）年には特別史跡となった。

昭和38（1963）年に和歌山市教育委員会は岩橋千塚古墳群の総合的な学術調査を計画し、関西大学考古学研究室に委嘱した。末永雅雄博士を団長とする調査団は岩橋千塚一帯を踏査し、花山６号墳、花山８号墳、大谷山22号墳、大日山35号墳、天王塚、将軍塚、郡長塚等の主要な古墳の調査を実施した。調査の成果は昭和42年に『岩橋千塚』という大冊の報告書にまとめられ、現在に至るまで基準資料となっている。

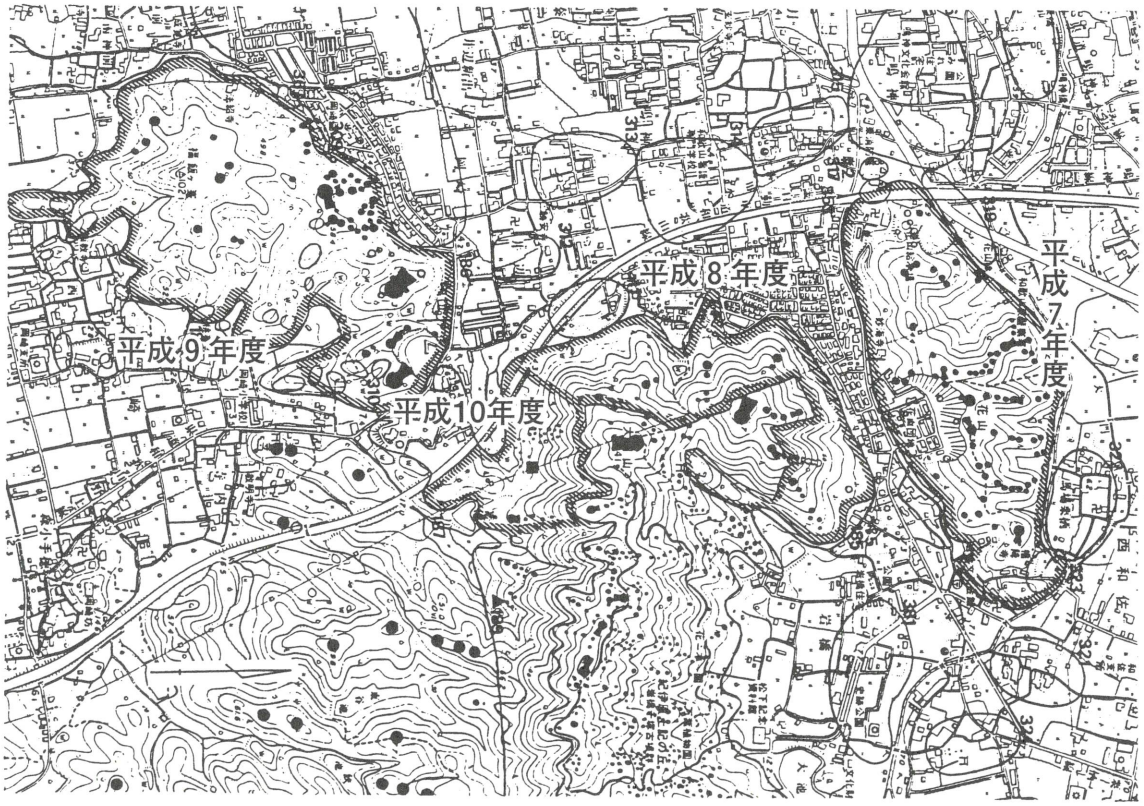
昭和43（1968）年には和歌山市教育委員会は同志社大学の森浩一氏に委嘱して、県下最大の前方後円墳である井辺八幡山古墳の調査を実施した。内部施設は未調査であったが、墳丘の確認調査や造り出し部の発掘調査が行われ、多数の埴輪や土器が出土し、古墳の築造年代がほぼ確定された。調査成果は昭和47（1972）年に『井辺八幡山古墳』という報告書にまとめられた。

昭和40年代後半から現在まで、県教育委員会や和歌山市教育委員会と財団法人和歌山県文化財センターによって、宅地開発及び道路建設や史跡整備に伴って岩橋千塚古墳群の大谷山４号墳・５号墳・６号墳・12号墳・13号墳・14号墳・15号墳・16号墳・17号墳・27号墳・28号墳、前山Ｂ100号墳・101号墳・102号墳・Ｋ-４号墳、寺内57号墳・山東22号墳等が調査されている。

第３節　調査経緯

和歌山県ではかねてより開発のおそれがある重要な遺跡について国庫補助事業で5カ年計画で調査を実施し、遺跡の保護資料を作成している。平成2（1990）年度から6（1994）年度にかけては、那賀郡岩出町所在の根来寺坊院跡の主要部である円明寺周辺や大伝法堂周辺の調査を実施し報告書を作成した。平成7（1995）年度からは和歌山市東部の市街地にあり、宅地や墓地の造成や道路建設等の開発のおそれがある岩橋千塚古墳群の発掘調査と分布調査を実施することになった。

平成7（1995）年度は花山古墳群の踏査と花山33号墳・36号墳の発掘調査を実施し、平成8（1996）年度は大日山古墳群と大谷山古墳群の踏査と大日山43号墳・58号墳・70号墳・71号墳の発掘調査を実施した。平成9（1997）年度は井辺前山古墳群の踏査と井辺前山24号墳・26号墳の発掘調査を実施した。平成10（1998）年度は井辺・寺内古墳群の踏査と寺内22号墳・23号墳の発掘調査を実施し、平成11（1999）年度は報告書作成作業を実施した。



第２図　調査範囲

参考文献

石部正志他1968「鳴神貝塚発掘調査概報」『和歌山県文化財学術調査報告』3　和歌山県教育委員会

関西大学考古学研究室1967『岩橋千塚』

財団法人和歌山市文化体育振興事業団1994『鳴神Ⅴ遺跡発掘調査概要報告書』

財団法人和歌山市文化体育振興事業団1995『鳴神Ⅵ遺跡第4次発掘調査概報』

財団法人和歌山市文化体育振興事業団1995『鳴神Ⅳ遺跡第6次発掘調査概報』

財団法人和歌山市文化体育振興事業団1998『友田町遺跡第2・3次発掘調査概報』

田沢金吾1921「岩橋千塚第一期調査」『和歌山県史蹟調査報告』第一

巽三郎1971『禰宜貝塚調査概報』和歌山市教育委員会

同志社大学考古学研究室1972『井辺八幡山古墳』

直良信夫1943「近畿地方の縄文式土器―紀伊鳴神貝塚の土器」『近畿古代文化叢考』

森浩一・大野左千夫1981「和歌山市太田・黒田遺跡」『日本考古学年報』21・22・23

森浩一・藤井祐介1965「岡崎縄文遺跡発掘調査報告」『和歌山市教育委員会社会教育資料』28　和歌山市教育委員会

森浩一他1965「井辺弥生式遺跡発掘調査報告」『和歌山市教育委員会社会教育資料』24　和歌山市教育委員会

山本高照1987「和歌山県秋月遺跡」『日本考古学年報』38

和歌山県教育委員会1971「鳴神Ⅱ遺跡」『昭和45年度阪和高速道路（近畿高速自動車道和歌山線）遺跡発掘調査概報』

和歌山県教育委員会1972「音浦遺跡」『近畿自動車道和歌山線埋蔵文化財報告書』

和歌山県教育委員会1972「大日山Ⅰ遺跡」『近畿自動車道和歌山線埋蔵文化財報告書』

和歌山県教育委員会1984『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』

和歌山県教育委員会1987『井辺前山古墳群とその関連遺跡』

和歌山県史編纂委員会1983『和歌山県史』考古資料

和歌山県史編纂委員会1994『和歌山県史』原始・古代

和歌山市教育委員会1964『花山古墳』

和歌山市教育委員会・関西大学考古学研究室1966『和歌山市花山西部地区古墳群調査概報』

和歌山市史編纂委員会1991『和歌山市史』第1巻

第Ⅲ章　調査成果

第１節　平成７年度花山古墳群の調査

花山丘陵は岩橋山塊の北西端にあたり、紀ノ川下流左岸の沖積平野に突き出た独立した小山塊で、東西約1300ｍ・南北約500ｍ、最高点の標高77.4ｍである。山地を形成する地層は造山活動によって生成した変成岩である三波川結晶片岩類から成る。この石材は板状節理面をもち、石室の用材として使用され、岩橋型石室を生み出す1つの要因となっている。

花山丘陵には東西に走る主稜線上や南北に派生する各支脈の稜線上、あるいは山腹に前方後円墳９基、円墳75基の計84基が存在したが、16基が破壊されて消滅している。花山古墳群の特徴として、1）前方後円墳の比率が高い。2）中期古墳の比率が高い。3）古墳の密集度がやや低い。等があげられる。

本年は、5カ年計画の岩橋千塚周辺古墳群確認緊急調査の初年度として花山古墳群の調査を企図し、平成８年２月から３月末まで、①前方後円墳である33号墳の調査、②同36号墳の調査、③未確認古墳の発見及び現存古墳の現況確認のため踏査を実施した。

①花山３３号墳

Ａ　立　地

花山33号墳は花山丘陵の中央部から北に派生する支尾根の標高約50ｍの端部に前方部を北に向け立地する。前面には紀ノ川、その背後に和泉山脈が眺望され、東西は谷で隔てられる。山裾には古墳時代の灌漑用水路であった宮井用水が現在も流れ、流域の田畑を潤している。

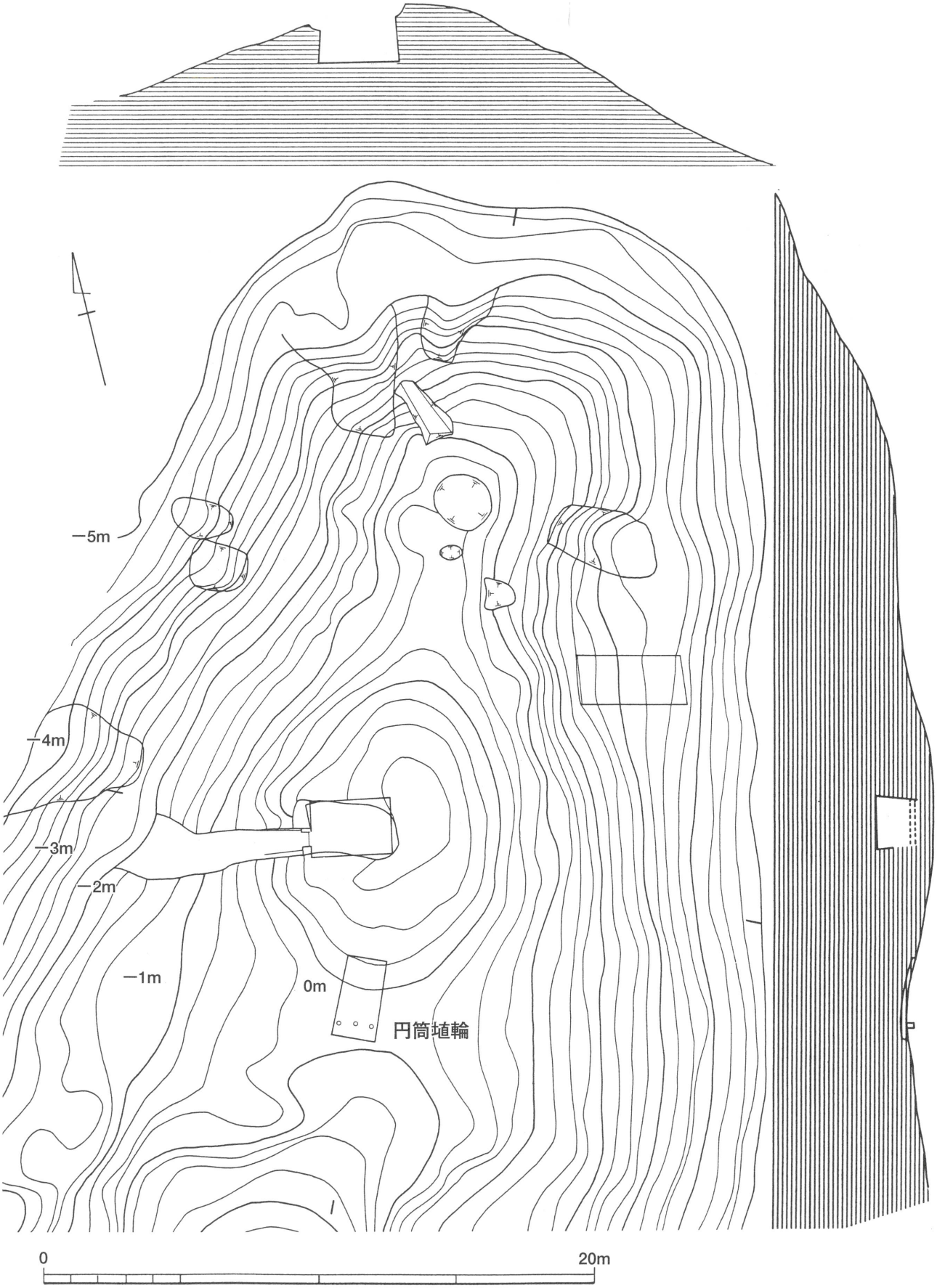
Ｂ　墳　丘

墳丘は現状で全長約32ｍ、後円部径は約18ｍ、高さ約4.0ｍ、前方部の幅約20ｍ、高さ約3.7ｍを計り、東くびれ部に方形の造り出しを備える。後円部に西に開口する古式の横穴式石室が１基存在する。後円部の墳丘は墳頂から1/3以上削平され、石室も上半部及び前壁部が破壊されている。墳丘周辺では円筒埴輪の破片が出土したが、東くびれ部のトレンチでは埴輪列は確認できなかった。

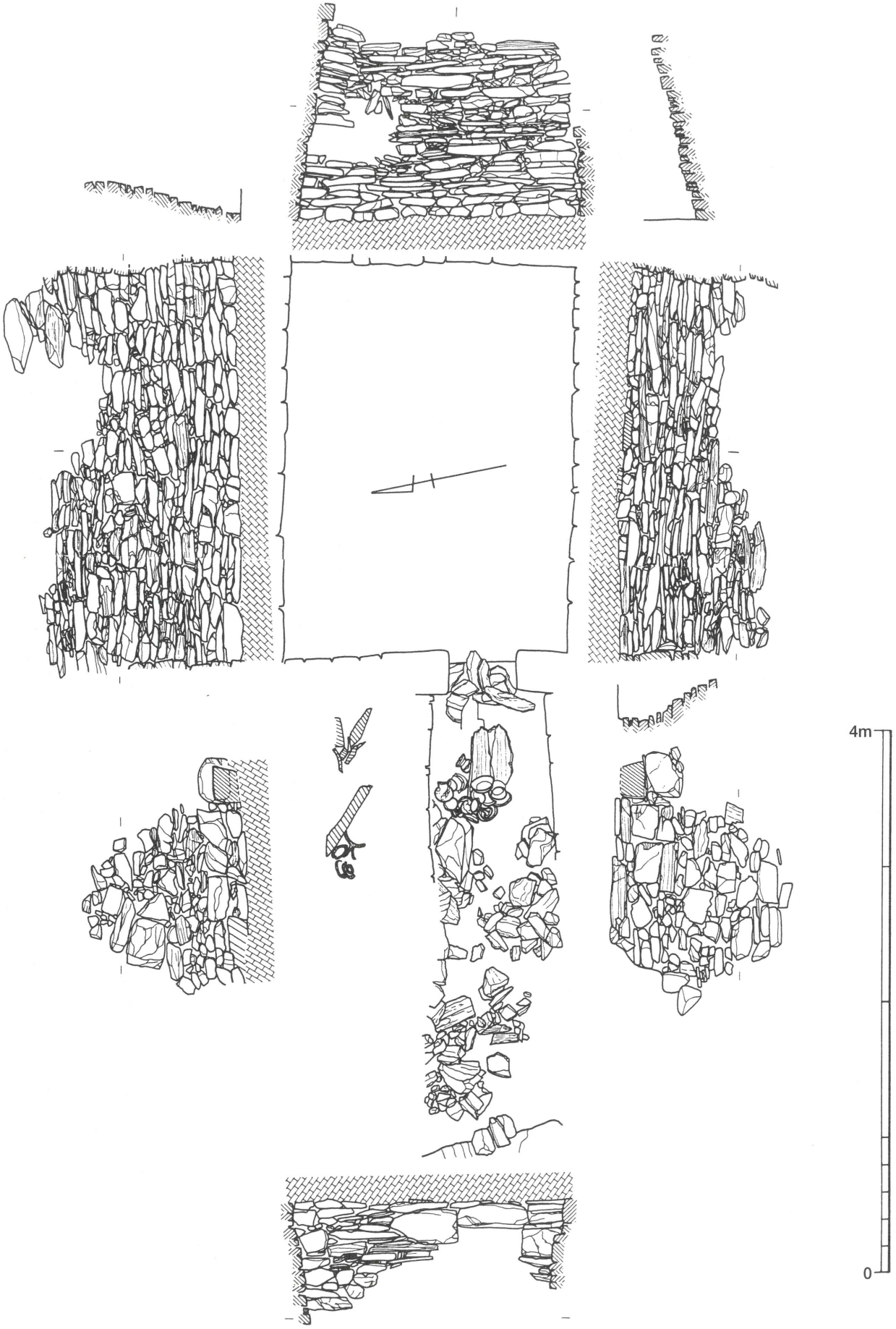
Ｃ　石　室

横穴式石室は玄室・通廊・羨道からなる岩橋型と呼ばれている岩橋千塚古墳群周辺の紀北地域に多く分布する石室で、全長約5.0ｍを計る。羨道は中央から左に片寄って造られた右片袖に近い平面プランで、玄門部の基底石も未発達で小型である。壁面の一部には酸化鉄らしい赤色顔料が遺存しており、古いタイプの岩橋型横穴式石室である。石材は花山山塊周辺で産出する結晶片岩を使用し、平積みにして壁面を造り上げている。

玄門部には緑泥片岩の扉石の一部と扉石に斜めに立てかけた支石が残り、羨道入口は結晶片岩の板



第３図　花山33号墳墳丘測量図　S＝1/200



第４図　花山33号墳石室実測図

石で乱石積みにして閉塞していた。玄室内は天井部から徹底的に盗掘されており、床面に敷かれていたと考えられる数㎝大の円礫もほとんどすべて持ち去られ、墳丘頂部から西部にかけて散乱していた。

D　遺物出土状況

遺物は玄室からは埴輪と須恵器の破片が少量出土したのみであったが、羨道扉石の支石の基底部から20個体の須恵器と土師器が原状を保って出土した。器種の内訳は土師器は甕1点・高杯1点、須恵器は杯身6点・杯蓋6点・高杯3点・瑞3点である。

羨道部での墓前祭祀を示す一括遺物といえるが、これらの遺物が出土した面の下層から、緑色凝灰岩製管玉4点と淡青色のガラス製管玉1点が出土している。層位から時間的前後関係は明らかであるが、後者の遺物群には土器資料を欠くため時期決定の決め手はない。

このほか、後円部の墳丘撹乱土からは馬具2点と鉄器1点の破片が出土した。

E　出土遺物（第5・6図、1～28、ＰＬ13・14）

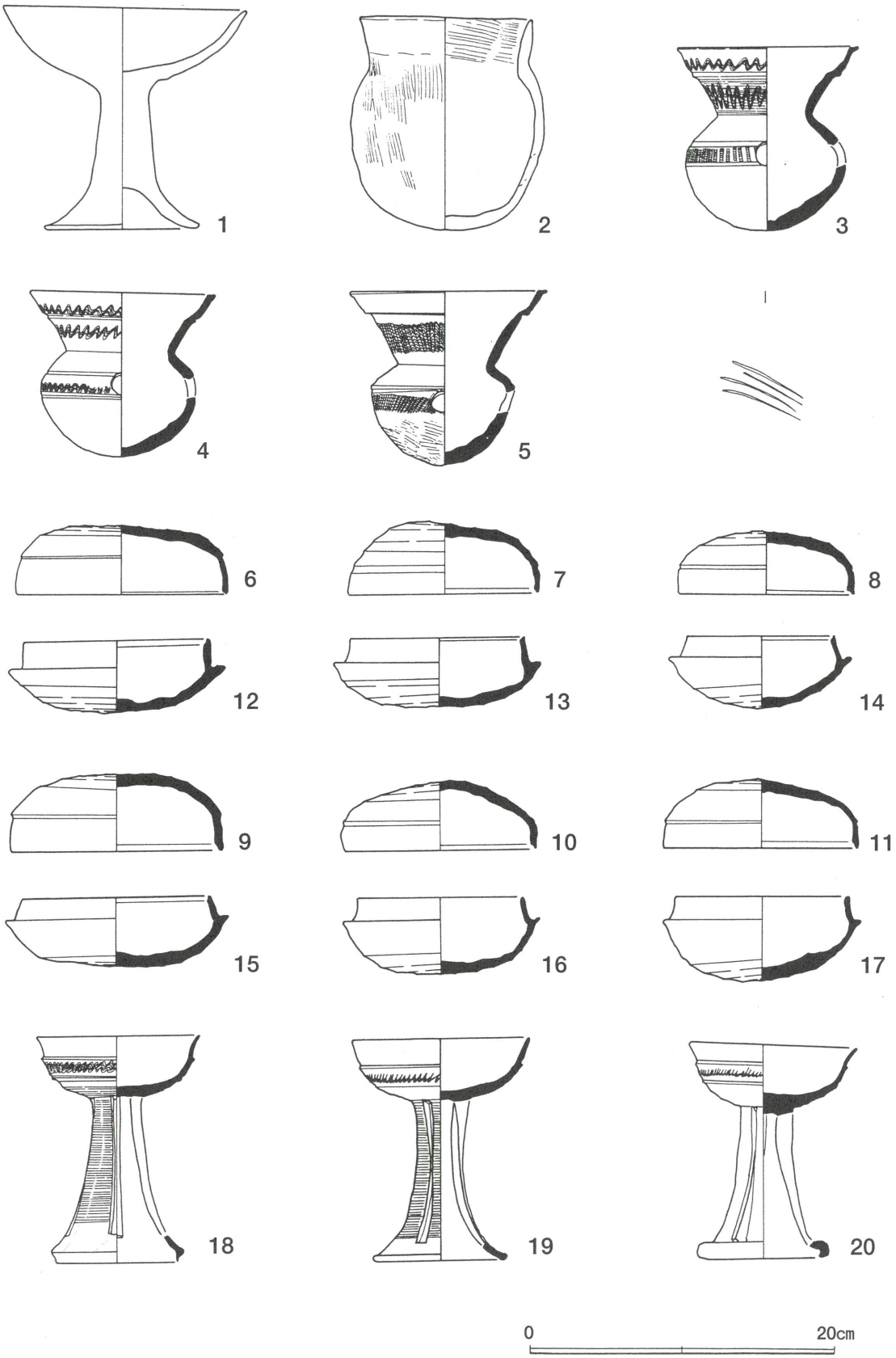
土師器には高杯（１）と甕（２）が存在する。(1) は器面の磨滅のため調整等は不明である。(2) は体部外面と口縁部内面にハケ調整が、底部外面はナデ調整が行われている。体部内面は乱雑なナデ調整のため、粘土紐の接合痕が残存しており、器壁は厚い。

瑞（3～5）の頸部は、太く短く外上方に広がる形態を呈す。(3・4) は、口縁部、頸部および凹線に画された体部中央部に波状文または櫛描き列点文が施される。(5) は頸部と体部中央部に波状文や櫛描き列点文が行われるが、列点文の下側には凹線は施されず、肩部にのみ行われる。また底部外面には平行タタキメが残存する。

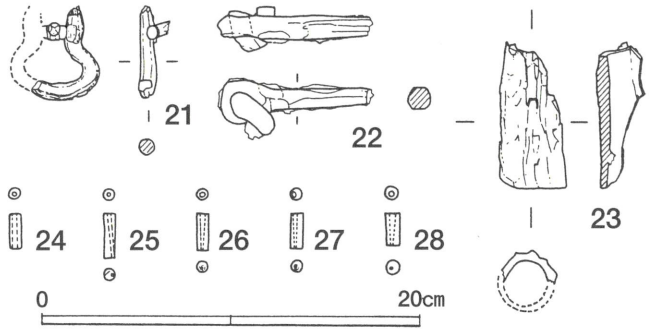
杯蓋（7～11）は、(7・8) の天井部がやや丸みを帯びた形態を呈すほかは偏平化する。天井部と口縁部とを分ける稜は凹線化し、口縁端部は内傾して面を形成することなどから、形態的特徴はＭＴ15型式に該当する。ただし、回転ヘラケズリが天井部1/2以上の範囲に及んでおり、回転ヘラケズリの範囲が広い。

杯身（12～17）には、底部の形態が丸みを帯びるもの（14・16・17）と、偏平な形状を呈すもの（12·13·15）の二つに分けられる。たちあがりは、(12) が長く直立するほかは、総じて短く内傾する。口縁端部には、内傾して浅く凹む面を形成するもの（12·13·14·15）と丸く収めるもの（16·17）とが認められる。

無蓋高杯（18～20）は杯部が浅く、口縁部が外上方にひらく形状を呈している。また脚部は、細長い形態を呈す長脚１段透かしである。透かし孔はすべて長方形であるが、(18) は４方向に、(19・20) は３方向に穿孔している。(18・19) の脚部にはカキメが施されている。また、杯部外面にはヒネリ出し突帯と波状文が確認できる。鉄器類には馬具および武具が確認できる。(21) は刺金が欠損しているものの、鞍と鐙をつなぐ力革の鉸具または鞍の一つとみられる。(22) は銜の部分が欠損しているものの引手の一部と推測される。(23) は六角形以上の多角形の形状を呈しており、鉄鉾の袋部である。ま



第５図　花山33号墳出土遺物



第６図　花山33号墳出土遺物

た管玉（24～28）は、（24）がガラス製であるのを除くと片面穿孔の緑色凝灰岩製である。

以上のように鏡や杯身の一部の形態的特徴に若干古い様相が残存するが、総じてMT15型式平行期と考えられる。また鉄鋌については、大谷古墳でも5点出土し、半島色の強い遺物であることが指摘されており、本墳の被葬者像を推定する上で示唆的である。

F　小　結

花山33号墳は全長約32ｍの中型の前方後円墳で、石室も玄室長が約3.0ｍと傑出した規模ではないが、6世紀代の古墳としては首長クラスの大型前方後円墳である花山6号墳（49ｍ）、大日山35号古墳（73ｍ）、大谷山22号墳（80ｍ）、井辺八幡山古墳（88ｍ）、天王塚古墳（86ｍ）などの被葬者に次ぐ有力な人物の墓であったと考えられる。馬具やガラス製管玉などの副葬品がそれを物語っている。

羨道部出土の土器群は最終祭祀を行った時期を示すにすぎないが、6世紀第1四半期にあたる。石室の形態から、築造時期が大きく遡ることはないと考えられる。

②花山３６号墳

A　立　地

花山36号墳は花山丘陵の中央部から北西に派生するやや幅広い支尾根の標高約60ｍの平端部に前方部を北北西に向け立地する。花山33号墳と同様に前面には紀ノ川、その背後に和泉山脈が眺望され、東西は谷で隔てられている。

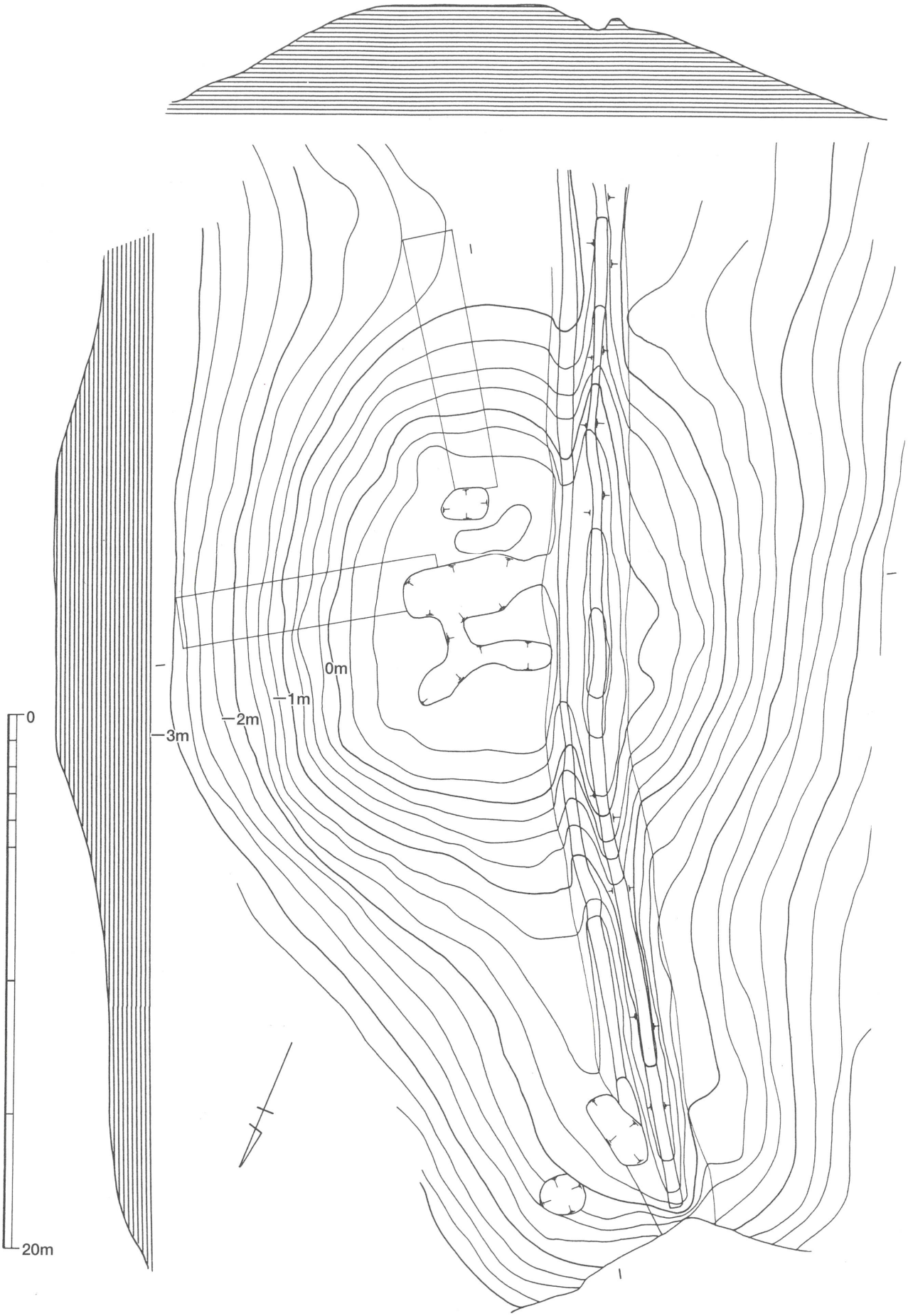
B　墳　丘

墳丘は現状で全長約42ｍ、後円部径は約25ｍ、高さ約4.5ｍ、前方部の幅約18ｍ、高さ約3.5ｍを計る。後円部の東側とくびれ部は直線的で、前方部と後円墳の主軸がずれている。主軸に沿って土塁と山道が築かれており、墳丘が破壊されている。後円部の墳頂はかなり削平されているようで、前方部の端も崖面で崩壊している。前方部と後円部には6個所の撹乱坑がみられる。

墳丘上からは円筒埴輪の破片が少量出土したが、トレンチ部の掘削では埴輪列は検出されなかった。墳丘盛土から弥生時代末から庄内式土器併行期の甕形土器や壺形土器の破片が出土しており、同時代の遺構が古墳築造以前に周辺に存在していた可能性が考えられる。

C　埋葬施設

後円部には結晶片岩の板石が散乱しており、竪穴式石室か礫槨が築かれていたと推定される。しかしながら、撹乱坑やトレンチの断面観察では埋葬施設の痕跡を確認することはできなかった。



第７図　花山36号墳墳丘測量図　Ｓ＝1/200

D　遺物出土状況

遺物は墳丘上に円筒埴輪の破片が少量散布していた。墳丘盛土からは円筒埴輪の破片とともに、弥生時代末から庄内式土器併行期のものと考えられる平行タタキ目をもつ甕形土器の口縁部と壺形土器の底部の破片が出土した。

E　小　結

花山36号墳は全長約42ｍの前方後円墳で、内部施設は竪穴式石室である可能性が高い。古墳に樹立された埴輪はなかったようである。築造時期は不明である。

③踏　査

花山古墳群は昭和40年代中頃までは詳細な分布調査が行われず、古墳の数や分布状況等は不明であった。昭和48（1973）年に県教育委員会によって詳細分布調査が実施され、初めて分布状況が明らかになった。その後、昭和62（1987）年にも分布調査が実施されている。

今回は古墳が未確認である小支尾根の７地点を中心に踏査を実施した。しかしながら、各地点では古墳らしき痕跡は確認できなかった。この結果、花山古墳群の分布状況の特徴として以下の点が指摘できる。花山古墳群では東西に延びる主丘陵線上に各時期最大規模の前方後円墳が築かれ、主丘陵線から北・南・西に派生する支尾根上に中規模の前方後円墳や円墳が築かれている。これ以外の小支尾根や谷状地形部には古墳は築かれていない。前山地区などと比較すると全体的に古墳の密集度は低い。

現存する古墳の保存状況は、ほとんどすべての古墳に盗掘坑がみられ、原型をとどめている古墳は僅かである。花山丘陵の南側と西側は昭和30年代から始まった土取り工事と宅地開発によって大きく削り取られている。北に延びる尾根上の古墳は比較的旧状を保っている。

第２節　平成８年度大谷山・大日山古墳群の調査

大谷山は岩橋山塊の西北端にあたり、紀ノ川下流左岸の沖積平野に突き出た小山塊で、北の花山とは低い鞍部によって相対峠している。最高点の標高132.6ｍで、頂上には全長約80ｍの前方後円墳である大谷山22号墳が占地している。大谷山古墳群では南北や東西に派生する稜線上に前方後円墳6基、円墳15基の合計21基が存在したが、3基が破壊されて消滅している。

古墳群の21基の内14基が発掘調査されており、岩橋千塚古墳群の中では、最も実態が明らかになっている支群である。古墳群の特徴として　1）前方後円墳の比率が高い。2）後期古墳の比率が高い。3）５世紀末から６世紀前半の古いタイプの横穴式石室が多い。4）古墳の密集度が低い。ことがあげられる。

大日山古墳群は大谷山から南に連なる大日山を中心として、その周辺に派生する尾根上の古墳を含む。最高点の標高は141.8ｍで、頂上には全長約73ｍの前方後円墳である大日山35号墳が占地し、眼下には古代から現在まで紀伊における祭祀の中心地であった日前宮周辺の沖積平野が広がっている。

大日山古墳群は前方後円墳２基と円墳49基の51基から構成されることが知られていたが、今回新たに、西側の谷部で円墳２基を発見して53基となった。その内、調査された古墳は今回の４基を含めて５基で、内部施設等不明な古墳が多い。古墳群の特徴として、1）前方後円墳の比率が低い。2）横穴式石室の比率が高い。ことなどがあげられる。

本年は、5カ年計画の岩橋千塚周辺古墳群確認緊急調査の２年目として大谷山古墳群と大日山古墳群の調査を企画し、平成９（1997）年２月から３月末にかけて、未確認古墳の発見及び現存古墳の現況確認のための踏査と４基の円墳の発掘調査を実施した。発掘調査を実施したのは、踏査中に大日山の西側の谷部で新たに発見した①大日山70号墳と②大日山71号墳、その南に隣接する尾根の先端部に位置する③大日山43号墳、大日山の西部に延びる支尾根の先端部に位置する④大日山58号墳である。

①大日山７０号墳

Ａ　立　地

大日山70号墳は大日山山頂から西へ延びる尾根と北北西に延びる尾根に挟まれた谷部の標高約65ｍの緩斜面に立地する。尾根上の古墳と比較すると、眺望や日照条件の点で劣る。

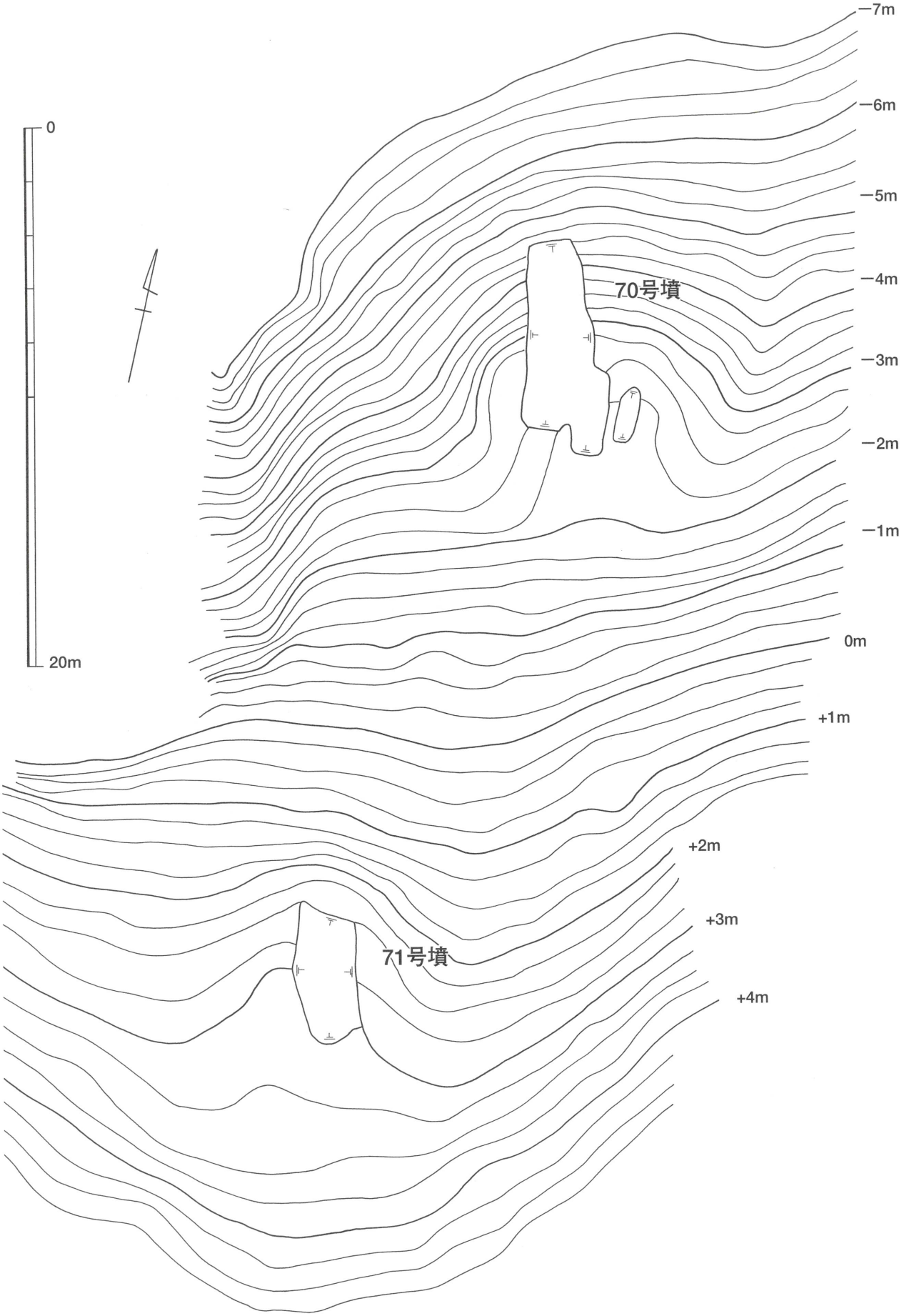
Ｂ　墳　丘

墳丘は円墳で、現状で直径約14.0ｍ、高さ約3.5ｍを計る。墳丘は墳頂から1/3以上削平され、石室も上半部及び羨道部が破壊されて、石材が抜き取られている。墳丘周辺では器財埴輪の破片が１点出土したが、本古墳に伴うものではないようである。

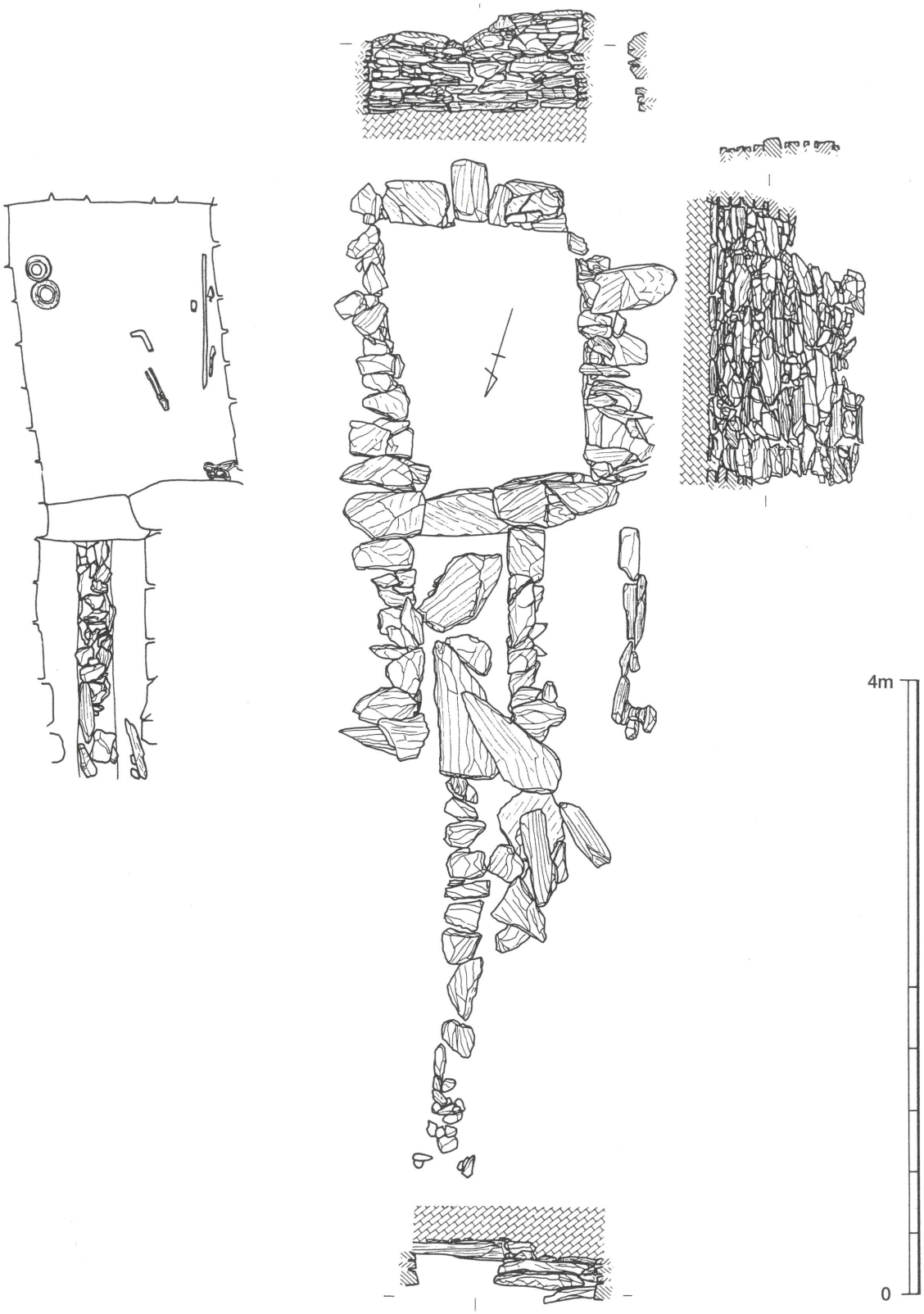
Ｃ　石　室

石室は横穴式石室で、玄室・通廊・羨道からなる岩橋型と呼ばれている岩橋千塚古墳群周辺の紀北地域に多く分布する石室で、全長約3.5ｍを計る。玄室長は約1.9ｍ、幅1.3ｍとやや小型の部類に属し、羨道が中央から右に片寄って造られた左片袖に近い平面プランで、古いタイプの岩橋型横穴式石室である。玄門部の基底石はやや大型の硬質の結晶片岩である。開口方位は北北西である。玄室内の床面は一部を除いて盗掘を免れており、やや軟質の片岩の岩盤を掘り窪めて、側壁を築いた後に数㎝大の川原石が敷かれている。

石材は大日山塊周辺で産出する結晶片岩を使用し、小口積みと平積みにして壁面を造り上げている。羨道部には緑泥片岩の扉石の一部が残り、羨道入口の閉塞石は残されていない。玄門基底部から羨道部には岩盤を掘り窪めて幅約0.25ｍの排水溝が付設されている。硬質の片岩の板石で蓋をされ、内部には地山である軟質の片岩の破片が充填されていた。地山の岩盤のレベルが玄室奥から見て右側が低く、左側が高いため、排水溝が右側に設けられたものと考えられる。古いタイプの岩橋型横穴式石室は圧倒的に右片袖傾向の石室が多いが、本石室の場合は葬法のイデオロギーが反映されたというよりは、岩盤の傾斜と谷部という立地条件から左片袖式になったものと理解できる。



第８図　大日山70号・71号墳墳丘測量図　Ｓ＝1/200



第９図　大日山70号墳石室実測図

D　遺物出土状況

遺物は玄室の右奥壁近くから須恵器の壺1点と陶質土器の壺１点が並んで出土した。左側壁に沿って直刀１点、鉄鏃１点、小刀１点、鉇１点、鑿１点、袋状鋳造鉄斧１点が出土した。左袖部の隅では轡が出土し、中央部からやや左側壁に近くで、鉄鎚１点、鉄鉗１点が出土した。奥壁近くで濃青色のガラス玉２点が出土した。

羨道部の埋土からは須恵器の破片が出土した。器種の内訳は器台・高杯・杯・短頸壺である。玄室内の遺物の出土状況から、左側壁に沿って木棺等に納めた遺骸が１体配置されていた可能性が高い。

岩橋型横穴式石室では遺骸を石室の主軸と直交方向に配置する例が多いが、本古墳例では平行方向で配置されている。追葬の痕跡は見受けられない。石室の埋土から弥生時代の石鏃が１点出土している。

E　出土遺物（第10図、35～49、ＰＬ15）

ガラス丸玉（35・36）いずれも内部の気泡の状況などは判明せず、製作技法についてはわからない。鉄器類（37～42）武器類と工具類が出土した。

武器類には、平根式の鉄鏃（37）、小刀（38）、直刀（39）がある。直刀は銹が著しく、目釘穴の位置は確認できないが、所々に木質が遺存している。

工具類は、袋状鋳造鉄斧（40）の他、鑿（41）・鉄鎚（42）・鉄鉗（43）の鍛冶工具が出土した。鎚は図の向きで右側が打面で、中心よりやや右寄りに柄穴がある。

須恵器（44～49）杯蓋（44）の口縁端部は内傾する面をなしているが、口径に対して器高が低い。杯身（45）も器高が低く、口縁端部は丸く、立ち上がりは短くて内傾している。こうした特徴からみて、これらの蓋杯はＴＫ10型式に平行する時期のものと判断される。

高杯（47）は脚裾部を欠損しているが、長脚一段三方透かしのもので、蓋杯と同じ時期のものである。

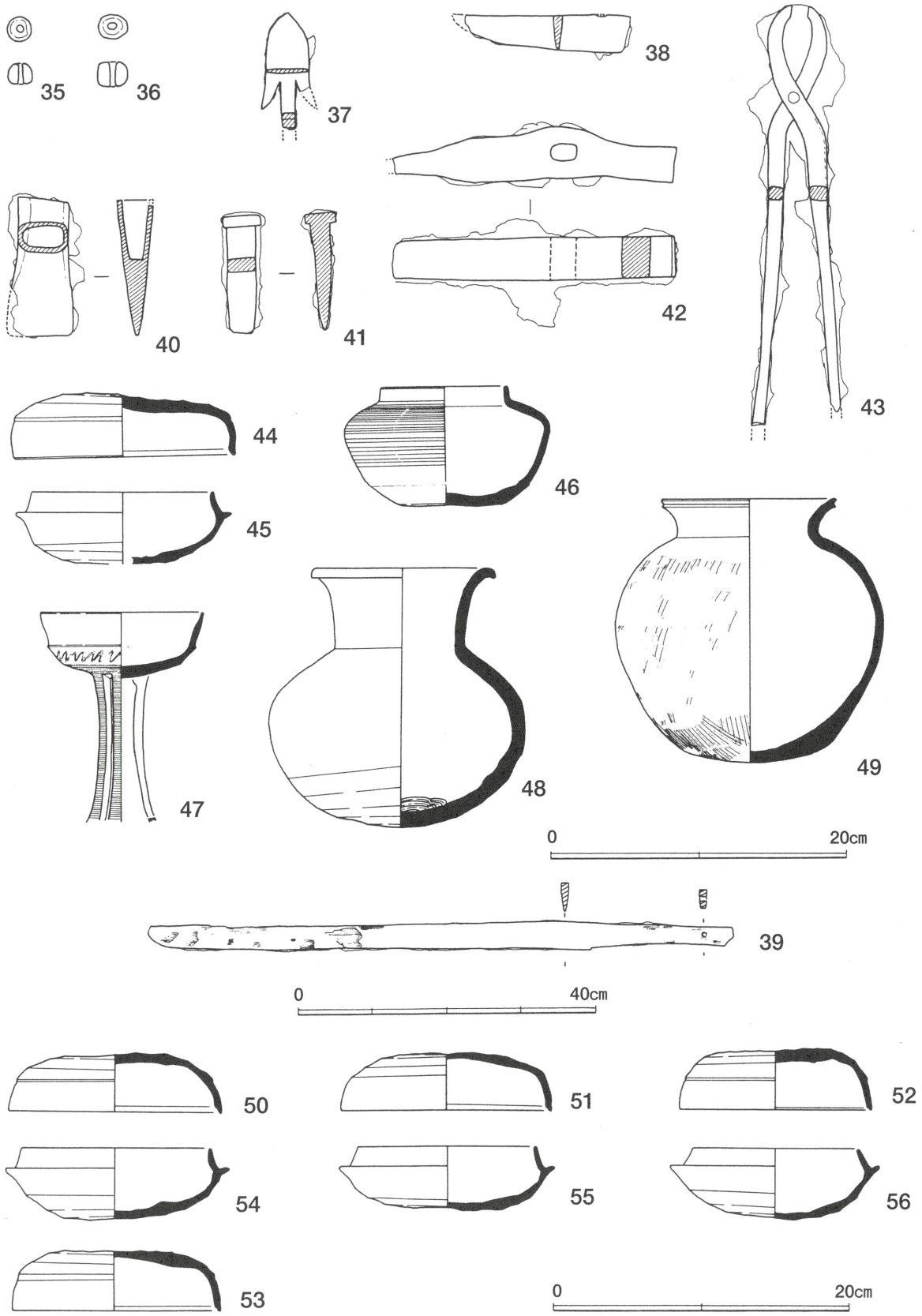
壺は、短頸壺（46）・長頸壺（48）・広口壺（49）と多種である。広口壺は口縁端部の形態や胎土および色調の状況からみて、陶質土器の公算が大きいと思われる。

F　小　結

大日山70号墳は直径約14ｍの中型の円墳で、石室も玄室長が約1.9ｍとやや小型の石室であるが、玄室内には多様な鉄製工具等の副葬品が撹乱されずに遺存していた。鉄鉗と鉄鎚は本県では初めての出土例である。

被葬者は鍛冶工人を統括する有力者で、朝鮮半島色の強い陶質土器・鍛冶具が副葬されていることから、半島から渡来した人物かその子孫ではないかと推定される。

築造時期は、石室の形態と須恵器の型式から6世紀第２四半紀頃で、大谷山6号墳と大谷山22号墳の間に位置するものと考えられる。大日山70号墳は本県の後期古墳の葬法と副葬品の在り方、横穴式石室の変遷を考える上で貴重な資料を提供した。



第10図　大日山70号墳・71号墳出土遺物

②大日山７１号墳

A　立　地

大日山71号墳は70号墳から約15ｍ東に上った谷状の緩斜面に位置する。

B　墳　丘

墳丘は円墳で、現状で直径約14ｍ、高さ約2.5ｍを計る。上部は約1/3程削平されている。

C　埋葬施設

埋葬施設は、竪穴式石室であるが、天井石や側壁は一部を残して、破壊されていた。規模は推定値で、長2.2ｍ、幅0.85ｍ、高さ0.5ｍである。床面に拳大の川原石を敷設してその上に側壁の結晶片岩を小口積みにしている。

D　遺物出土状況

遺物は石室外の撹乱土中から須恵器の杯が７点出土した。石室の埋土から砥石１点と明治２年の銘がある一銭銅貨が１点出土した。このことから、明治時代の前半頃に本古墳が破壊を受けて、石材が抜き取られて石垣等に転用されたのではないかと推定される。

E　出土遺物（第10図、50～56、ＰＬ16）

杯蓋（50～53）は径の大型化が進んでおり、偏平な形態を呈す。天井部と口縁部とをわける稜線は凹線化しており、(52）では明瞭な凹線も認められない。また、口縁端部には内傾する面が認められる。杯身（54～56）も大型化が進んでおり、口縁端部に面を持つものはなくすべて丸くおさめられている。立ち上がりは内傾し、受部が水平にのびており、全体的に鈍い。

以上のように杯蓋と杯身の形態的特徴は、総じてＴＫ10型式に該当する。しかしながら杯蓋の天井部および杯身の底部は1/2～2/3の範囲を回転ヘラケズリしており、形態的特徴に比して回転ヘラケズリの範囲は広い。

F　小　結

大日山71号墳は竪穴式石室をもつ直径約14ｍの円墳で、６世紀中頃の築造だと考えられる。

③大日山58号古墳

A　立　地

大日山58号墳は大谷山の南部から西向きに舌状に派生する支尾根の標高約45ｍの端部に位置する。

B　墳　丘

墳丘は円墳で直径約18ｍ、高さ約4.0ｍである。墳丘は墳頂が削平され、盗掘坑が開いている。墳丘には埴輪は伴わない。

C　石　室

石室は天井と東側壁が破壊されており、断定はできないが、玄門部がやや挟まった細長い竪穴系横穴式石室だと考えられる。推定規模は玄室長約1.9ｍ、幅0.8ｍ、羨門部長約0.4ｍ、羨道長約1.0ｍであ

る。開口方位はほぼ磁北である。

玄門部には基底石が敷かれ、玄室内には数㎝大の円礫の上に偏平な大型の板石が敷かれていたようである。石材は小口積みを基本として、平積みもみられる。側壁の持ち送りが他の岩橋型横穴式石室より緩やかで、一見すると竪穴式石室のようである。

岩橋千塚の横穴式石室では数が少ないタイプで、開口方位も磁北を意識して造られており、他の石室の開口方位が南から西方位が多いのと明らかに異なる。玄室床面に板石を敷いている点等、奈良県南部の竪穴系横穴式石室に類似している。

D　遺物出土状況

遺物は玄室の床面近くから、撹乱された状況で須恵器の杯と短頸壺の破片が少量出土した。陶邑編年のＴＫ43型式に平行する時期のものである。

E　小　結

大日山58号墳は墳丘規模は直径約18ｍとやや大きめの円墳だが、石室全長が約3.3ｍの小型の竪穴系横穴式石室を埋葬施設としていた。築造時期は６世紀第３四半期頃と考えられる。平成６年度に調査を実施した大谷山17号墳も２基の竪穴系横穴式石室を内部施設としており、岩橋千塚古墳群にも竪穴系横穴式石室が少数ながら存在することが明らかになった。

④大日山４３号墳

A　立　地

大日山43号墳は大日山の中央部から西北西に延びる支尾根の標高約85ｍの端部に位置する。大日山70号・71号墳の位置する緩斜面の南に隣接する尾根である。

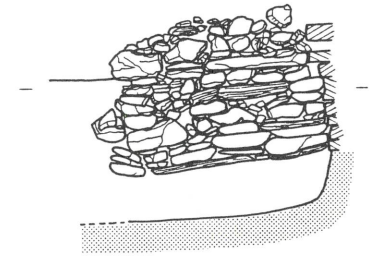
B　墳　丘

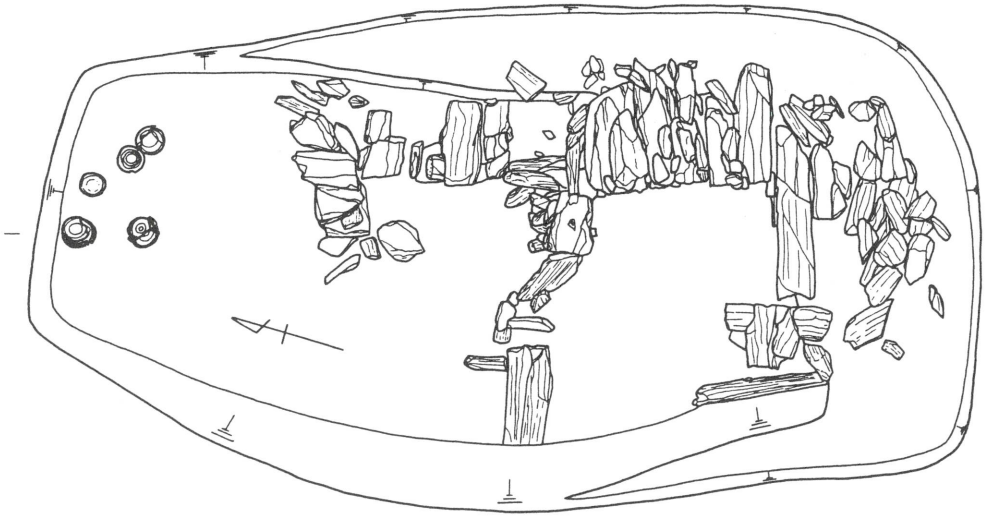
墳丘は円墳で直径約15ｍ、高さ約3.0ｍである。墳丘は1/3以上が削平され、盗掘坑が開いていた。墳丘の斜面には約２ｍ間隔で円筒埴輪が囲繞する。墳丘上面で動物埴輪の脚や盾形埴輪の破片が出土しているため、石室の入口付近ではなく、墳丘上に埴輪が樹立されたようである。周辺地形から前方後円墳の可能性があったため尾根側にトレンチを入れたが、周溝や円筒埴輪の痕跡は無く、円墳であることを確認した。

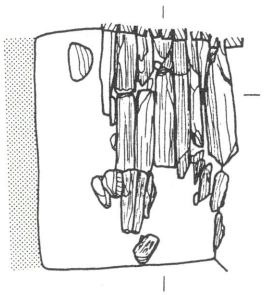
C　石　室

石室は岩橋型の横穴式石室で、上部約2/3の石材が抜き取られていた。玄室床面も撹乱を受けていた。規模は玄室長約2.2ｍ、幅1.8ｍ、羨門部長約0.35ｍ、幅約0.6ｍ、羨道長約2.1ｍ、幅約0.9ｍである。岩橋千塚古墳群の横穴式石室の中では平均的な規模である。羨道が左側に寄って取り付けられている左片袖傾向の石室である。開口方位は西北西である。

石室は尾根の先端部のやや軟質の岩盤を掘削して床面を平坦に整形して玄門部から羨道部の外側まで排水溝の掘方を掘削し、玄室内に数㎝大の円礫を敷き詰め、その上に偏平な結晶片岩の板石を小口

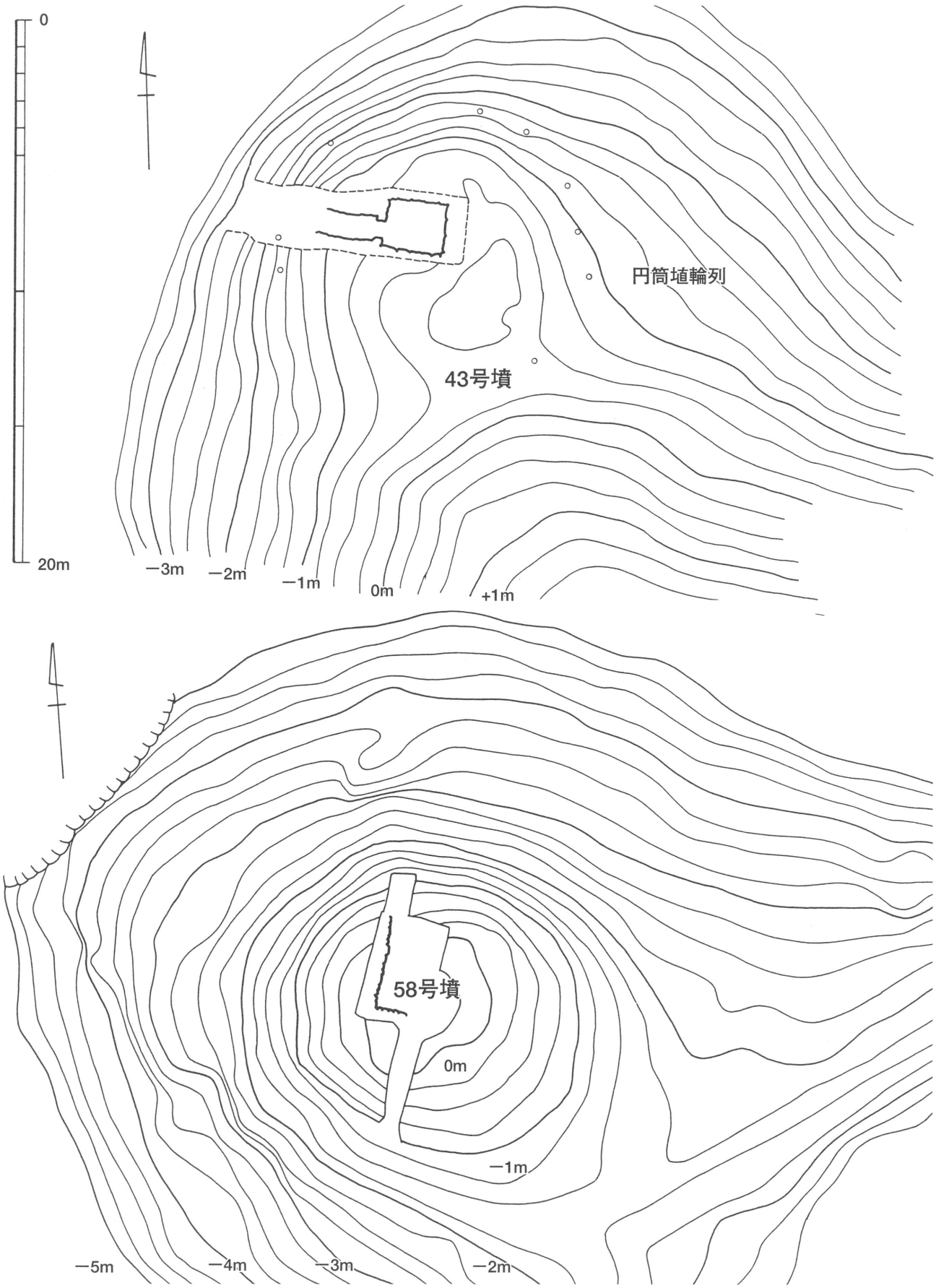




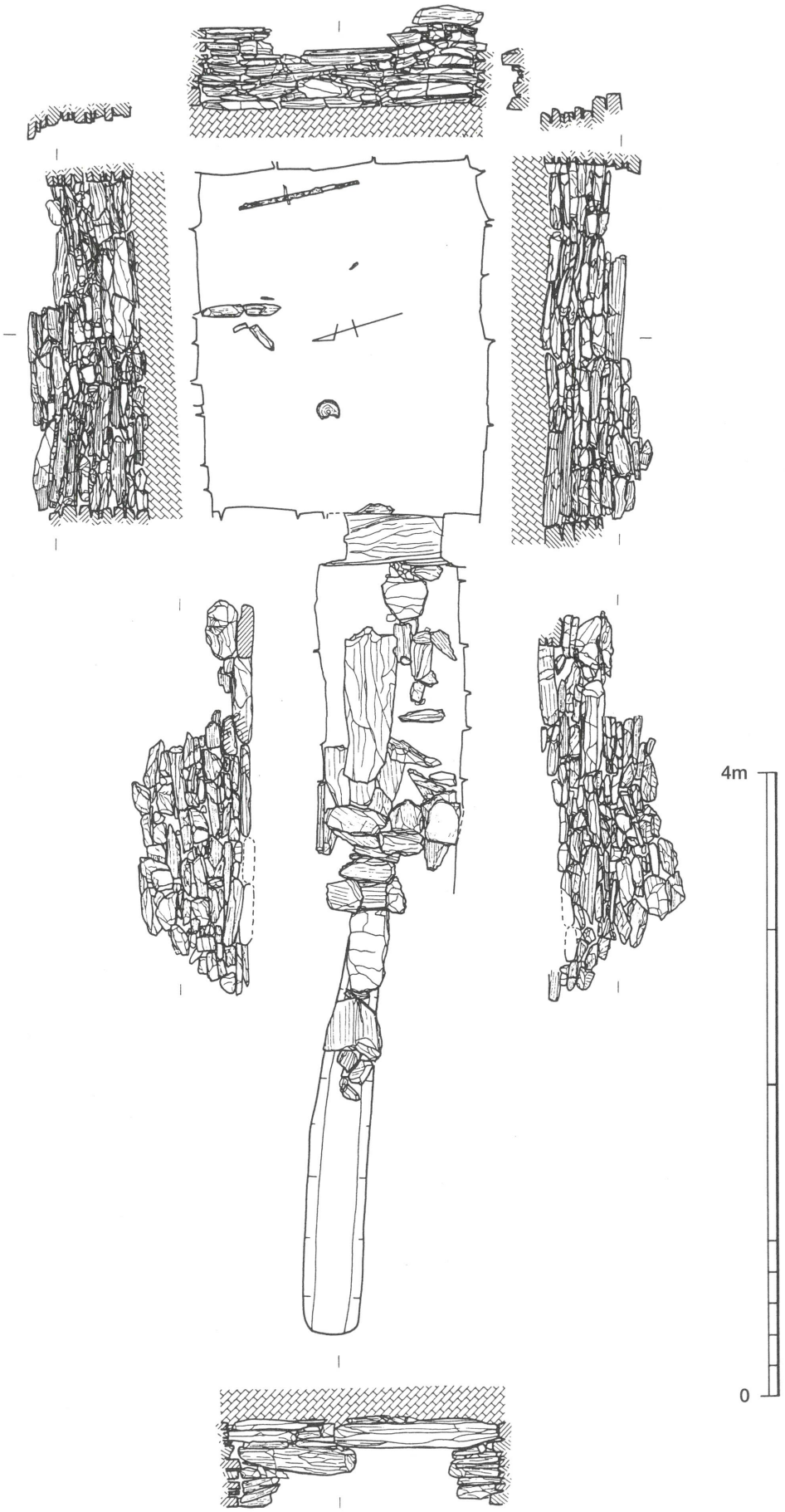


0　　4m

第11図　大日山58号墳・71号墳　石室実測図



第12図　大日山43号墳・58号墳墳丘測量図　S＝1/200



第13図　大日山43号墳石室実測図

積みや平積みにしている。

石室は左の側壁が玄室・羨道共に並行に延びており、奥壁と左側壁が石室構築時の基準線となっている。石室と墳丘との関係では、奥壁と左壁の交点の角が墳丘のほぼ中央に当たるように設計されている。玄室や羨道の基底部には大型の石材が使用されている。玄室と羨道はほぼ同じレベルで段差はない。羨道床面は入口に向かって緩やかに下がっている。排水溝には玄室内と同様の円礫が充填され、偏平な片岩で蓋をされている。

玄門部から約1.2ｍ離れた羨道に扉石が１枚立って残っており、その外側には閉塞石だと考えられる偏平な板石が水平に積まれて２段残っている。玄室右壁の中央からやや奥に奥壁に並行する仕切り石が残っていた。

羨道右側壁の基底石2個には鋭利な金属による加工痕がみられ、石材を積み上げた後で、整形したものだと考えられる。

Ｄ　遺物出土状況

遺物は玄室の床面では、奥壁近くから直刀１点、鈍１点、右袖部の角から轡１点、仕切り石の前から鉄製Ｕ字形鍬先１点、後ろから鈍１点、中央やや奥寄りで鉄鏃の茎１点、中央やや前寄りから須恵器の杯蓋１点が出土した。他に石室の埋土から須恵器の杯身・蓋・短頸壺・甕、埴輪の破片が出土した。なお、鉄器類の一部は錆化が著しく、図化できていない。

墳丘からは円筒埴輪、動物埴輪、盾形埴輪、家形埴輪などの破片が出土した。

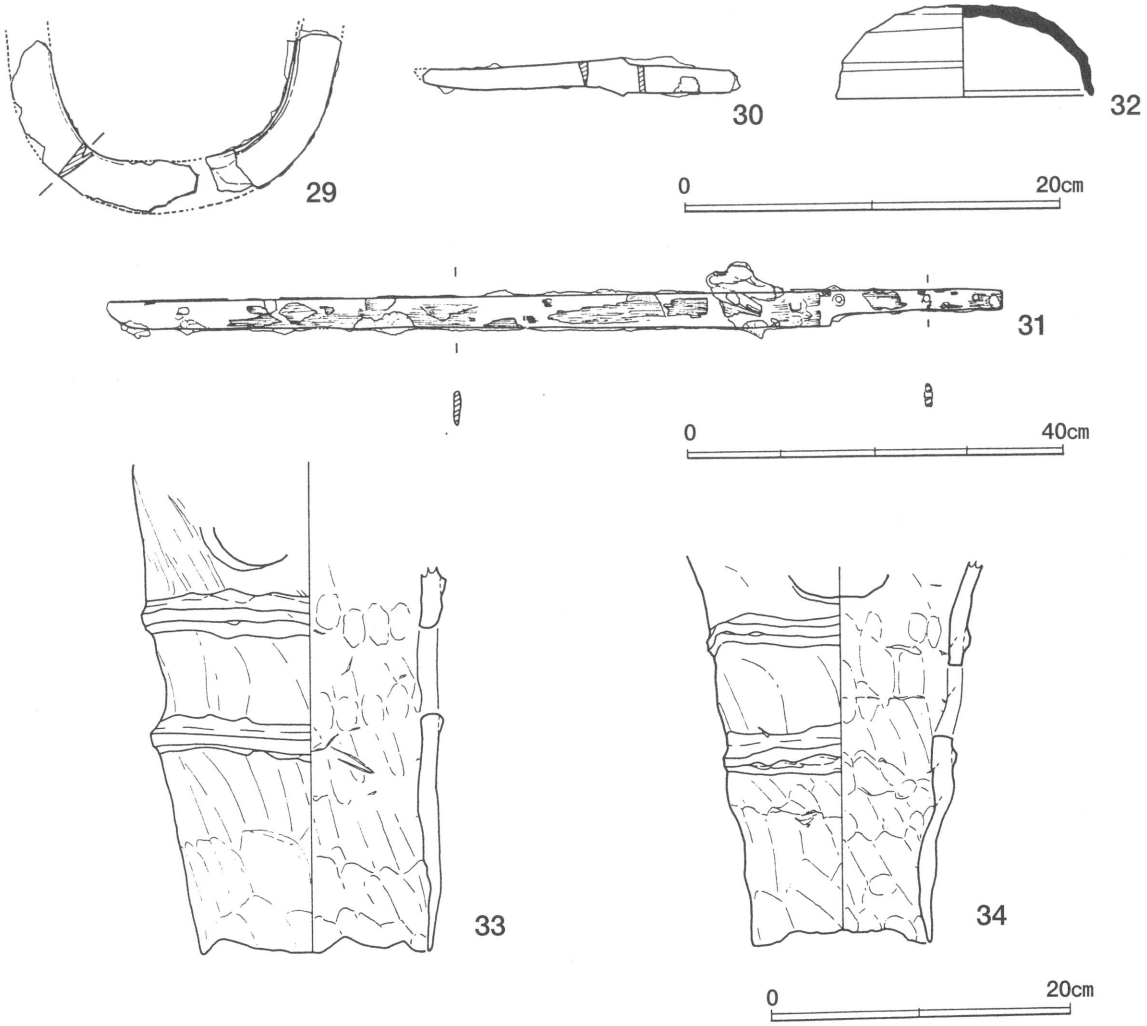
Ｅ　遺物（第14図、29～34、ＰＬ14）

鉄器類では農工具と武具が確認できた。U字形鍬先（29）は、今回の調査で唯一の鉄製農耕具にあたる。遺存状況が悪いものの、復元される刃先幅は約24cmで、大型品の部類に入るものである。この他に図化できた鉄器類には刀子（30）や直刀（31）があり、（31）は錆が著しいものの目釘穴が一カ所確認された。

杯蓋（32）は偏平な形態を呈し、稜線がにぶく凹線化しており、口縁端部は内傾し浅く凹み、ロクロ回転方向が時計廻りであることなどから、MT15～TK10型式に該当する。ただし、回転ヘラケズリが天井部の2/3以上に及び、形態的特徴に比べて回転ヘラケズリの範囲は広い。

円筒埴輪（33･34）は、全体が遺存するものはないものの3段目中位まで復元できる。ともに2段目と3段目に円形の透かし孔をほぼ直行する位置に穿孔することから、３条４段以上の構成である。焼成は破片資料も含めて黒斑が認められないので、すべて窖窯焼成によるものと判断できる。

成形は、約10cm幅の粘土帯の上に４cm前後の幅の粘土紐を順次積み上げることにより行われているようである。（33・34）はともに外面は２次調整が省略され、１次調整には１・２段目にナナメナデが行われる。（33）では3段目に摩滅が著しいものの、一部にナナメハケが確認できる。



第14図　大日山43号墳出土遺物

内面調整はナナメナデが行われ、底部には倒立させて外面板押さえ、内面指押さえを行う底部調整（川西1978）が行われている。

突帯は貼り付け位置の設定に関連する痕跡（辻川1999）が残存していないため、貼り付け位置の設定は行われていないと判断している。また突帯下辺部に不整形な凹みが残存し、さらに（34）には1条目突帯上辺部に、ヨコナデ調整以前に施された斜めの擦痕が確認できるため、断続ナデ技法で貼り付けたのちヨコナデ調整を行う断続ナデ技法A（中島1992）に該当するとみられる。

以上の特徴から、これらの埴輪は川西編年Ⅴ期（川西1978）に分類できる。また、紀ノ川流域周辺に多く認められる紀伊型（河内1988）または大和B類（鐘方1992）に該当せず、河内および鐘方が畿内型や大和A類と分類したものに相当し、いわゆる畿内地域のものと同様の技術で製作されていると評価できる。

杯蓋や円筒埴輪の特徴から、本墳から出土した遺物はおおよそMT15～TK10型式平行期であると考えられる。

F　小　結

大日山43号古墳は墳丘規模が直径約15ｍ、石室全長約4.5ｍと平均的な大きさの円墳だが、埴輪が墳丘上に樹立されていた。上部構造は破壊されていて不明であるが、当時の典型的な岩橋型横穴式石室である。築造時期は６世紀第２四半期と考えられ、大谷山22号墳とほぼ同時期の築造だと考えられる。

⑤ま　と　め

今回は岩橋千塚古墳群の大谷山古墳群と大日山古墳群の現地調査と４基の円墳の発掘調査を実施した。大谷山古墳群は約７割近くが発掘調査されていたため、調査例の少ない大日山古墳群を重点的に調査した。発掘調査は大日山43号墳・58号墳・70号墳・71号墳で実施した。

今回の調査成果を以下に列挙する。

１）大日山で円墳２基を新たに発見した。（大日山70号墳・71号墳）

２）大日山70号墳

①朝鮮半島色の強い鍛冶工具と陶質土器を副葬しているため、被葬者は半島から渡来した鍛冶工人を統括する人物である可能性が強い。

②古墳の占地状況からみると谷状の緩斜面に造営されており、在地の有力豪族である紀氏の下で統括され、造墓活動も規制を受けていたようである。

３）大日山71号墳

６世紀中頃の竪穴式石室であることが判明した。

４）大日山58号墳

６世紀第３四半期頃の小型の竪穴系横穴式石室であることが判明した。

５）大日山43号墳

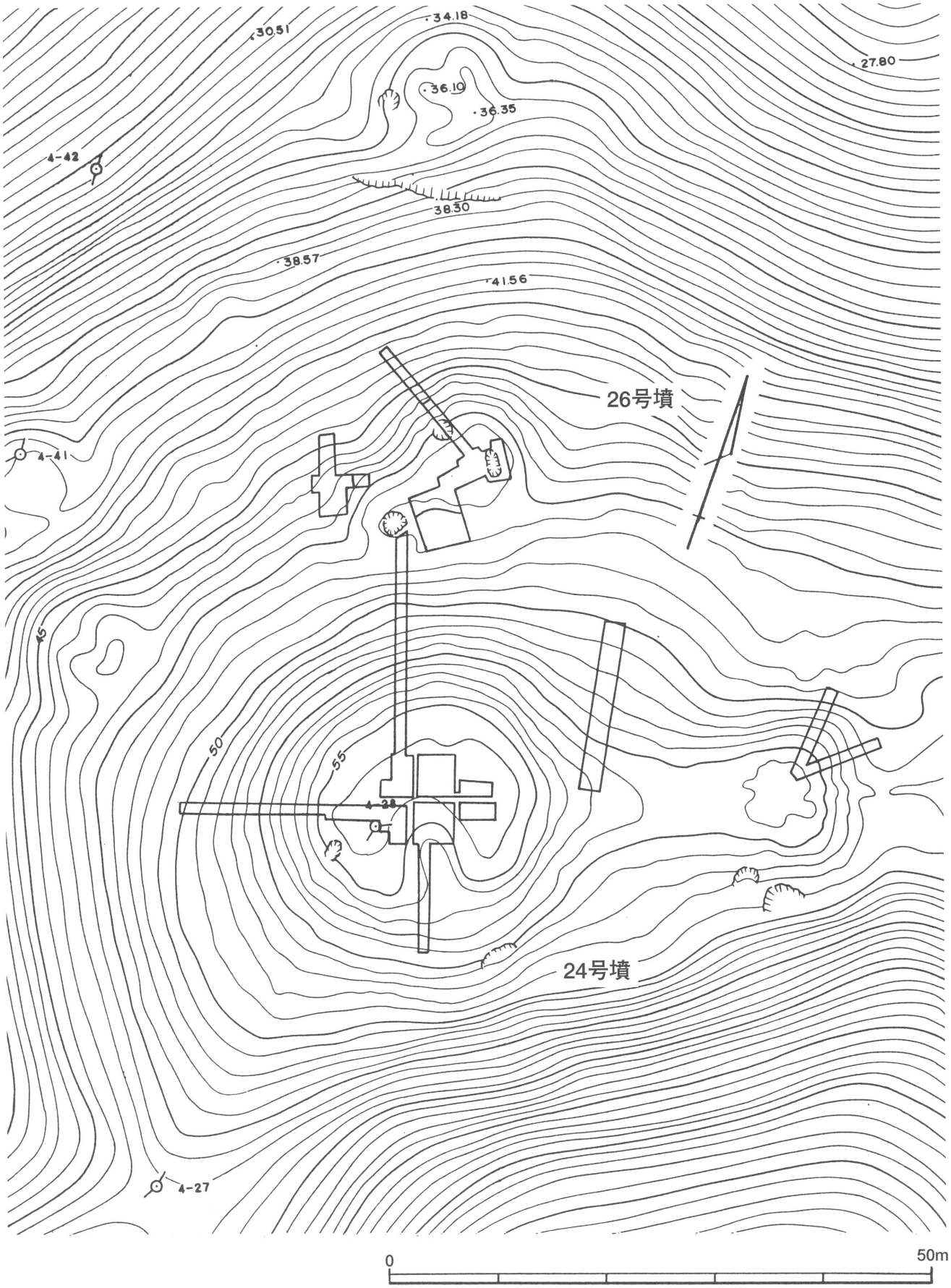
①６世紀第２四半期の片袖傾向の岩橋型横穴式石室であることが判明した。

②墳丘規模は直径約15ｍの円墳であるが、埴輪が樹立されている。

第３節　平成９年度井辺前山古墳群の調査

井辺前山古墳群は和歌山市井辺・寺内・森・神前地区にまたがる標高102.1ｍを計る通称福飯ヶ峯と呼ばれる小山塊に造営されている。昭和27（1952）年に特別史跡に指定された岩橋千塚古墳群の存在する岩橋山塊とは通称カセガ淵と呼ばれている鞍部で隔たり、その南西に位置する。

本古墳群は岩橋千塚古墳群と比べると、従来あまり注目されず、古墳の数や築造時期等実態が不明であった。昭和30年代末から古墳群の北西部で土砂採取と宅地造成工事が開始され数基の古墳が緊急発掘調査後消滅した。昭和40年代には和歌山市教育委員会により分布調査や部分的な発掘調査が実施された。岩橋千塚及び周辺古墳群でも最大規模である全長88ｍを計る井辺八幡山古墳（井辺前山10号墳）の墳丘が発掘調査され、ユーラシア大陸北方系集団の習俗の影響を受けた人物埴輪や動物埴輪・



第15図　井辺前山24号・26号墳墳丘測量図　S＝1/500

須恵器等が出土し、本古墳群の重要性が明らかになった。

昭和61（1986）年には県教育委員会により詳細分布調査が実施され、古墳群の測量図や正確な分布図が作成され、65基以上の古墳が存在し、そのうち６基が前方後円墳であることが確認された。

本年は、５カ年計画の岩橋千塚周辺古墳群確認緊急調査の３年目として井辺前山古墳群の調査を企画し、平成10年１月末から３月中旬にかけて、未確認古墳の発見及び現存古墳の現況確認のための踏査と24号墳と26号墳の２基の前方後円墳の発掘調査を実施した。

①井辺前山２４号墳

Ａ　立　地

井辺前山24号墳は福飯ヶ峯丘陵北西部の西に延びる標高約55ｍの支尾根上に主軸をほぼ東西に向けて築かれている。現在は雑木林や竹林で遮られているが、原始・古代にかけて紀伊の中心地であった日前・国懸神宮や太田・黒田遺跡、秋月遺跡を北西に望める位置に立地する。

Ｂ　墳　丘

墳丘は自然地形を巧みに利用して、東から西に緩やかに下がっていく尾根筋の鞍部をカットして前方部端とし、尾根の高まりに後円部が築かれている。くびれ部は表土下は岩盤が露出し、総体的に盛土量は少ないものと推定される。くびれ部の造り出し状の張り出しはトレンチ調査の結果、岩盤の自然地形の隆起によるものであった。

規模は主軸長約60ｍの前方後円墳で、後円部は高さ約6.0ｍの二段築成である。下段の径約38ｍ、上段頂部の径約18ｍを計る。前方部はいわゆる柄鏡式の形状からやや発達したもので、頂部は平坦面をもつが前方部端がもっとも高く4.2ｍを計る。前方部長約24ｍ、前方部全面21ｍ、くびれ部幅15ｍを計る。後円部の中央部から南半部にかけて、盗掘により大きく削られている。

Ｃ　埋葬施設

後円部平坦面の中央部を中心に表土直下に淡灰白色の粘土塊が散らばっており、粘土槨が破壊されたものだと考えられる。トレンチ掘りで確認を試みたが、痕跡を発見することは出来なかった。しかし、石材がほとんどみられないことから、石室や礫床をもたない粘土槨であったと推定される。

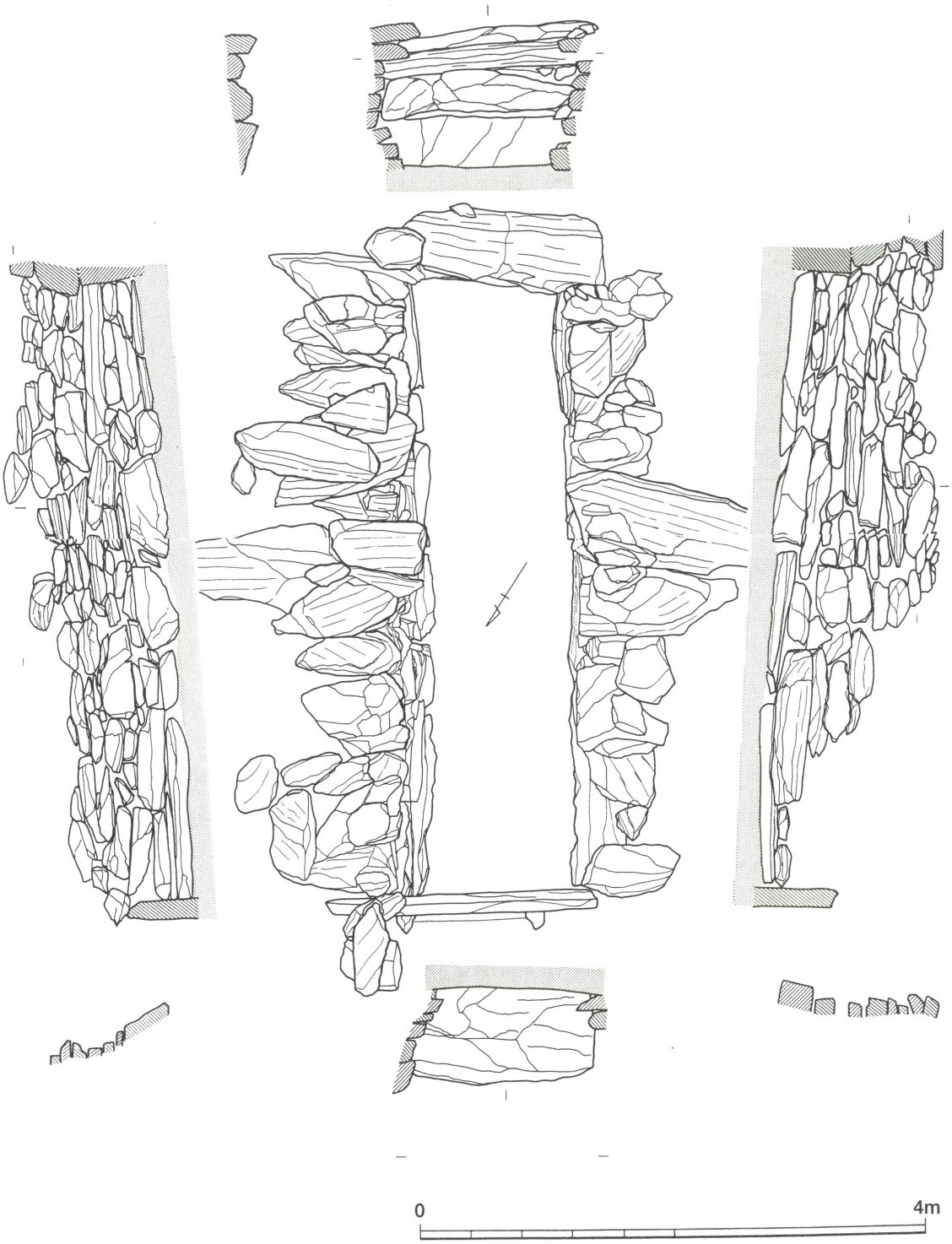
なお、中央部付近から口縁部に波状文と円形浮紋をもつ二重口縁の壺形土器の破片と直立口縁の壺形土器の破片が少量出土した。古墳に伴うものか、ほかの遺跡の遺物が墳丘盛土に混入したのか断定出来ないが、前者であれば、本古墳の築造年代は３世紀代に遡ることになる。

Ｄ　遺物出土状況

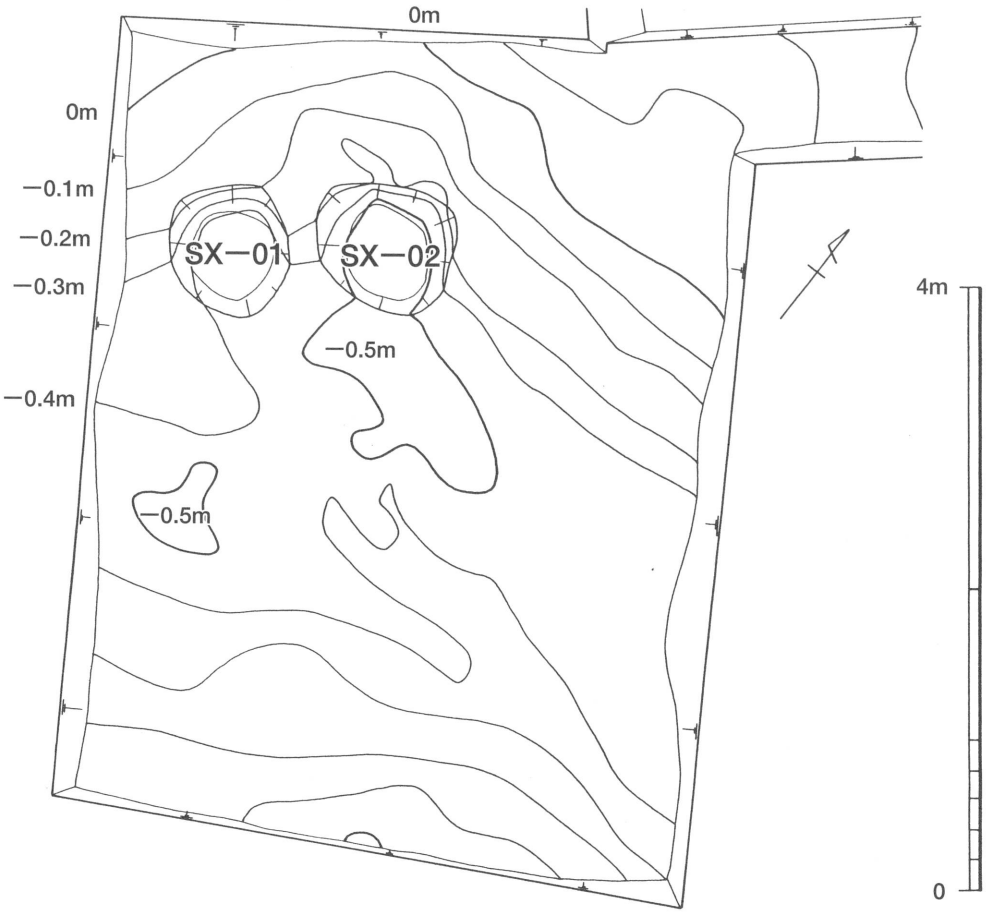
遺物は二重口縁壺と直口壺のほかに、後円部北トレンチの上部斜面からタタキ目のある甕の体部の破片が出土した。埴輪は出土しておらず、築造当初から埴輪をもたないことが確認された。

Ｅ　遺物（第20図、113～115）

３点図示したが、いずれも土師器の二重口縁の壺である。口縁部片（113・114）は、口縁部の垂下



第16図　井辺前山26号墳石室実測図



第17図　井辺前山26号墳　ＳＸ−01・02

する部分の接合方法が異なっているが、いずれも円形浮文と波状文で加飾されている。このような壺は、鳴神Ⅴ遺跡Ｊ地区ＳＤ−204下層出土土器（和歌山県教育委員会1984）のなかに類例があり、同資料は庄内式土器新段階〜布留式土器古段階に比定されている。

Ｆ　小　結

井辺前山24号墳は岩橋千塚周辺では同時期の古墳としては全長約60ｍと最大規模で、いわゆる柄鏡式の前方後円墳からやや発達した段階の墳丘をもち、粘土槨を埋葬施設とする古墳であることが明らかになった。築造時期は従来では５世紀代と考えられていたが、３世紀代に遡る可能性が生じてきた。

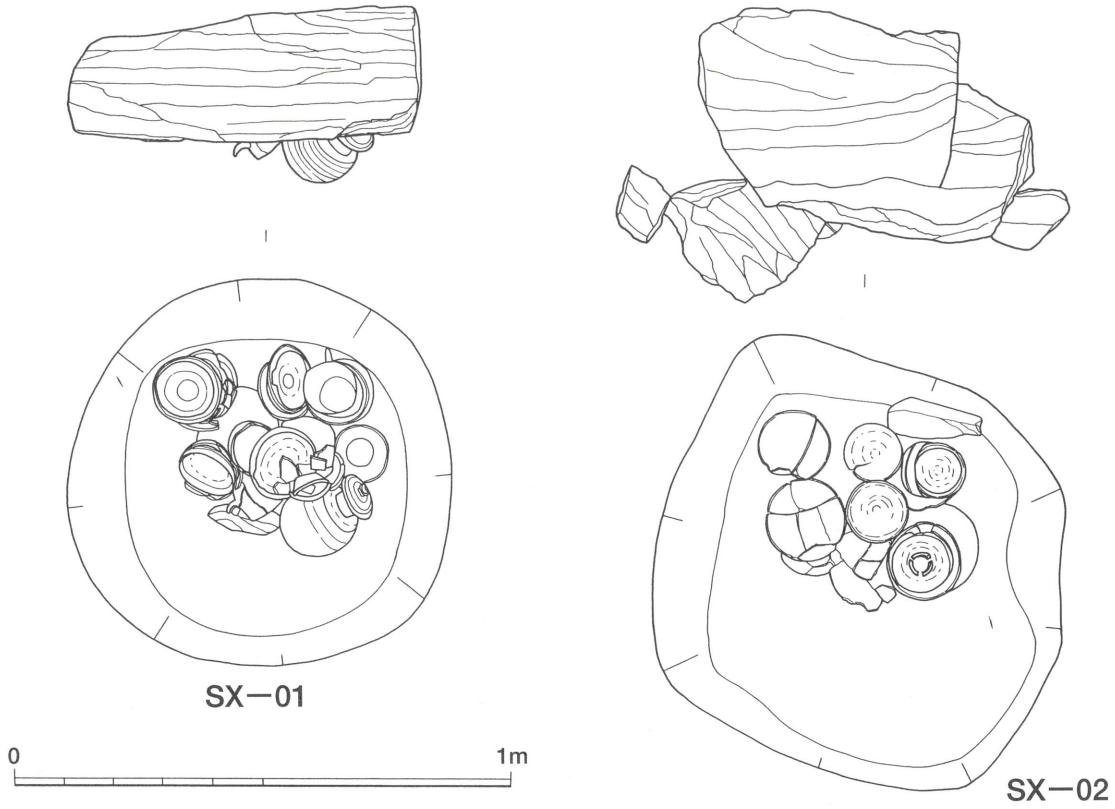
②井辺前山26号墳

Ａ　立　地

井辺前山26号墳は、24号墳の後円部の北側に隣接する小型前方後円墳である。

Ｂ　墳　丘

墳丘は小型前方後円墳で、主軸長約19.5ｍ、後円部径約13.5ｍ、前方部長約6.0ｍを計る。上部は約1/3程削平されて斜面の下側に盛土が押し出されている。墳丘上や裾部には円筒埴輪や人物埴輪・動物埴輪・器財埴輪の破片が散乱しており、埴輪の樹立が確認できた。



第18図　井辺前山26号墳　ＳＸ－01・02　遺物出土状況

東側のくびれ部において土器埋納土坑を２基検出した。墳丘くびれ部の屈曲部に直径約70㎝の浅い円形の土坑を２基並んで掘り窪め、須恵器や土師器をそれぞれ10数点ずつ一括して置き、結晶片岩の板石で蓋をしていた。付近では埴輪が集中して出土しており、東側のくびれ部の平坦地が祭祀の場所であった可能性が高いと推定される。

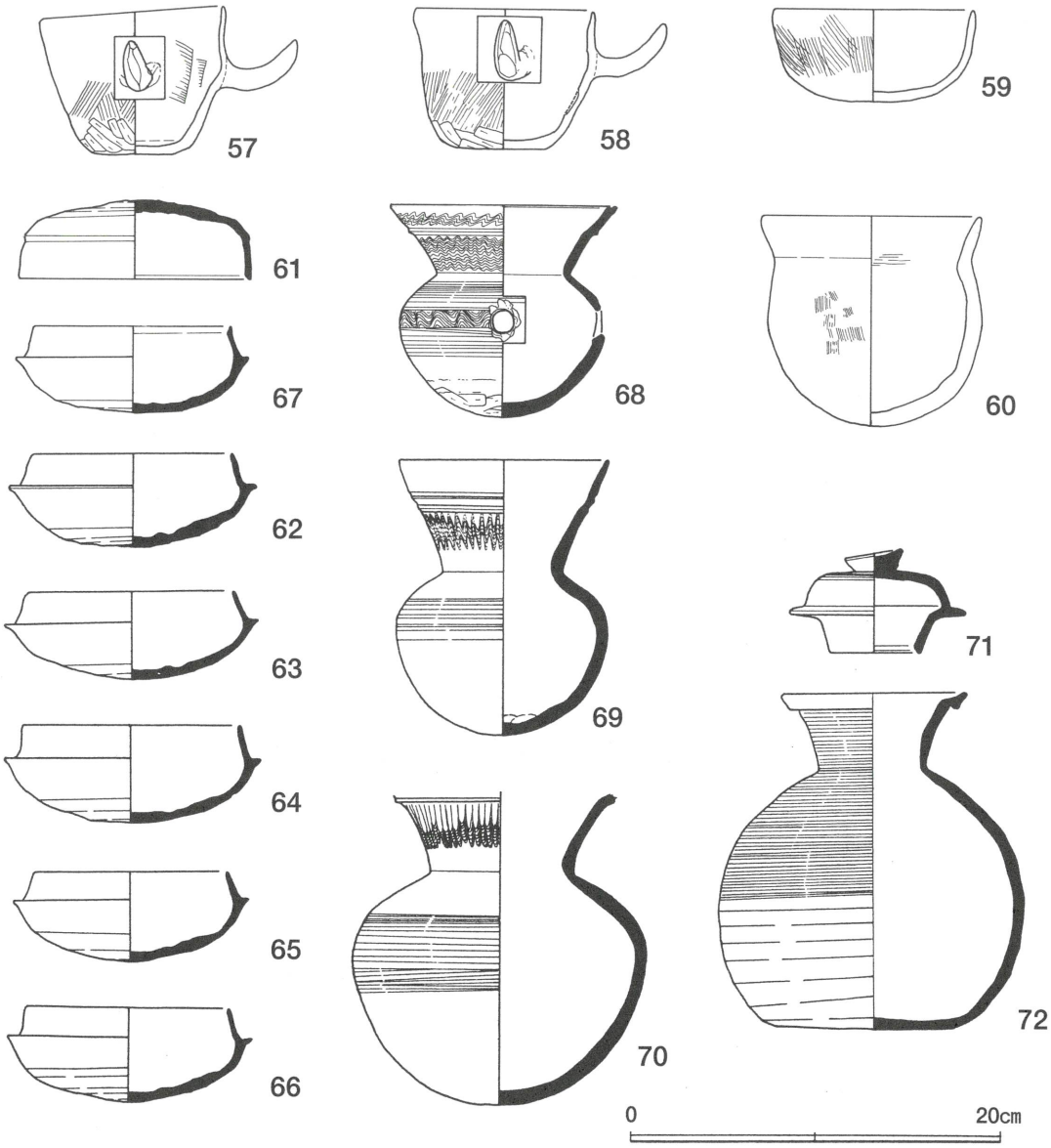
C　埋葬施設

埋葬施設は竪穴式石室であるが、天井石や側壁の上部は破壊されていた。床面も盗掘されており、遺物は全く遺されていなかった。石室の位置は後円部の中心からやや東よりにずれている。

規模は床面の長さ約2.4ｍ、幅約0.6ｍである。床面の一部には白色粘土がみられ、築造時には床面に粘土が貼られていたようである。基底部には比較的大きな数10㎝の結晶片岩を横長に置き、その上に20～40㎝大の片岩を小口積みにしている。壁面は垂直ではなく、上部と下部がせり出して中央部が窪み、断面形が楕円状を呈している。石室主軸は南南西方向で、床面は南側が北面より10㎝高い。

D　遺物出土状況

墳丘の撹乱土から多数の埴輪が出土した。特に南側のくびれ部から多数出土した。種類は円筒埴輪・人物埴輪・馬形埴輪・家形埴輪等である。くびれ部の土器埋納土坑１からは須恵器の杯身６・杯



第19図　井辺前山26号墳　ＳＸ－01　出土遺物

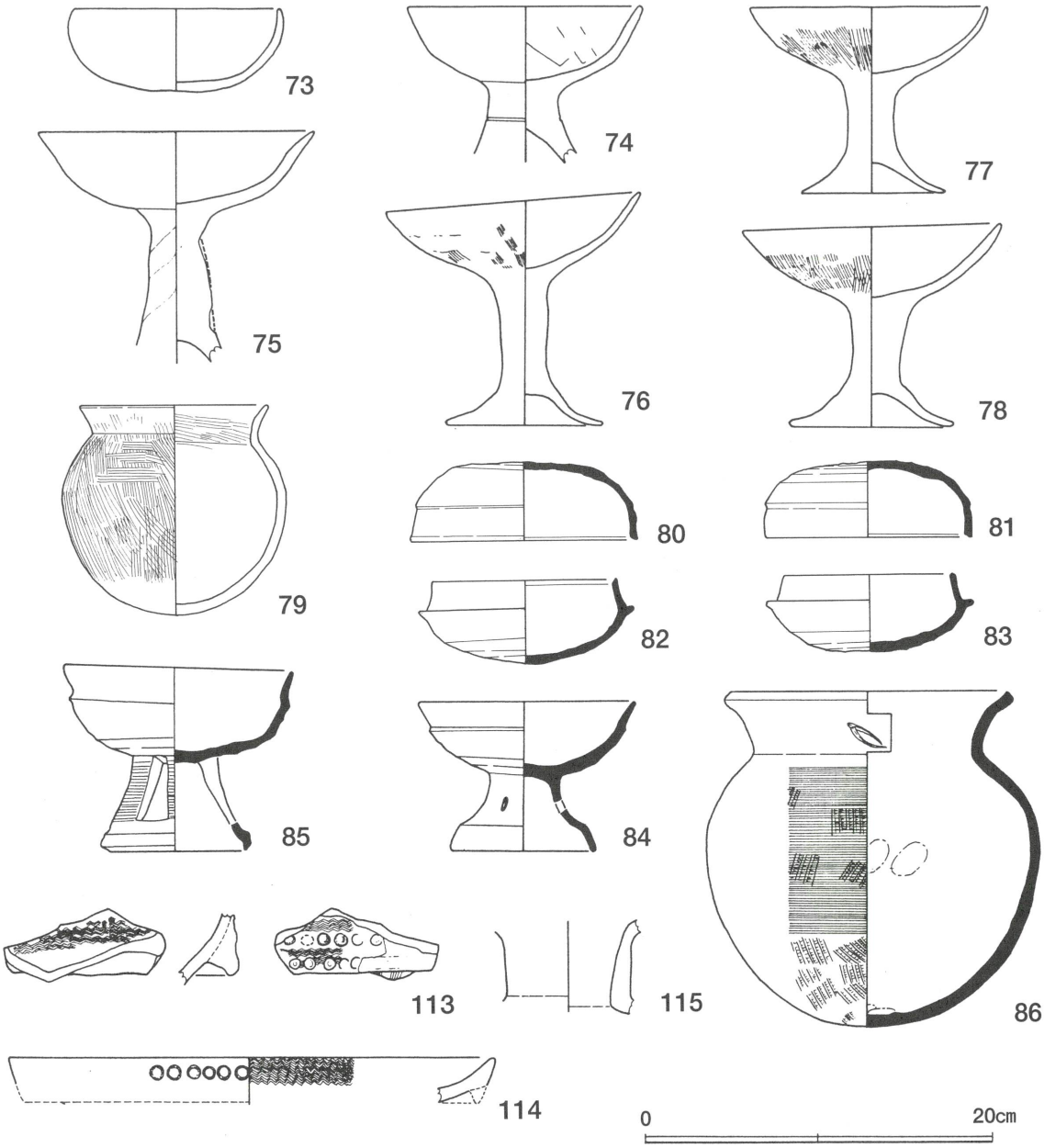
蓋１・壺３・鼓１・壺蓋１と土師器の把手付き鉢２・椀１・甕１の16点が出土した。土坑２からは須恵器杯身２・杯蓋２・甕１・高坏２と土師器の高坏５・椀１・甕１・の14点が出土した。

Ｅ　遺物

ＳＸ－０１出土遺物（第19図、57～72、ＰＬ16・17）

出土遺物のすべてを図化した。土師器把手付椀（57・58）は（57）の内面には一次調整のハケメが残るが、同工同大のものである。土師器椀（59）は底部が摩耗しており、調整の状況が不明である。土師器甕（60）は体部内面を削らないため、器壁が厚い。

須恵器蓋杯（61～67）は、口縁端部が丸く収められたもの（第１群とする－62～66－）と、内傾す



第20図　井辺前山26号墳　ＳＸ－02・24号墳出土遺物

る凹面をなすもの（第２群とする－61・67－）に分類できる。

前者に属するのは杯身だけであるが、これらは形態・手法・胎土の状況に共通する点が多い。底部の2/3以上の範囲を回転ヘラケズリしており、その結果、底部が丸みを持っている。底部内面の調整は簡略で、中心部の狭い範囲に一定方向のナデを加えるのみである。ほとんどが軟質に焼成されており、色調は白っぽい。これらの杯は、生産地・工人集団が同じ一群の須恵器と見ることができよう。これらの須恵器は、口縁端部が丸い点には後出する要素が認められるが、全体の器形や立ち上がりの長さや角度、及びヘラケズリの範囲からみて、ＭＴ15型式に平行する時期のものと見られる。後者に属する蓋および身も、色調および焼成の状況がよく似ており、生産地・工人集団が同じ一群の須恵器の公

算が大きい。これらの須恵器は形態・手法の特徴からＭＴ15型式に平行する時期のものと見られる。

瓿（68）は頸部が太く、底部に静止ヘラケズリを施しており、ＴＫ23型式に平行する時期と見られる。

壺（69・69・72）のうち、（70）は口縁部を欠いているが（69）と同形態のものと見られ、形態から判断してＭＴ15型式に平行する時期のものと見られる。蓋（71）とセットをなす壺（72）は、平底で特異な形態をしている。

この種の須恵器の類例は、田口一郎によって集成（田口1995）されており、朝鮮半島との頻繁な交流を示すものと分析されている。近辺の出土事例としては岸和田市三田古墳の例（財団法人　大阪府埋蔵文化財協会1993）がある。これらの出土事例の時期はＭＴ15型式以降と見られており、本例と一致している。

以上のようにＳＸ－０１出土遺物には、瓿のように古い時期の遺物があったり、壺の一部に所属時期がはっきりしないものがあるが、大勢としてはＭＴ15型式に平行するものと見ることができる。

ＳＸ－０２出土遺物（第20図、73～86、ＰＬ18・19）

出土遺物のすべてを図化した。土師器食器類として、椀（73）のほか高杯（74～78）が５個体ある。高杯のうち（76～78）は、形態や手法が同じである。（75）は脚裾部を欠くが、脚柱部の造りが（76～78）と同じである。（74）はこれらと形態や脚部の造りが大きく異なっている。土師器甕（79）は、球形の体部を持ちＳＸ－０１出土の甕（79）と器形が異なっているが、調整手法は同じである。

須恵器蓋杯（80～81）は、（83）だけがＳＸ－０１出土須恵器の第１群と同じで、他はＳＸ－０１出土須恵器の第２群と同じである。

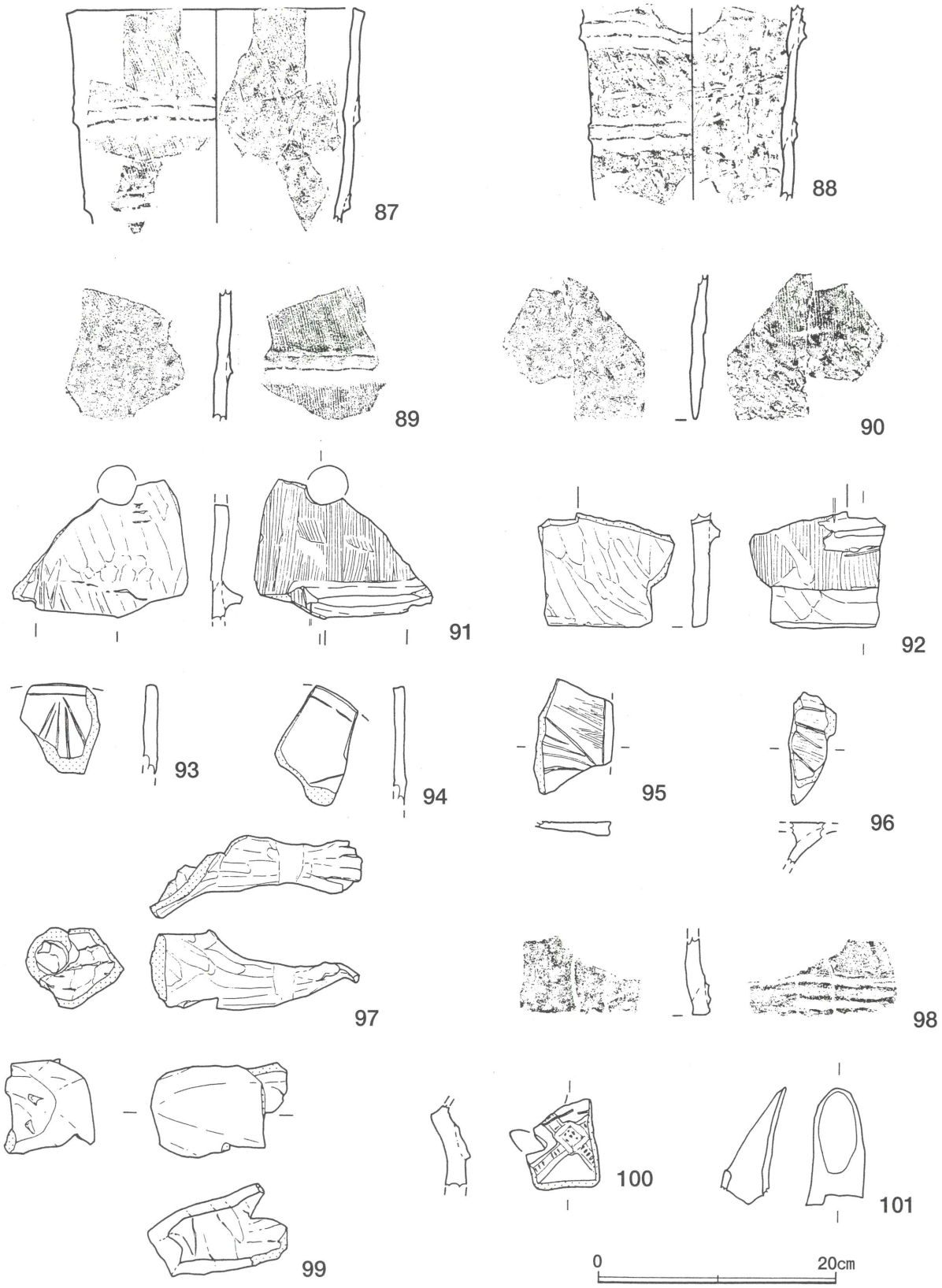
無蓋高杯（84・85）には、杯部および脚部の形態の違う２個体がある。いずれも短脚の高杯で、（84）は透かし孔の形状に古相をとどめるし、（85）は角張って肥厚した脚端部に古相をとどめるが、いずれも波状文を消失していることからみて、ＭＴ15型式に平行する時期のものと判断できる。

須恵器広口壺（86）は口縁端部を摘み上げているが、あまり肥厚していない。

墳丘出土遺物（第21・22図、87～112、ＰＬ19・20）

埴輪は遺存状況が非常に悪いため、全体の推定が可能なものはないものの、円筒埴輪のほか、家形埴輪・盾形埴輪・人物埴輪・馬形埴輪などの数種の形象埴輪が確認できた。部位の判明したものの一部を図化した。以下、その特徴を概観する。

円筒埴輪（87～90）は、出土品すべてに黒斑が確認できないので、窖窯焼成であると判断できる。外面調整は２次調整は省略され、１次調整ナナメハケのもの（87・89・90）とナナメナデのもの（88）とが存在する。突帯は大日山43号墳同様、突帯貼り付け位置の設定に関連する痕跡（辻川1999）は認められず、断続ナデ技法Ａ（中島1992）の痕跡が確認できる。また、（90）には倒立して外面板押えを行う底部調整（川西1978）が行われている。外面1次調整ナナメハケのものは総じてナナメナデのものより焼成が堅微であるという差異が存在するが、どちらも大日山43号墳と同様に、川西編年Ⅴ期（川



第21図　井辺前山26号墳出土埴輪１

西1978）に該当し、いわゆる畿内地域と同様の技術で製作されている。また線刻が行われるもの（89）が散見されるが、全体が遺存する例は確認していない。

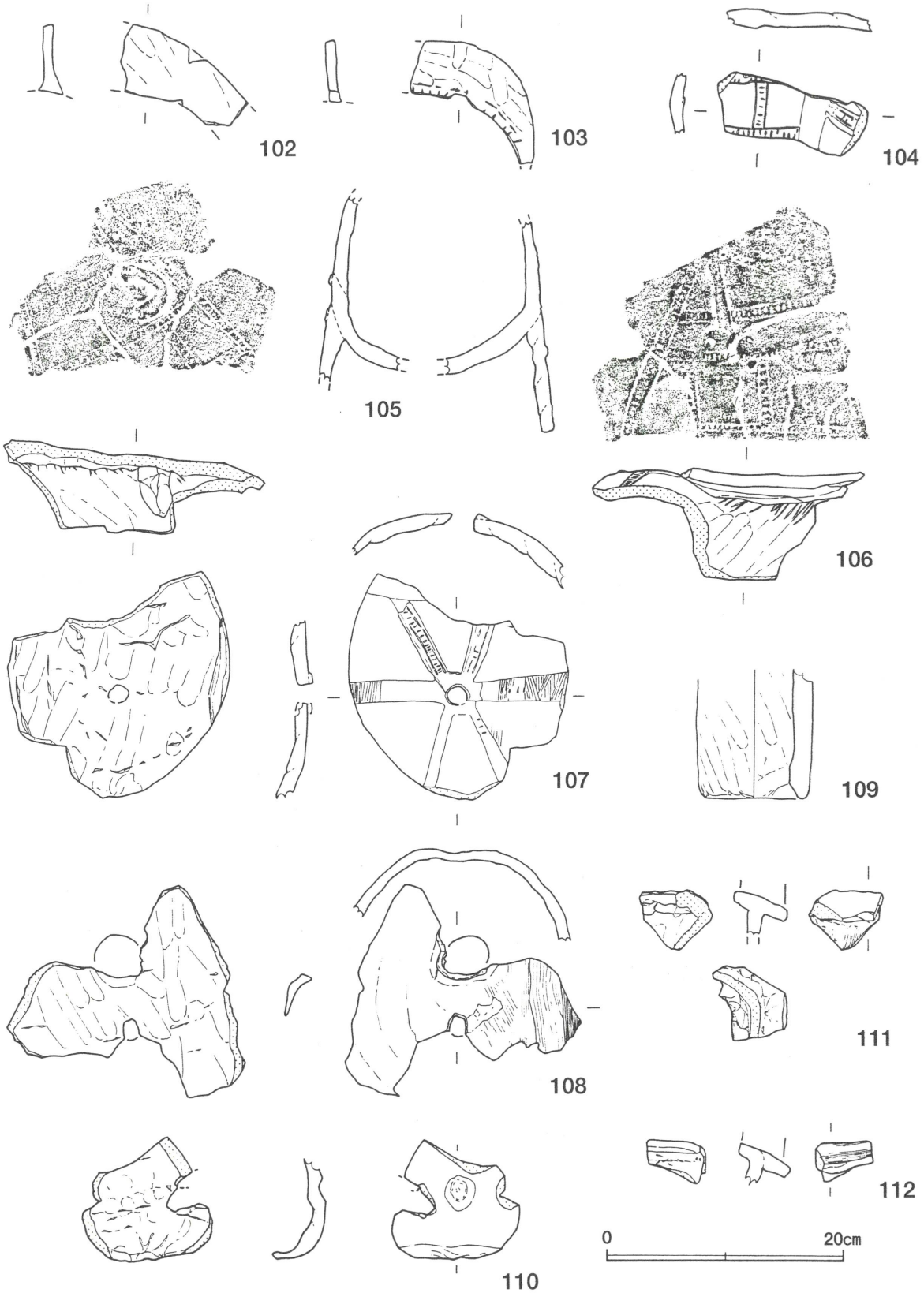
家形埴輪（91·92）とみられる破片がいくつか認められ、（91）は円形の透かし孔と突帯直下に方形透かし孔が穿孔されている。円形透かし孔は一般的に妻側に多いことから、妻側壁体の一部の可能性が高い。方形透かし孔の長辺に沿って、透かし孔から約1㎝離れた部分に線刻が一部残存する。突帯は突出度が高いが、途中で刀子などの金属製品により切断されている痕跡が残存している。外面はナデ調整の後タテハケが行われ、内面はナデ調整が行われるのみである。（92）は裾廻突帯の剥離痕跡が確認されるため、基部に該当する。また裾廻突帯の上の突帯に接して方形透かし孔が穿孔され、（91）と同様に方形透かし孔の長辺に沿って1条の線刻が確認できる。内外面調整については（91）と同様のナデ調整である。

盾形埴輪（93～96）は、盾面の一部とみられる破片が4点確認できた。（93・94）は、端部が曲線を描くことから、盾面上部の一部であるとみられる。これに対し、（95）は端部が直線的であるので、側辺部を構成するものとみられる。（96）には円筒部との接合箇所が確認できる。盾面はハケ調整を行ったのち、縁に沿って1本の条線を線刻し、さらに鋸歯文の線刻により表現されている。

（97）は、人物埴輪の左腕部であるが、姿勢などは復原できていない。肩側から腕内部を観察すると、棒状工具に粘土紐を巻いたうえに、粘土板を巻き付けて成形し、さらに腕先端部の薄い粘土板状の部分のうえに、細い粘土紐を貼り付けて指を表現する。こうして製作した腕部を粘土紐積み上げにより成形された体部に接合し、外面にナデ調整を施して仕上げるという製作手順が認められる。（98）は内外面ともにナデ調整である。底部突帯が確認されるため、器財埴輪の基部もしくは人物埴輪の台部の下端部である可能性が高い。

（99～108）は馬形埴輪の部材である。（99）は頭部の先端部分にあたり、粘土紐を積み上げて筒状の顔部を成形し、その先端に粘土塊を詰めて塞いでいる。口や鏡板の表現は残存しておらず不明だが、刺突により鼻孔を表現しようとするものの貫通していない。（100）は右目周辺部にあたり、辻金具は頭部に粘土塊を貼り付け、塊の中心部を凹まして、その凹部上面に不整形な刺突文を施すことにより表現する。革帯は板状の粘土紐を頭部に貼り付けて、その上面に2本の条線を線刻し、条線間に一定間隔で幅約2㎜・長約5㎜の刺突文を施して表現する。（101）は傾きや形態から左耳とみられるが、摩滅が著しく調整は不明である。（102）は板状を呈す鬣の一部とみられ、ナデ調整で仕上げられている。

（103～106）は鞍周辺の部材である。（103）は鞍の後輪に該当し、海側はハケ調整で、磯側はナデ調整で仕上げられる。さらに、磯側には爪先から1cmのところに爪先に沿って条線を引き、条線と爪先の間に刻目を施す。また爪先の一部が凹むことから、居木は革帯と同様の板状の粘土紐を貼り付けて表現していたと推定される。



第22図　井辺前山26号墳出土埴輪 2

（104）は尻繋につなぐとみられる革帯の表現が認められることから、鞍の後輪が剥離している部分とみられる。居木は線刻で表現されており、（103）の推定と異なる。ただし、尻繋をつなぐ革帯の表現は他の破片と同様に板状の粘土紐を貼り付けて表現する。

（105･106）は障泥に該当する。（105）は右前脚付近に該当し、粘土紐積み上げにより成形された腹部側面の刻目を施した部分に粘土板を貼り付け、補強材として腹部側面と障泥の間に粘土塊を挟み込んで接合する。鞍褥の表現は２条の条線間に刺突文を刻む革帯と同様であることから、革製の鞍褥を表現していると推定できる。また、輪鐙は板状の粘土紐を貼り付けて表現しているが、力革の表現に関する痕跡は確認できない。

（106）は左前脚付近の障泥で、粘土紐積み上げにより成形された腹部側面の刻目を施した部分に粘土板を貼り付けるものの、補強材とみられる粘土塊を挟まずに接合しており、（105）と異なる。さらに（106）は輪鐙だけでなく力革も板状の粘土紐を貼り付けて表現しており、腹部と障泥の接合方法と同様（105）と異なる。

（107）は尻繋周辺部にあたるが雲珠は残存せず、透かし孔が確認できるのみである。また革帯は他の個体と同様の表現で、革帯上面に表現される刺突文の一部が剥離面に残存することから、上面の刺突文等は粘土紐貼り付け後に行われたことが確認できる。外面調整は革帯の剥離面に刷毛目が残存することから、ハケ調整とみられるが全体に摩滅が著しく他の部分では確認できない。

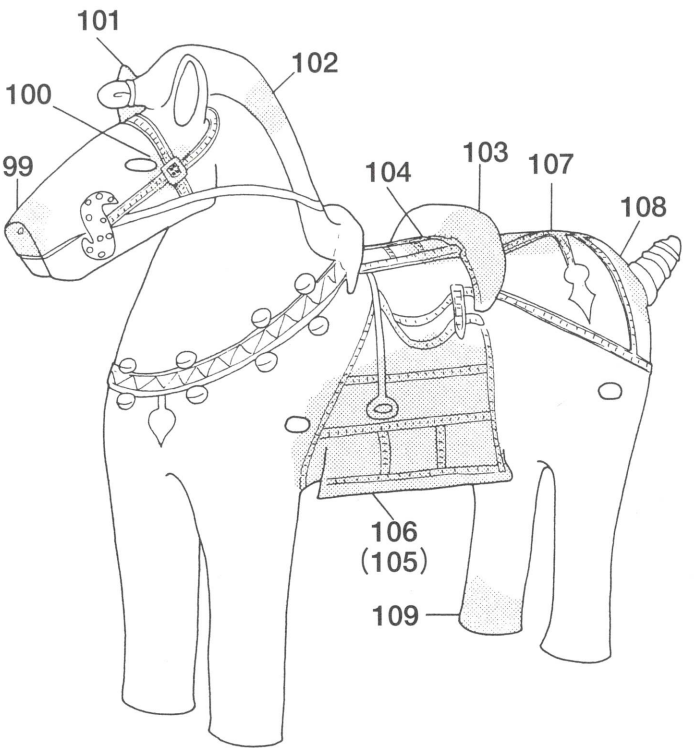
（108）は尻部周辺にあたり、尾は剥離しているものの尾をはめ込んだとみられる孔は残存しており、その孔の下に透かし孔が穿孔されている。内面は粗雑なナデ調整のため、尻部が粘土紐の積み上げにより成形されたことが確認できる。外面は（107）と同様にハケ調整が認められる。

（109）は脚部の下端部に該当する。成形は粘土板円筒化（稲村1986）によるとみられ、内外面ともナデ調整が行われている。下端部に蹄に関する痕跡は残存していなので、他の動物埴輪の可能性が残存する。今回の調査では他の動物埴輪とみられる破片が確認できないので、現状では馬形埴輪の部材と理解している。

馬形埴輪で図示した部位の位置は、第23図（註）で示しているが、今回図化したもの以外に腹孔もしくは胸付近のスカシ孔とみられる破片が存在する。

本墳の馬形埴輪には、馬具の装着が認められるので飾り馬に該当するが、（103・104）で推定した居木の表現方法や（105・106）で認められた障泥の接合方法、力革の表現方法、鞍褥の文様構成などには差異が認められる。

これらのことから、複数個体の馬形埴輪の存在を推測することが可能である。ただし複数個体存在していた場合でも、腹部・背部・尻部が粘土紐積み上げにより成形される点や尻部から頸部に向かって行われる背部の粘土紐積み上げの方向や革帯に表現される線刻などにおいては差異が認められないので、製作技術の面では近い関係にあると推測している。



第23図　馬形埴輪出土部位位置図

また、透かし孔の穿孔方式は、左右式の透かし孔と腹孔または前後左右式と腹孔という穿孔方式（森田1992）が現状では推測可能である。ただし、畿内地域やその周辺では前後左右式の穿孔方式は非常に少数（齊藤1999）のため、左右式の可能性が高いと考える。

（110～112）は形象埴輪の一部とみられるが、形式不明である。（110）は器面が磨耗しており調整等は不明であるが、中央に粘土紐を貼り付けた中央を凹ませた表現が行われている。そして、その表現の左側には透かし孔の穿孔が確認できる。内面には粘土紐の接合痕跡が残存しており、その状況から先述の外面の丸い表現の辺りまで一端筒状のものを成形した後に、粘土紐により閉塞を行うことで、下面を作り出すという手順が認められる。しかし、完全に閉塞せずに不整形な孔を残す。部位等は不明であるが、人物または動物埴輪の可能性があると推測している。

（111・112）は家形埴輪の一部とも考えられるが、（91·92）とは壁体部に相当する部分と突帯部との突帯の接合方法が異なり、平坦面には通常の家形埴輪の壁体部とは考えられないほどの幅広の剥離痕跡が残存することから不明形象埴輪とした。

このほかにも種類不明の埴輪がいくつか出土しており、本墳には家形埴輪・人物埴輪・馬形埴輪をはじめとする複数種類の形象埴輪の樹立が行われていたことが推測できる。

（註）今回の調査で出土していない部位は、他の近畿地方出土の馬形埴輪を参考に作図を行った。

F　小　結

井辺前山26号墳は全長約20ｍの小型の前方後円墳である。埋葬施設は竪穴式石室で６世紀初頭の築造だと考えられる。丘陵の斜面上部側のくびれ部に土器埋納土坑が２基築かれており、祭祀後の土器を埋納したものと考えられる。

③ま　と　め

今回は岩橋千塚古墳群の井辺前山古墳群の現地踏査と２基の前方後円墳の発掘調査を実施した。古墳の埋葬主体部は盗掘され破壊されていたため、副葬品等の状況は明らかにできなかった。26号墳では、墳丘のくびれ部で土器埋納土坑を２基確認でき、墓前祭祀の１例として、貴重な資料である。踏査の結果、宅地開発や畑の開墾等は進んでおらず、ほぼ現状を維持している。

今回の調査結果を踏まえ、問題点を個別に考察してみたい。

１）井辺前山24号墳の築造時期について

後円部から出土した二重口縁壺形土器は口縁の内外面に細かい波状紋を施し、外面には円形浮紋を２段貼り付けている。周辺では鳴神Ⅴ遺跡の溝ＳＤ204下層出土の二重口縁壺形土器群と類似しており、ほぼ同時期の庄内式土器の新段階から布留式土器の古段階に平行するものと考えられる。

岩橋千塚古墳群の形成開始時期は三角縁神獣鏡等の伝世品が存在することから４世紀に遡ると考えられているが、発掘調査の結果確実に４世紀代と断定できる古墳は確認されていない。この土器が古墳に伴うものであれば、本古墳の築造時期は３世紀代に遡ることになる。

平成７（1995）年度に調査した花山36号墳でもほぼ同時期の土器片が墳丘から出土しており、高地性集落等の遺物が墳丘盛土に混入したものと考えていたが、それも古墳に伴う土器である可能性も再考する必要が生じてきた。

２）井辺前山26号墳の埋葬施設及びくびれ部の土器埋納土坑について

26号墳は築造時期が６世紀初頭であるのに竪穴式石室を内部施設としており、同時期の大谷山６号墳や花山33号墳などの前方後円墳が新しい葬法である横穴式石室を採用しているのと対照的である。墳丘やくびれ部での墓前祭祀なども被葬者の身分や性格の違いを反映している可能性が高い。石室の築かれた位置が後円部の中心からずれているのも、墳丘上への新たな追葬を意識していたものと推定される。くびれ部には須恵器の杯身６・杯蓋１・壺３・瓲１・壺蓋１と土師器の把手付鉢２・椀１・甕１の16点を一括して納めた土坑と須恵器杯身２・杯蓋２・甕１・高坏２と土師器の高坏５・椀１・甕１の14点を一括して納めた土坑が２基並んでいた。

第４節　平成10年度井辺・寺内地区の調査

平成10（1998）年度は１）井辺前山地区の分布図作成業務、２）井辺・寺内地区の確認調査、の二つの事業を実施した。以下、各事業の概要について記す。

１）井辺前山地区の分布図作成業務

井辺前山地区に所在する47基の古墳について、測量委託業務として分布図を作成した。円墳が散在する井辺前山丘陵の南半部は、古墳の外形を「境界測量」として測量し、前方後円墳や円墳が集中する北半部については、50㎝等高線による地形測量をおこなった。

縮尺１/500で作成したこの基図を、和歌山市作成の１/2500図を1/1000に拡大して作成した地形図に編纂して全体の分布図とした。

２）井辺・寺内地区の確認調査

平板測量

寺内地区を踏査したところ、和歌山県作成の平成７年度「埋蔵文化財包蔵地地図」に記載されていない古墳６基が確認された。井辺地区では古墳の分布密度が高く、「埋蔵文化財包蔵地地図」記載の古墳を、現地で個々に比定するのが困難であることが認識された。

そこで、当該地域の古墳の外形および位置関係を、縮尺１/500の平板測量によって掌握して次年度の分布図作成業務に備えることにした。この平板測量によって、井辺地区で２基の古墳らしい地点が確認され、分布・測量調査で都合８基の古墳が発見された。

発掘調査

一方、寺内22・23号墳については、開墾によって地形が改変され古墳の存在が確認できない状況となっていた。そこで、この尾根にトレンチを設定して発掘調査を実施した（第24図）。

発掘調査の結果、寺内22・23号墳の埋葬施設が確認できたほか、あらたに１基の古墳（寺内64号墳）や８世紀後半の土坑１基を発見した。以下に各古墳・土坑について記す（第24～28図）。

①　寺内64号墳

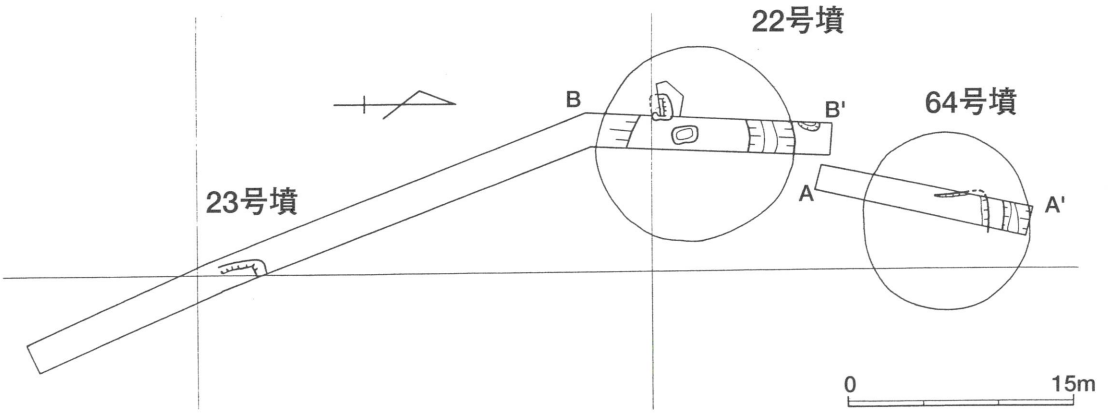
標高約40ｍの尾根上の地点で、岩盤を掘削した周溝と墓壙を検出した。

Ａ　周溝

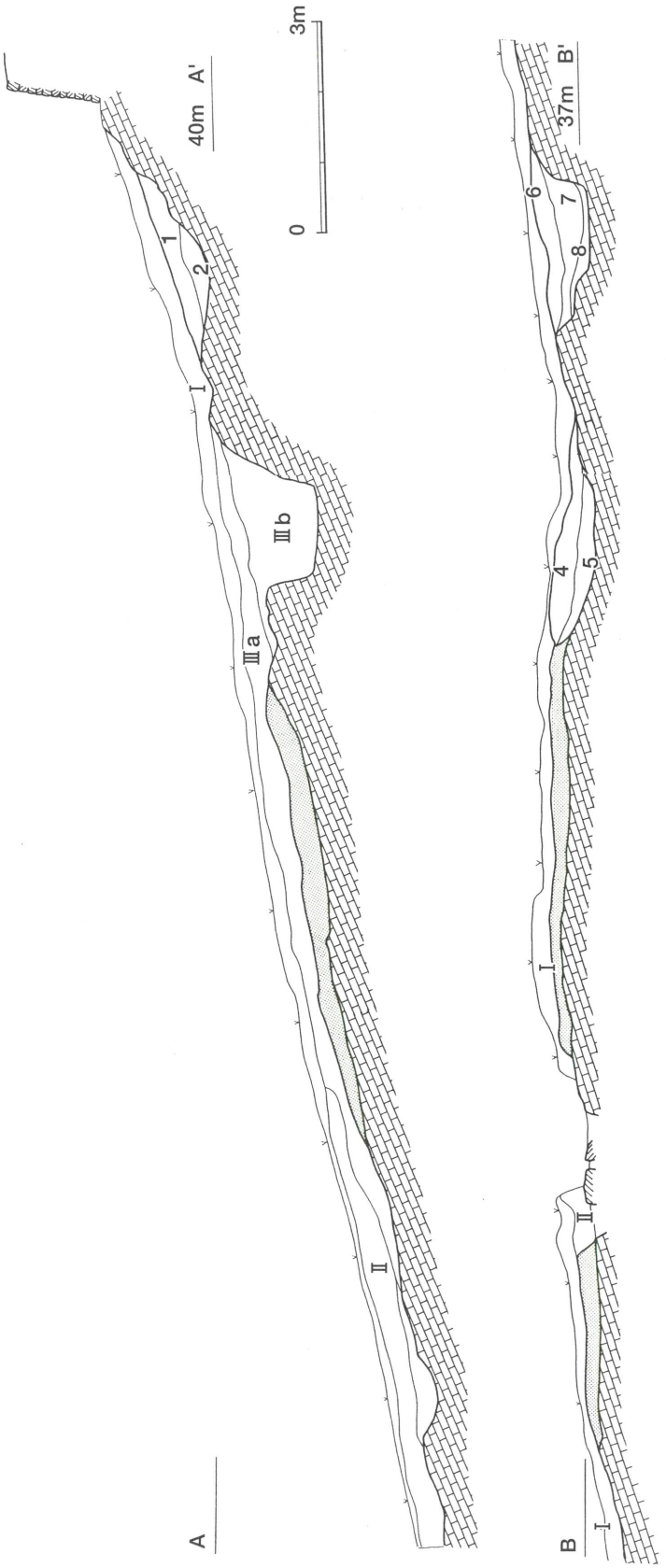
周溝は幅約１ｍ・深さ約0.5ｍの規模で、埋土内より埴輪や土師器の破片が出土した。

Ｂ　墓壙

墓壙は約１ｍの深さで遺っていた。石材や遺物はいっさい遺存していなかったが、墓壙の規模から判断して、南に開口する横穴式石室であったものと推定できる。



第24図　寺内地図トレンチ配置図　Ｓ＝1/500



第25図　寺内64号墳・22号墳土層図

C　墳丘

墳丘もほぼすべて失われていたが、トレンチ内で墳丘の基底をなすと思われる土層の堆積が確認できた（第25図網目部分）。

周溝・墳丘の基底からこの古墳の規模を復元すると直径約12ｍの円墳となる。

②　寺内22号墳

標高約36ｍの尾根上の地点にある。

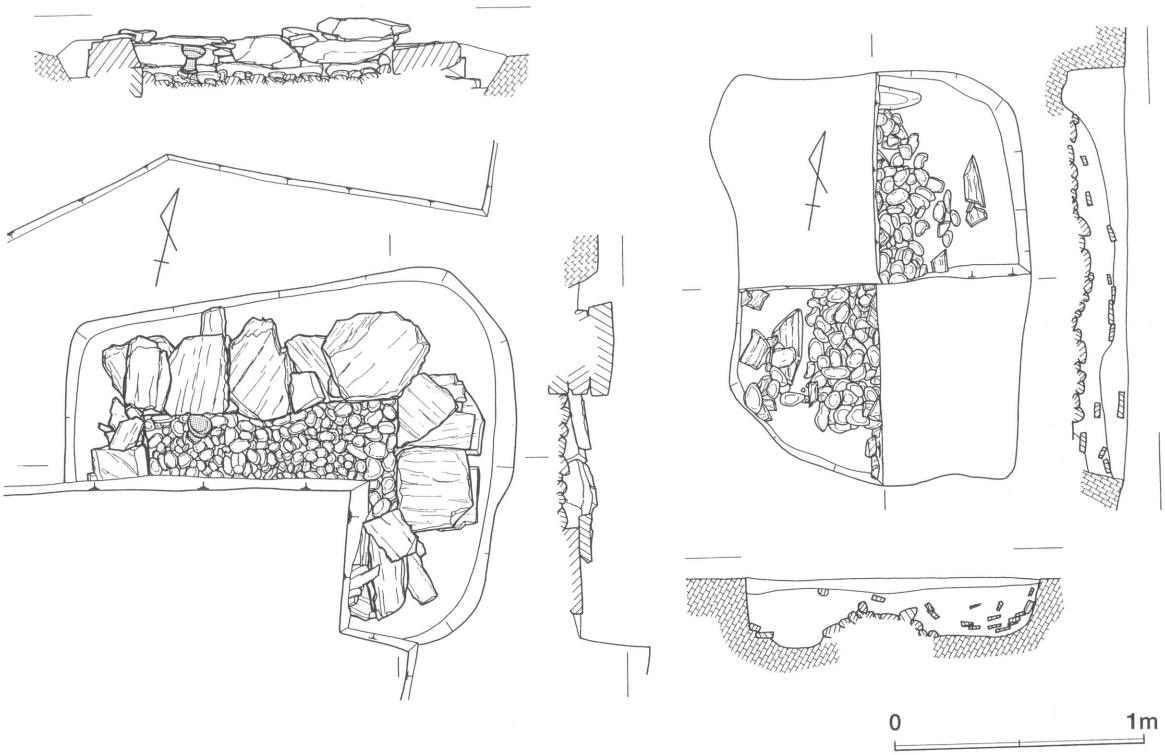
A　墳丘

トレンチ内で周溝と墳丘の基底部が検出され、直径約12ｍの円墳であることが確認できた。周溝は幅約３ｍで、埋土中より形象埴輪・円筒埴輪・須恵器片が出土した。遺存している墳丘の高さは周溝の底から約0.4ｍである。

B　埋葬施設

小規模な埋葬施設を二基検出したが、いずれも石材を抜き取られており、遺存状況はよくない。そのうちの一つは、結晶片岩の割石で構築された小型の竪穴式石室で、内法寸法が48cm×100㎝の規模で主軸方向を東西におく。周囲の壁の石積みは、二ないし三段分が遺存するだけである。石室床面は３～８㎝大の円礫をしいたもので、床面上から須恵器無蓋高坏が１点出土している。

もう一つの埋葬施設は、南北に主軸をおく墓壙内に、長さ120㎝・幅60㎝の規模で、円礫が長方形に遺存していた。円礫と墓壙の壁との距離や墓壙の底に板石を立てていた痕跡が見られることから、この埋葬施設は小型の組み合わせ式石棺と判断できる。



第26図　寺内22号墳埋葬施設実測図　レベルは37m

C　出土遺物（第27図、116、ＰＬ20）

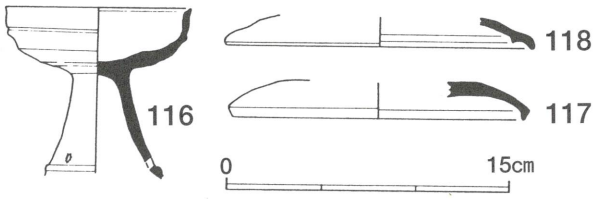
須恵器無蓋高杯（116）脚部裾の外周部を欠損している。脚部の突帯はハリツケと見られ、脚部の三方に楕円形透かし孔をあけている。杯底部の約3/4の範囲をヘラケズリしている。杯部内面の調整は簡略で、中心部分に一定方向のナデをおこなっている。口縁端部は内傾する凹面をなす。黒灰色を呈し、軟質に焼成されている。

この須恵器は、脚部の突帯の付け方や透かし孔の形態に古相が見られるものの、口縁端部や形態の特徴およびヘラケズリの状況からＴＫ47型式平行期のものと判断でき、この古墳は５世紀末に造られたものとみられる。この須恵器は胎土中に結晶片岩片を多量に含んでおり、紀伊産の須恵器と考えられる。

埴輪　円筒埴輪（1001）の他、形象埴輪（1002）がある。埴輪の出土は、この古墳の北側に限られており、丘陵上部の寺内18号墳から流出してきたものと見られる。

③　寺内23号墳

標高約30ｍの地点で、結晶片岩の割石を積んだ石室の基底部を検出した。石室の規模は南北に２ｍ以上あり、比較的大規模な竪穴式石室と見られるが、周囲の壁は二段分の石積みが残っているだけである。床面は結晶片岩の板石を敷き詰めてつくっている。



第27図　寺内地区出土遺物

墳丘や周溝は全く遺存していないため、古墳

の規模は不明である。遺物は石室の埋土中から鉄釘が１点出土しただけで、詳しい時期はわからない。

④　土坑

寺内22号墳の北側で土坑状の遺構を検出した。遺構の一部がトレンチ内にあるだけなので、全容は判明しないが、南北170㎝・深さ50㎝の規模がある。壁は垂直に掘り込まれている。埋土は３層に区分されるが、いずれの層も水平に堆積している。

埋土中より須恵器蓋（117）が出土した。天井部はヘラキリ不調整となっており、この蓋は８世紀後半のものとみられる。

⑤　その他遺物

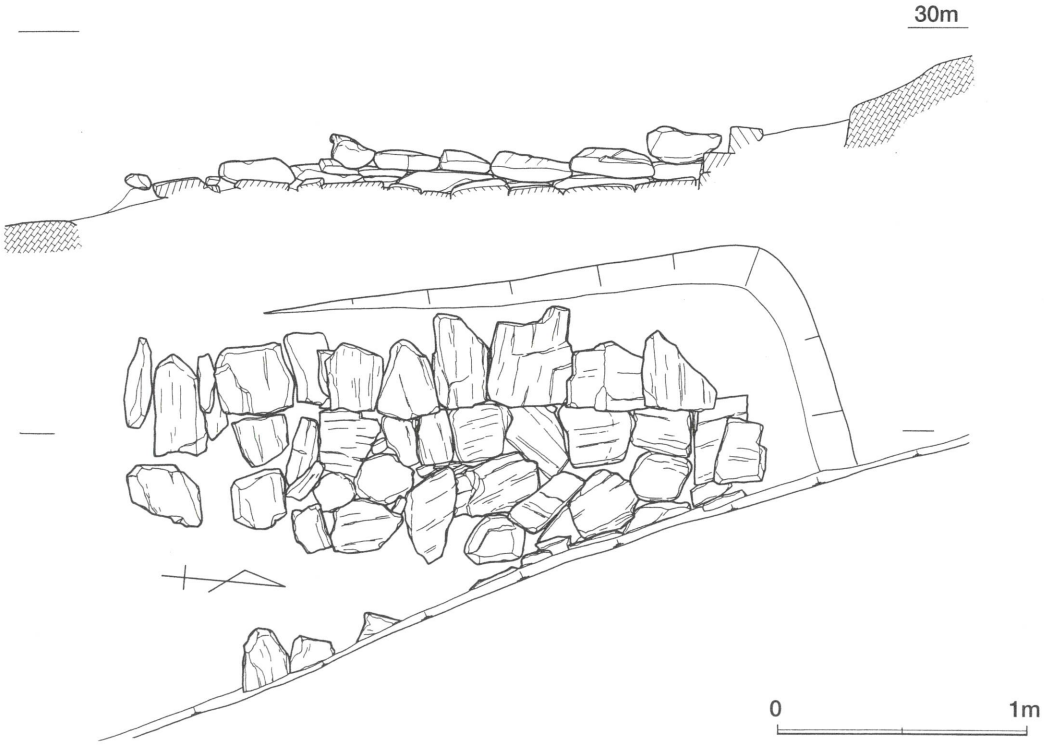
寺内64号墳の南側の堆積土（第Ⅱ層）から、かえりの付く須恵器蓋（118）が出土した。７世紀末～８世紀初頭のものとみられる。

⑥　まとめ

以上のように、今回の調査によって合計９基の古墳を発見することになった。さらに、井辺地区の密集する古墳の詳細な分布状況が判明し、当該地区の古墳の群構成の分析が可能となったといえる。

７世紀末～８世紀にかけての遺構・遺物については、どういった類の行為によるものかは判明しないが、この地が通常の集落が立地するような場所ではないことを考慮すると、当該地域を葬地とした古墳築造集団の後裔の所産である公算が大といえる。

古墳築造活動終了後もなお、造墓活動が続けられたか、祖先祭祀が執り行われたのか、いずれかであろう。



第28図　寺内23号墳石室実測図

第5節　総　括

今回は、総数800基近い岩橋千塚古墳群のごく一部の古墳を調査したにすぎず、日本最大規模の群集墳の全体像を把握するのは未だ困難な状況であるが、5世紀から7世紀初めにかけての個々の古墳の変遷はほぼ明らかになってきた。しかしながら、各支群の出現期と終末期の古墳の実態が明らかでない。とりわけ、7世紀第2四半期以降に古墳群がどのような終焉を迎えたのか不明であり、今後の検討課題である。最後に今回の調査で明らかになったことをまとめてみたい。

岩橋千塚古墳群の横穴式石室について

岩橋山塊は、結晶変片系の岩盤からなるが、横穴式石室の基底部は岩盤を掘り窪めて、平坦にした後、排水溝を掘削し、排水溝と玄室床面を仕上げて、次に玄門部を造り、側壁を築いている。6世紀前半の片袖傾向の石室では玄室内には排水溝が設けられておらず、両袖式の石室になって初めて、玄室の内部にも溝が設置されるようである。

岩橋千塚古墳群の横穴式石室では、遺骸は石室の主軸方向に直交方向に配置する例が、圧倒的多数を占め、畿内地域の他の地域とは異なる。平面形態のT字形、正方形、長方形の差は被葬者の出自や帰属集団の差によるものではなく、単葬・2人葬・複数葬に起因するものだと理解できる。

しかし、今回調査した大日山70号墳のように主軸方向に平行配置する小型長方形の石室や、大日山58号墳の竪穴系横穴式石室も少数ながら存在しており、それがなにを反映しているかは今後の検討課題である。また、石室内への追葬が少なく、横穴式石室を主埋葬施設として、同一墳丘上に竪穴式石室や箱式石棺が設けられる例が多い。

古墳群の変遷について

岩橋千塚古墳群は前述したように地形的条件と過去の調査経緯から、①花山地区、②大谷山地区、③大日山地区、④前山A地区、⑤前山B地区、⑥前山C地区、⑦井辺地区、⑧寺内地区、⑨井辺前山地区に分けられる。この中で、出現期の5世紀代の中期古墳は北部及び西部の花山・大谷山・大日山・井辺前山地区でみられ、この4支群では6世紀後半まで継続して古墳が営まれている。大型の前方後円墳や円墳が存在し、各支群でほぼ首長系譜がたどれる。

前山地区における造墓活動の開始時期は不明であるが、6世紀中頃から後半の古墳が多数だと推定される。尾根上だけでなく谷部まで密集して古墳が分布している。内部施設は横穴式石室が多く、小型円墳が多い。山頂部には将軍塚古墳・郡長塚古墳・知事塚古墳の中小型の前方後円墳が占地し、東部の最高所には大型前方後円墳の天王塚古墳が隔絶して立地している。また、東部の尾根上には前山A46号墳と前山A67号墳の大型円墳が立地している。

井辺地区や寺内地区では5世紀代の古墳もみられるが、大部分は6世紀から7世紀代の古墳だと推定される。7世紀初頭に築かれた首長墓だと考えられる井辺1号墳は一辺約40mの大型方墳であるが、谷部に立地している。

近年調査された、寺内57号墳は直径35ｍ以上の円墳で、内部には玄室長５ｍ以上の大型横穴式石室が築かれている。円墳としては岩橋千塚古墳群の中で最大で、石室規模も天王塚を上回り最大規模である。築造時期は６世紀後半で、郡長塚と知事塚の小型前方後円墳から井辺１号墳の大型方墳が築かれる間の首長墓ではないかと推定される。このように６世紀後半に前方後円墳の築造が途絶えた後では、岩橋山塊の南斜面で造墓活動が盛んになり、首長墓も築かれている。

おわりに

岩橋千塚古墳群の築かれた紀ノ川左岸では、日前宮周辺の微高地において近年、４世紀代から５世紀前半の前方後円墳や円墳・方墳などが発見されている。前方後円墳は前方部の両端で溝が途切れて陸橋となるタイプで、出現期の様相を示している。付近には大和の纏向古墳群のように古式の古墳群が存在している可能性が高い。

これらの低地の古墳群の被葬者と丘陵上の岩橋千塚古墳群の被葬者の関係は、現在のところ明らかではない。古墳の様相からすれば、明らかに大きな隔たりがあり、両者が同一の集団であったとはすぐには断定できない。また、岩橋型と呼ばれる特殊な構造の横穴式石室も祖型は朝鮮半島にあると言われているが、未だ定説をみていない。半島に多い積石塚が古墳群中に存在することも含めて、その起源と伝播経路の解明を今後の検討課題としたい。

参考文献

稲村繁1986「群馬県における馬形埴輪の変遷ー上芝古墳出土品を中心としてー」『MUSEUM』425　東京国立博物館

井上裕一1985「馬形埴輪の研究ー製作技法を中心としてー」『古代探叢』Ⅱ　早稲田大学出版部

井上裕一1995「馬形埴輪の研究ー画期の設定ー」『古代探叢』Ⅳ　早稲田大学出版部

鐘方正樹1992「大和における円筒埴輪の地域性」『奈良市埋蔵文化財センター紀要　1991』奈良市教育委員会

河内一浩1988「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能道』巽三郎先生古稀記念論集刊行会

川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64ー2・4（川西宏幸1988『古墳時代政治史序説』塙書房再録）

財団法人大阪府埋蔵文化財協会1993『三田古墳』

齊藤香織1999「馬形埴輪における製作技法の変遷と地域性」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室

田口一郎1995「平底短頸瓶覚書ー東国の渡来文化研究Ⅰー」『群馬考古学手帳　5』群馬土器観会

辻川哲郎1999「円筒埴輪の突帯設定技法の復元ー埴輪受容形態の基礎作業としてー」『埴輪論叢』第1号　埴輪研究会

中島和彦1992「「断続ナデ技法」の再評価」『奈良市埋蔵文化財センター紀要　1991』奈良市教育委員会

森田克行1992「動物埴輪のスカシ孔ー畿内型と武蔵型ー」『究班』埋蔵文化財研究会

和歌山県教育委員会1984『鳴神地区遺跡発掘調査報告書ー一般国道24号バイパス関連遺跡発掘調査ー』和歌山県教育委員会

古墳一覧表（花山地区－１８４）

番号	古　墳　名	所　在　地	墳　　形	規模(m)，h＝高さ	備　　考
1	花山２号墳	岩橋	前方後円墳	長さ67，h=6	
2	花山３号墳	〃	円　　墳	径15.5，h=0.5	消滅
3	花山４号墳	〃	〃	径10，h=1.5	
4	花山５号墳	〃	〃		
5	花山６号墳	〃	前方後円墳	長さ49，h=4.5	横穴式石室，埴輪列
6	花山７号墳	〃	〃	長さ35，h=2	
7	花山８号墳	〃	〃	長さ52，h=6	粘土槨，粘土床
8	花山９号墳	岩橋・鳴神	円　　墳	径30，h=5	横穴式石室
9	花山10号墳	〃	前方後円墳	長さ44，h=2.75	粘土槨，横穴式石室
10	花山11号墳	岩橋	円　　墳	径8，h=1.3	竪穴式石室
11	花山12号墳	岩橋・鳴神	〃	径20，h=2	
12	花山13号墳	栗栖	〃	径22	竪穴式石室
13	花山14号墳	岩橋	〃	径15，h=2	横穴式石室，消滅
14	花山15号墳	岩橋・栗栖	〃		横穴式石室，消滅
15	花山16号墳	岩橋	不　　明		横穴式石室，消滅
16	花山17号墳	〃	〃		竪穴式石室，消滅
17	花山19号墳	鳴神	円　　墳	径20，h=2.75	
18	花山20号墳	〃	前方後円墳	長さ35，h=2.5	埴輪
19	花山22号墳	〃	円　　墳	径13，h=1.3	消滅
20	花山28号墳	岩橋	〃	径12，h=3	
21	花山29号墳	栗栖	〃	径13，h=2	
22	花山30号墳	〃	〃	径7.5，h=1	
23	花山31号墳	〃	〃	径12，h=1	
24	花山32号墳	〃	〃	径12，h=2.5	墳頂破壊
25	花山33号墳	〃	前方後円墳	長さ32，h=4	横穴式石室，埴輪
26	花山34号墳	〃	円　　墳	径11，h=2	横穴式石室
27	花山35号墳	〃	〃	径8，h=4	横穴式石室，消滅
28	花山36号墳	〃	前方後円墳	長さ42，h=4.5	
29	花山39号墳	鳴神	円　　墳	径13，h=2	
30	花山41号墳	〃	〃		消滅
31	花山42号墳	〃	〃	径18	礫槨
32	花山43号墳	〃	〃	径9.5，h=1	
33	花山44号墳	〃	前方後円墳	長さ30，h=1	粘土槨・粘土床
34	花山45号墳	〃	円　　墳	径16，h=3	
35	花山46号墳	〃	〃	径13	
36	花山47号墳	〃	〃		
37	花山48号墳	〃	〃	径9，h=1	
38	花山50号墳	〃	〃	径22，h=2	消滅
39	花山51号墳	鳴神	円　　墳	径13，h=2.5	
40	花山52号墳	岩橋	〃		消滅
41	花山53号墳	〃	〃		

古墳一覧表

番号	古　墳　名	所　在　地	墳　　形	規模(m)，h=高さ	備　　考
42	花山54号墳	岩橋	円　　墳		
43	花山55号墳	〃	〃		
44	花山56号墳	栗栖	〃		
45	花山57号墳	〃	〃		
46	花山58号墳	〃	〃		
47	花山59号墳	〃	〃		
48	花山60号墳	〃	〃		
49	花山61号墳	〃	〃		
50	花山62号墳	〃	〃		
51	花山63号墳	〃	〃		
52	花山64号墳	〃	〃		
53	花山65号墳	〃	〃		
54	花山66号墳	〃	〃		
55	花山67号墳	〃	〃		
56	花山68号墳	〃	〃		
57	花山69号墳	〃	〃		
58	花山70号墳	〃	〃		
59	花山71号墳	〃	〃	径11.5	
60	花山72号墳	〃	〃	径11.5	
61	花山73号墳	〃	〃	径10	
62	花山74号墳	〃	〃	径11.5	
63	花山75号墳	〃	〃	径12.5	
64	花山76号墳	〃	〃	径13	
65	花山77号墳	〃	〃	径12	
66	花山78号墳	〃	〃	径9	
67	花山79号墳	〃	〃	径13.5	
68	花山80号墳	〃	〃	径12.5	
69	花山81号墳	〃	〃	径16	
70	花山82号墳	〃	〃	径16	
71	花山83号墳	〃	〃	径12	
72	花山84号墳	〃	〃		
73	花山85号墳	〃	〃	径15	
74	花山86号墳	〃	〃	径10	
75	花山87号墳	鳴神	〃		
76	花山88号墳	〃	〃	径15，h=2	
77	花山89号墳	〃	〃	径12，h=2	
78	花山90号墳	〃	〃	径10，h=1.5	
79	花山91号墳	〃	〃		
80	花山92号墳	栗栖	〃		
81	花山93号墳	〃	〃		
82	花山94号墳	〃	〃		

古墳一覧表

番号	古　墳　名	所　在　地	墳　　形	規模(m)，h＝高さ	備　　考
83	花山95号墳	栗栖	円　　墳		
84	花山96号墳	〃	〃		

古墳一覧表（大谷山地区―１８５）

番号	古　墳　名	所　在　地	墳　　形	規模(m)，h＝高さ	備　　考
85	大谷山３号墳	鳴神	円　　墳	径14，h=3.5	横穴式石室
86	大谷山４号墳	〃	〃	径18，h=5.5	横穴式石室・埴輪
87	大谷山５号墳	〃	〃	径19.5，h=4.5	横穴式石室
88	大谷山６号墳	〃	前方後円墳	径25，h=4	横穴式石室・埴輪
89	大谷山12号墳	岩橋	円　　墳	径12	
90	大谷山13号墳	〃	〃	径12	横穴式石室
91	大谷山14号墳	〃	〃	径15，h=3	横穴式石室
92	大谷山15号墳	〃	〃	径15，h=3	横穴式石室
93	大谷山16号墳	〃	〃	径26.5，h=6	横穴式石室
94	大谷山17号墳	〃	〃	径13，h=2	横穴式石室２
95	大谷山20号墳	〃	前方後円墳	径37.6，h=2	
96	大谷山21号墳	〃	円　　墳	径7，h=1	
97	大谷山22号墳	岩橋，鳴神	前方後円墳	径80，h=6.5	横穴式石室・埴輪・造出
98	大谷山26号墳	岩橋	〃		
99	大谷山27号墳	〃	〃	径21，h=3.3	横穴式石室・埴輪
100	大谷山28号墳	〃	〃	径25，h=3	横穴式石室・箱式棺・埴輪
101	大谷山35号墳	鳴神	円墳	径11，h=3	横穴式石室
102	大谷山36号墳	〃	〃	径12.5，h=2	
103	大谷山37号墳	〃	〃	径9，h=3	
104	大谷山38号墳	〃	〃	径10，h=2.5	横穴式石室
105	大谷山39号墳	岩橋	〃	径20，h=2.5	粘土槨・箱式石棺

古墳一覧表（大日山地区―１８５）

番号	古　墳　名	所　在　地	墳　　形	規模(m)，h＝高さ	備　　考
106	大日山１号墳	井辺・寺内	前方後円墳	長さ31.5，h=5	埴輪
107	大日山２号墳	〃	円　　墳	径12，h=2.5	横穴式石室
108	大日山３号墳	〃	〃	径15，h=3	〃
109	大日山４号墳	井辺・岩橋	〃	径8，h=1	
110	大日山５号墳	岩橋・寺内	〃	径8，h=3	
111	大日山６号墳	寺内	〃	径10，h=1.3	
112	大日山７号墳	寺内・岩橋	〃	径10，h=3	横穴式石室
113	大日山８号墳	井辺・岩橋	〃	径15，h=3	竪穴式石室
114	大日山９号墳	岩橋	〃	径8，h=1	
115	大日山10号墳	〃	〃	径7，h=2	
116	大日山11号墳	〃	〃	径5，h=1.5	
117	大日山12号墳	〃	〃	径7.5，h=1.5	竪穴式石室

古墳一覧表

番号	古　墳　名	所　在　地	墳　　形	規模(m)，h＝高さ	備　　考
118	大日山14号墳	岩橋	円　　墳	径10，h=3	
119	大日山15号墳	〃	〃	径7，h=2	竪穴式石室
120	大日山17号墳	〃	〃	径11，h=4	
121	大日山18号墳	〃	〃	径20，h=3.5	横穴式石室
122	大日山19号墳	〃	〃	径10，h=3	
123	大日山20号墳	〃	〃	径10，h=2.5	
124	大日山21号墳	〃	〃	径4，h=1.6	
125	大日山22号墳	〃	〃	径7.5，h=3	
126	大日山23号墳	〃	〃	径15，h=4	横穴式石室？
127	大日山24号墳	〃	〃	径10，h=3	
128	大日山25号墳	井辺・岩橋	〃	径13，h=2	横穴式石室
129	大日山28号墳	井辺	〃	径6.3，h=1	
130	大日山32号墳	鳴神	〃	径11.5，h=2	
131	大日山33号墳	〃	〃	径15，h=1.5	
132	大日山35号墳	井辺・岩橋	前方後円墳	長さ73，h=7.5	横穴式石室
133	大日山36号墳	井辺	円　　墳	径9.5，h=2	
134	大日山38号墳	〃	〃	径15，h=2.5	横穴式石室
135	大日山39号墳	〃	〃	径13，h=1.5	〃
136	大日山40号墳	〃	〃	h=1	
137	大日山42号墳	〃	〃	径17.5，h=2	横穴式石室
138	大日山43号墳	〃	〃	径15，h=3	横穴式石室・埴輪
139	大日山44号墳	〃	〃	径9，h=1	
140	大日山45号墳	〃	〃	径9，h=1	
141	大日山47号墳	〃	〃	径7，h=1	
142	大日山48　墳	〃	〃	径14，h=2	
143	大日山50号墳	〃	〃	径18，h=3	横穴式石室
144	大日山51号墳	〃	〃	h=5	
145	大日山52号墳	〃	〃	径6，h=2	横穴式石室
146	大日山57号墳	〃	〃	径13.5，h=2	横穴式石室
147	大日山58号墳	〃	〃	径18，h=3.5	横穴式石室
148	大日山59号墳	〃	〃	径9，h=4	横穴式石室
149	大日山60号墳	〃	〃	径10，h=3.5	
150	大日山61号墳	〃	〃	径8，h=3.5	横穴式石室
151	大日山62号墳	〃	〃	径5，h=2	
152	大日山65号墳	〃	〃	径12，h=2	
153	大日山66号墳	〃	〃	径15，h=2	横穴式石室
154	大日山67号墳	〃	〃	径14，h=2.5	横穴式石室
155	大日山68号墳	〃	〃	径7.6，h=1.2	竪穴式石室
156	大日山69号墳	鳴神・岩橋	〃		
157	大日山70号墳	井辺	〃	径14，h=3.5	横穴式石室
158	大日山71号墳	〃	〃	径14，h=2.5	竪穴式石室

古墳一覧表（井辺前山地区―１８６）＊古墳名は「井辺前山（番号）号墳」

番号	古　墳　名	所　在　地	墳　　形	規模(m)，h＝高さ	備　　考
1		森小手穂	円　　墳	径20，h=2.5	
2			方　　墳	辺15，h=5	
3		井辺・森小手穂	前方後円墳	長さ33，h=5	
4			円　　墳	径19，2.5	
5		井辺	〃	径13，h=3	
6			前方後円墳	長さ49，h=4	横穴式石室、消滅
7		井辺・森小手穂	〃	長さ46，h=4.5	
8			円　　墳	径18，h=1	
9			〃	径18，h=2	
10	井辺八幡山古墳		前方後円墳	長さ88，h=12	横穴式石室、造り出し
11			円　　墳	径11，h=2.3	
12			〃	径15，h=2.1	
13		森小手穂	〃	径15，h=2.4	
14			〃	径21，h=5.5	横穴式石室
15			〃	径15，h=2.1	
16		井辺	〃	径９，h=2.1	
17			〃	径15，h=4.2	
18			〃	径14，h=1.4	
19			〃	径12，h=1	
20			〃	径15，h=2.8	
21			〃	径13，h=2.9	
22			〃	径12，h=2.4	
23			〃	径12，h=2.1	
24		井辺・森小手穂	前方後円墳	長さ60，h=4.2	粘土槨？
25		井辺	円　　墳	径9，h=1.8	
26			前方後円墳	長さ13.5，h=	竪穴式石室
27			円　　墳	径15，h=5	
28			〃	径18，h=4.7	
29			〃	径15，h=4.9	
30			〃	径12，h=2.4	
31			〃	径13，h=2.6	
32			〃	径12，h=2.6	横穴式・竪穴式石室
33			〃	径９，h=2.3	
34		井辺・森小手穂	〃	径17，h=0.7	
35		井辺	〃	径18，h=2.3	
36			〃	径15，h=5	
37			不明	不明	箱式石棺、消滅
38			円　　墳	径30，h=6	
39		森小手穂・西	円　　墳	径18，h=4	
40		森小手穂	〃	径10，h=2.5	
41			〃	径10，h=1.5	

古墳一覧表

番号	古　墳　名	所　在　地	墳　　形	規模(m)，h＝高さ	備　　考
42		神前	円　　墳	径13，h=3.5	
43		井辺	円　墳　？	不明	消滅
44			〃	不明	消滅
45			〃	不明	消滅
46			円　　墳	径10	
47			〃	径13，h=1.6	
48			〃	径18，h=5.7	
49			〃	径16	
50			〃	径14	
51			〃	径8，h=2	
52			〃	径12，h=1.4	
53			〃	径24，h=2.5	
54		井辺・森小手穂	〃	径10，h=1.3	
55			〃	径10，h=1.2	
56		井辺	〃	不明	箱式石棺、消滅
57			〃	径10，h=1.3	
58			〃	径13，h=2.5	
59			〃	径11，h=0.8	
60			〃	径8，h=2.5	
61			〃	径8，h=2.4	
62			〃	径9，h=1.6	
63		井辺・森小手穂	〃	径15，h=3.5	
64		井辺	〃	径10，h=1	
65		神前	〃	径7，h=1.5	

古墳一覧表（大谷山地区―１８５）

番号	古　墳　名	所　在　地	墳　　形	規模(m)，h＝高さ	備　　考
505	井辺１号墳	井辺	方　　墳	34×38，h=11.5	横穴式石室
506	井辺２号墳	〃	方　　墳	25×25，h=4	
507	井辺３号墳	〃	円　　墳	径11，h=1.5	
508	井辺４号墳	〃	〃	径11，h=1.5	
509	井辺５号墳	〃	〃	径9～13，h=1	
510	井辺６号墳	〃	〃	径10，h=1	
511	井辺７号墳	〃	〃	径12，h=2	
512	井辺８号墳	〃	〃	径8，h=1	
513	井辺９号墳	〃	〃	径6.5，h=1.5	開墾で消滅
514	井辺10号墳	〃	〃	径12，h=2	
515	井辺11号墳	〃	〃	径9～12，h=2.5	
516	井辺12号墳	〃	方　　墳	20×20，h=6.5	横穴式石室
517	井辺13号墳	〃	円　　墳	径15，h=4	
518	井辺14号墳	〃	〃	径10，h=2	

古墳一覧表

番号	古　墳　名	所　在　地	墳　　形	規模(m)，h＝高さ	備　　考
519	井辺15号墳	井辺	円　　墳	径10，h=2.5	
520	井辺16号墳	〃	〃	径5，h=1	
521	井辺17号墳	〃	〃	径12，h=3	
522	井辺18号墳	〃	〃	径9，h=3	
523	井辺19号墳	〃	〃	径8，h=2	
524	井辺20号墳	〃	〃	径5，h=1	
525	井辺21号墳	〃	〃	径11，h=3	
526	井辺22号墳	〃	〃	径12～14，h=3.5	
527	井辺23号墳	〃	〃	径20，h=7.5	
528	井辺24号墳	〃	〃	径11，h=3	
529	井辺25号墳	〃	〃	径12，h=3	
530	井辺26号墳	〃	〃	径15，h=4	
564	井辺27号墳	〃	円　墳　？	径5，h=0.5	新発見、低墳丘？
565	井辺28号墳	〃	円　墳　？	径5，h=0.5	新発見、低墳丘？
531	寺内１号墳	寺内・井辺	円　　墳		
532	寺内２号墳	〃	〃		
537	寺内13号墳	〃	〃	径10～12，h=3	
538	寺内14号墳	〃	〃	径13，h=5	
539	寺内15号墳	〃	〃		開墾で消滅
540	寺内16号墳	森小手穂	円　　墳	径14，h=6.5	
541	寺内17号墳	〃	〃	径20，h=5	
542	寺内18号墳	〃	前方後円墳	長さ28.6，h=2.8	横穴式石室×２
543	寺内22号墳	〃	円　　墳	径12，h=1	竪穴式石室・箱形石棺？
544	寺内23号墳	〃	〃	不明	竪穴式石室
563	寺内64号墳	〃	〃	径12，	新発見，横穴式石室
564	寺内65号墳	〃	〃	径14，h=3.5	新発見古墳
565	寺内66号墳	〃	〃	径12，h=2	新発見古墳
566	寺内67号墳	〃	〃	径16～19，h=5	新発見古墳
567	寺内68号墳	〃	〃	径13～16，h=4.5	新発見古墳
568	寺内69号墳	〃	〃	径12，h=3	新発見古墳
569	寺内70号墳	〃	〃	径15～19，h=4.5	新発見古墳
572	寺内71号墳	〃	〃	径10，h=3	新発見古墳

遺物一覧表

番号	種類	器　種	出土遺構・層	法　量	手法·胎土·焼成·色調の特徴	遺存率
1	土師器	高杯	花山33号墳	φ＝15.9 h＝14.8	胎土：3㎜以下の白色砂礫を多く含む。 焼成：中 色調：黄橙色（10YR7/4）	90%
2	土師器	甕	花山33号墳	φ＝11.1 h＝14.1	胎土：2㎜以下の白色砂粒・チャートを多く含む。 焼成：軟 色調：橙色（7.5YR6/6）	80%
3	須恵器	甕	花山33号墳	φ＝12.0 h＝11.0	底部外面ナデ調整 胎土：0.5㎜程度の白色砂粒を少量含む。 焼成：硬 色調：灰色（10Y4/1）	100%
4	須恵器	甕	花山33号墳	φ＝11.7 h＝12.0	底部内面にツキダシ痕残存 胎土：1㎜程度の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：暗青灰色（5BG3/1）	95%
5	須恵器	甕	花山33号墳	φ＝12.6 h＝11.5	底部外面平行タタキメ、底部内面にツキダシ痕残存 胎土：3㎜以下の白色砂礫を多く含む。 焼成：硬 色調：灰色（10Y3/1～10Y6/1）	95%
6	須恵器	杯蓋	花山33号墳	φ＝13.6 h＝4.5	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：0.5㎜程度の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：オリーブ灰色（5GY5/1）	100%
7	須恵器	杯蓋	花山33号墳	φ＝12.2 h＝4.8	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：1㎜以下の砂粒をごく少量含む。 焼成：硬 色調：青灰色（5B5/1）	100%
8	須恵器	杯蓋	花山33号墳	φ＝11.7 h＝4.2	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：1㎜程度の砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：青灰色（10BG6/1）	100%
9	須恵器	杯蓋	花山33号墳	φ＝13.8 h＝5.1	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：2㎜以下の白色砂粒を多く含み、 5㎜程度の礫を少量含む。 焼成：硬 色調：灰白色（7.5Y7/1）	100%
10	須恵器	杯蓋	花山33号墳	φ＝12.2 h＝4.6	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：2㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：青灰色（5B5/1）	100%
11	須恵器	杯蓋	花山33号墳	φ＝12.6 h＝4.6	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：暗青灰色（5BG4/1）	100%
12	須恵器	杯身	花山33号墳	φ＝10.4 ～12.0 h＝4.8	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：2㎜以下の白色砂粒を多く含み、 7㎜程度の石英を少量含む。 焼成：硬 色調：灰色（10Y6/1）	90%
13	須恵器	杯身	花山33号墳	φ＝11.2 h＝4.6	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：青灰色（10Y5/1）	100%
14	須恵器	杯身	花山33号墳	φ＝9.6 h＝4.8	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：0.5㎜程度の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：灰色（10Y5/1）	100%
15	須恵器	杯身	花山33号墳	φ＝12.1 h＝4.6	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：5㎜程度の白色礫をごく少量含む。 焼成：硬 色調：青灰色（5BG4/1）	100%

遺物一覧表

番号	種類	器　種	出土遺構・層	法　量	手法·胎土·焼成·色調の特徴	遺存率
16	須恵器	杯身	花山33号墳	φ＝10.5 h＝5.1	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：青灰色（5BG5/1）	100%
17	須恵器	杯身	花山33号墳	φ＝11.2 h＝5.6	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：暗青灰色（5BG+F4014/1）	100%
18	須恵器	無蓋高杯	花山33号墳	φ＝10.5 h＝14.9	裾部つまみ出し、杯部内面に自然釉が付着 胎土：１㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：灰色（10Y6/1）	90%
19	須恵器	無蓋高杯	花山33号墳	φ＝11.4 h＝14.7	胎土：3～5㎜の結晶片岩を多く含む。 焼成：硬 色調：青灰色（10BG2/1）	70%
20	須恵器	無蓋高杯	花山33号墳	φ＝10.9 h＝14.4	脚部ナデ調整、裾部つまみ出し 胎土：4㎜以下の白色砂礫を含む。 焼成：硬 色調：灰色（10Y4/1）	95%
21	鉄製品	馬具 （鉸具）	花山33号墳	l＝4.8	——	——
22	鉄製品	馬具 （引手）	花山33号墳	l＝7.9	——	——
23	鉄製品	鋲 （袋部）	花山33号墳	l＝7.7	——	——
24	玉	管玉	花山33号墳	φ＝0.63 l＝1.84 wt＝1.29	色調：淡青緑色 材質：ガラス	100%
25	玉	管玉	花山33号墳	φ＝0.65 l＝2.34 wt＝1.90	色調：暗緑色 材質：緑色凝灰岩	100%
26	玉	管玉	花山33号墳	φ＝0.63 l＝1.96 wt＝1.46	色調：暗緑色 材質：緑色凝灰岩	100%
27	玉	管玉	花山33号墳	φ＝0.64 l＝1.85 wt＝1.61	色調：暗緑色～淡青緑色 材質：緑色凝灰岩	100%
28	玉	管玉	花山33号墳	φ＝0.72 l＝1.7 wt＝1.75	色調：暗緑色～淡青緑色 材質：緑色凝灰岩	100%
29	鉄製品	U字形鍬先	大日山43号墳 表土 南東部	l＝9.9	——	——
30	鉄製品	刀子	大日山43号墳 玄室床面	l＝16.4 wt＝33	——	——
31	鉄製品	直刀	大日山43号墳 玄室床面	l＝93.4	——	——
32	須恵器	杯蓋	大日山43号墳 玄室床面	φ＝14.6 h＝4.9	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：灰色（7.5Y5/1）	95%
33	埴輪	円筒埴輪	大日山43号墳 羨道入口	φ＝14.9 h＝32.7	胎土：15㎜以下の結晶片岩を多く含む。 焼成：中 色調：橙色（2.5YR6/8）	70%
34	埴輪	円筒埴輪	大日山43号墳 羨道入口	φ＝13.0 h＝25.4	胎土：6㎜以下の結晶片岩を多く含む。 焼成：軟 色調：橙色（2.5YR6/8）	60%
35	玉	丸玉	大日山70号墳 玄室床面	l＝0.85 h＝0.8	材質：ガラス 色調：青色	100%
36	玉	丸玉	大日山70号墳	l＝0.8 h＝1.0	材質：ガラス 色調：濃紺色	100%

遺物一覧表

番号	種類	器　種	出土遺構・層	法　量	手法·胎土·焼成·色調の特徴	遺存率
37	鉄製品	鏃	大日山70号墳 左側壁際	l＝7.9 w＝3.8 wt＝180	——	——
38	鉄製品	小刀	大日山70号墳	l＝11.1 w＝2.6	——	——
39	鉄製品	直刀	大日山70号墳	l＝77.0 w＝3.6	——	——
40	鉄製品	斧	大日山70号墳	h＝8.3 w＝4.1 wt＝205	——	——
41	鉄製品	鑿	大日山70号墳	h＝8.1 w＝2.5 wt＝113	——	——
42	鉄製品	鉄槌	大日山70号墳	l＝18.9 w＝3.0 wt＝715	——	——
43	鉄製品	鉄鉗	大日山70号墳	l＝28.1	——	——
44	須恵器	杯蓋	大日山70号墳 羨道中～下層	φ＝14.6 h＝4.2	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：灰色（7.5Y5/1）	60%
45	須恵器	杯身	大日山70号墳 羨道中～下層	φ＝12.0 h＝4.9	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：0.5㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：灰色（10Y6/1）	75%
46	須恵器	短頸壷	大日山70号墳 羨道中～下層	φ＝8.2 h＝8.0	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む。 焼成：中 色調：灰黄褐色（10YR6/2）	70%
47	須恵器	無蓋高杯	大日山70号墳 羨道中～下層	φ＝10.8 h＝14.2	胎土：2㎜以下の白色砂粒を含む。 焼成：硬 色調：灰色（10Y6/1）	30%
48	須恵器	長頸壷	大日山70号墳 玄室床面	φ＝12.1 h＝17.5	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：2㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：灰黄色（2.5Y7/2）	95%
49	須恵器	広口壷	大日山70号墳 玄室床面	φ＝11.7 h＝17.7	内面底部無文当て具痕残存 胎土：2㎜以下の白色砂粒を少量含む。 焼成：硬 色調：黒色（2.5GY2/1）、断面 暗赤褐色（7.5R3/2）	90%
50	須恵器	杯蓋	大日山71号墳	φ＝14.0 h＝3.8	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：2㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：灰色（5Y5/1）	100%
51	須恵器	杯蓋	大日山71号墳	φ＝14.0 h＝3.8	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：3㎜以下の白色砂礫を多く含む。 焼成：硬 色調：灰色（10Y6/1）	100%
52	須恵器	杯蓋	大日山71号墳	φ＝13.0 h＝3.9	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：灰色（5Y5/1）	75%
53	須恵器	杯蓋	大日山71号墳	φ＝13.9 h＝4.0	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：0.5㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：灰色（10Y6/1）	75%
54	須恵器	杯身	大日山71号墳	φ＝12.6 h＝4.7	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：3㎜程度の結晶片岩を多く含む。 焼成：硬 色調：灰色（10Y5/1）	100%

遺物一覧表

番号	種類	器　種	出土遺構・層	法　量	手法·胎土·焼成·色調の特徴	遺存率
55	須恵器	杯身	大日山71号墳	φ＝11.0 h＝4.7	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：4㎜以下の白色砂礫を多く含む。 焼成：硬 色調：灰色（N4/0）	90%
56	須恵器	杯身	大日山71号墳	φ＝11.0 h＝4.7	ロクロ回転方向 時計廻り 胎土：3㎜以下の白色砂礫を含む。 焼成：硬 色調：灰色（N4/0）	100%
57	土師器	把手付椀	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝10.0 h＝8.1	内外面ハケメ調整、底部ヘラケズリ 胎土：赤色酸化粒含む。 焼成：中 色調：外面 明赤褐色（5YR5/6） 内面 明赤褐色（2.5YR5/8）	90%
58	土師器	把手付椀	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝9.6 h＝7.5	外面ハケメ調整、底部ヘラケズリ 胎土：1㎜以下の砂粒を少量含む。 焼成：中 色調：橙色（5YR6/6）	80%
59	土師器	椀	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝10.9 h＝5.0	胎土：1～5㎜の砂礫を含む。 焼成：中 色調：明赤褐色（2.5YR5/6）	70%
60	土師器	広口壷	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝11.8 h＝11.4	体部内面ナデ調整 胎土：１㎜以下の砂粒をごく少量含む。 焼成：中 色調：外面 橙色（2.5YR6/6） 内面 にぶい黄橙色（10YR4/6）	90%
61	須恵器	杯蓋	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝12.5 h＝4.2	ロクロ回転方向 反時計廻り 天井部内面同心円文 胎土：2㎜以下の白色砂粒を含む。 焼成：硬 色調：灰黄色（2.5Y7/2）	100%
62	須恵器	杯身	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝10.8 h＝5.1	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：2㎜以下の砂粒を含む。 焼成：中 色調：灰黄色（2.5Y7/2）	100%
63	須恵器	杯身	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝11,1 h＝4.8	ロクロ回転方向不明 胎土：3㎜以下の砂礫を少量含む。 焼成：軟 色調：黄橙色（10YR8/6）	100%
64	須恵器	杯身	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝11,7 h＝5.2	ロクロ回転方向不明 胎土：0.5㎜程度の黒色還元粒子を多く含む。 焼成：軟 色調：灰白色（2.5Y7/1）	60%
65	須恵器	杯身	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝10.4 h＝4.8	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：2～3㎜程度の白色礫を多く含む。 焼成：軟 色調：浅黄色（2.5Y7/3）	70%
66	須恵器	杯身	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝11.0 h＝5.1	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：0.5㎜程度の白色砂粒・黒色還元粒子を含む。 焼成：軟 色調：灰白色（2.5Y8/2）	60%
67	須恵器	杯身	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝10.6 h＝4.7	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：6㎜以下の礫を含む。 焼成：中 色調：暗灰色（N3/0）	80%
68	須恵器	ハソウ	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝12,2 h＝11.5	底部静止ヘラケズリ 胎土：2㎜以下の白色砂粒を含む。 焼成：中 色調：灰色（7.5Y5/1）	100%
69	須恵器	壷	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝11,3 h＝15.0	底部内面にツキダシ痕残存 胎土：2㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：オリーブ黒色（5Y3/1）	100%

遺物一覧表

番号	種類	器　種	出土遺構・層	法　量	手法·胎土·焼成·色調の特徴	遺存率
70	須恵器	壷	井辺前山26号墳 SX－01	h＝16.9	底部内面にツキダシ痕残存 胎土：2㎜以下の砂粒を含む。 焼成：中 色調：浅黄色（2.5Y7/3）	100%
71	須恵器	壷	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝4.8 h＝5.4	天井部カキメ 胎土：１㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：オリーブ灰色（2.5GY6/1）	98%
72	須恵器	壷	井辺前山26号墳 SX－01	φ＝9.8 h＝18.4	ロクロ回転方向 時計廻り、底部不調整 胎土：2㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：灰色（7.5Y6/1）	100%
73	土師器	椀	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝11.8 h＝4.8	胎土：２㎜以下の砂粒を含む。 焼成：軟 色調：黄橙色（7.5YR7/8）	80%
74	土師器	高杯	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝13.3 h＝9.0	杯部内面板ナデ、脚部に突帯廻る。 胎土：1㎜以下の白色砂粒をごく少量含む。 焼成：硬 色調：にぶい橙色（5YR6/4）	100%
75	土師器	高杯	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝15.7 h＝13.4	脚部にシボリメが残存 胎土：2㎜以下の砂粒を含む。 焼成：中 色調：橙色（2.5YR6/8）	90%
76	土師器	高杯	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝14.5 h＝13.5	杯部外面にハケメ残存 胎土：2㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：橙色（2.5YR6/8）	75%
77	土師器	高杯	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝14.7 h＝11.7	杯部外面にハケメ残存 胎土：2㎜程度の黒色砂礫を含む。 焼成：軟 色調：浅黄橙色（10YR8/4）	80%
78	土師器	高杯	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝13.6 h＝10.7	杯部外面にハケメ残存する。 胎土：赤色酸化粒・3㎜程度の白色礫を含む。 焼成：軟 色調：浅橙色（10YR8/4）	50%
79	土師器	甕	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝10.8 h＝12.0	体部外面ナデ調整 胎土：1㎜以下の砂粒を含む。 焼成：中 色調：にぶい赤褐色（5YR4/4）	80%
80	須恵器	杯蓋	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝13.2 h＝4.5	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：1～2㎜の砂粒を含む。 焼成：中 色調：浅黄橙色（2.5Y7/4）	100%
81	須恵器	杯蓋	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝12.0 h＝4.4	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：1～2㎜の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：灰色（N4/0）	100%
82	須恵器	杯身	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝10.5 h＝4.8	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：0.5㎜以下の白色砂粒を含む。 焼成：硬 色調：にぶい黄橙色（10YR7/4）	100%
83	須恵器	杯身	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝9.6 h＝4.4	ロクロ回転方向 反時計廻り 胎土：2㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：軟 色調：灰黄色（2.5Y7/2）	100%
84	須恵器	無蓋高杯	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝12.0 h＝8.7	ロクロ回転方向 反時計廻り、脚部三方スカシ 胎土：2㎜以下の砂粒を含む。 焼成：軟 色調：灰黄色（2.5Y7/2）	100%

遺物一覧表

番号	種類	器　種	出土遺構・層	法　量	手法·胎土·焼成·色調の特徴	遺存率
85	須恵器	無蓋高杯	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝13.2 h＝10.9	脚部三方スカシ、杯部内面同心円文 胎土：2㎜以下の砂粒をごく少量含む。 焼成：硬 色調：灰色（N4/1）	90%
86	須恵器	広口壺	井辺前山26号墳 SX－02	φ＝15.8 h＝19.4	底部内面にツキダシ痕残存 胎土：4㎜以下の白色砂礫・黒色還元粒を含む。 焼成：軟 色調：外面 浅黄色（2.5YR7/3） 内面 灰白色（5Y7/2）	100%
87	埴輪	円筒埴輪 （口縁部）	井辺前山26号墳	φ＝23.2 h＝18.0	胎土：1㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：橙色（5YR6/6）	20%
88	埴輪	円筒埴輪 （体部）	井辺前山26号墳	h＝16.2	胎土：15㎜以下の白色砂礫を多く含む。 焼成：硬 色調：外面 黄灰色（2.5YR5/1） 内面 橙色（2.5YR6/8）	40%
89	埴輪	円筒埴輪 （体部）	井辺前山26号墳	h＝11.1	胎土：1㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：にぶい赤褐色（5YR5/4）	——
90	埴輪	円筒埴輪 （底部）	井辺前山26号墳	h＝12.3	胎土：1㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：外面 褐灰色（10YR5/1） 内面 にぶい褐色（7.5YR5/4）	——
91	埴輪	家形埴輪 （壁体部）	井辺前山26号墳	h＝12.1	突帯を刀子状工具により切断 胎土：2㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：明褐色（7.5YR5/8）	——
92	埴輪	家形埴輪 （裾部）	井辺前山26号墳	h＝9.5	胎土：0.5㎜程度の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：明褐色（7.5YR5/8）	——
93	埴輪	盾形埴輪	井辺前山26号墳	h＝7.6	胎土：2㎜以上の砂粒を含む。 焼成：軟 色調：橙色（2.5YR6/8）	——
94	埴輪	盾形埴輪	井辺前山26号墳	h＝10.1	胎土：3㎜以下の砂礫を多く含む。 焼成：軟 色調：橙色（5YR6/8）	——
95	埴輪	盾形埴輪	井辺前山26号墳	h＝9.7	胎土：1㎜以下の白色砂粒を含み。2㎜以下の結晶片岩を少量含む。 焼成：軟 色調：橙色（2.5YR6/8）	——
96	埴輪	盾形埴輪	井辺前山26号墳	h＝9.6	胎土：1㎜以下の砂粒を含む 焼成：軟 焼成：橙色	——
97	埴輪	人物埴輪 （腕部）	井辺前山26号墳	l＝17.8	胎土：1㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：橙色（5YR6/8）	——
98	埴輪	不明 （基部）	井辺前山26号墳	h＝6.5	胎土：2㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：軟 色調：黄褐色（7.5YR7/8）	——
99	埴輪	馬形埴輪 （頭部）	井辺前山26号墳	l＝11.9	胎土：10㎜程度の結晶片岩を少量含む。 焼成：軟 色調：黄橙色（7.5YR8/8）	——
100	埴輪	馬形埴輪 （右目周辺）	井辺前山26号墳	h＝7.5	胎土：10㎜程度の結晶片岩を少量含む。 焼成：中 色調：黄褐色（7.5YR7/8）	——
101	埴輪	馬形埴輪 （耳部）	井辺前山26号墳	h＝10.1	胎土：5～10㎜の結晶片岩を含む。 焼成：軟 色調：橙色（7.5YR7/6）	——
102	埴輪	馬形埴輪 （鬣）	井辺前山26号墳	h＝4.9	胎土：0.5㎜以下の白色砂粒を多く含み、 4㎜程度の結晶片岩を含む。 焼成：軟 色調：黄橙色（7.5YR8/8）	——

遺物一覧表

番号	種類	器　種	出土遺構・層	法　量	手法·胎土·焼成·色調の特徴	遺存率
103	埴輪	馬形埴輪 (後輪)	井辺前山26号墳	h＝5.0	胎土：1㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：軟 色調：黄橙色（7.5YR8/8）	——
104	埴輪	馬形埴輪 (鞍部)	井辺前山26号墳	l＝12.1	胎土：1㎜以下の白色礫を多く含み、5㎜程度の結晶片岩を含む。 焼成：軟 色調：橙色（7.5YR6/8）	——
105	埴輪	馬形埴輪 (右障泥)	井辺前山26号墳	h＝16.1	胎土：10㎜以下の結晶片岩・石英を含む。 焼成：中 色調：黄橙色（7.5YR7/8）	——
106	埴輪	馬形埴輪 (左障泥)	井辺前山26号墳	h＝18.0	胎土：5㎜以下の砂礫を含む。 焼成：中 色調：黄橙色（7.5YR7/8）	——
107	埴輪	馬形埴輪 (尻繋)	井辺前山26号墳	l＝19.0	胎土：5㎜以下の結晶片岩を含む。 焼成：軟 色調：黄橙色（7.5YR8/8）	——
108	埴輪	馬形埴輪 (尻部)	井辺前山26号墳	h＝17.9	胎土：5㎜程度の結晶片岩を多く含む。 焼成：軟 色調：黄橙色（10YR7/8）	——
109	埴輪	馬形埴輪 (脚裾部)	井辺前山26号墳	h＝11.0	器厚が1周する間に大きく変化（0.8～1.5㎜）する。 胎土：10㎜以下の結晶片岩を含む。 焼成：軟 色調：黄橙色（7.5YR7/8）	——
110	埴輪	不明	井辺前山26号墳	h＝10.0	胎土：3㎜以下の砂礫を多く含む。 焼成：中 色調：浅黄橙色（7.5YR8/6）	——
111	埴輪	不明	井辺前山26号墳	h＝5.0	胎土：0.2㎜程度の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：黄橙色（7.5YR7/8）	——
112	埴輪	不明	井辺前山26号墳	h＝3.3	胎土：1㎜以下の白色砂粒を多く含む。 焼成：硬 色調：橙色（5YR6/6）	——
113	土師器	壷	井辺前山24号墳	——	胎土：結晶片岩含む。 焼成：中 色調：橙色（5YR6/6）	——
114	土師器	壷	井辺前山24号墳	φ＝28.0 h＝2.5	胎土：2㎜以下の砂粒を含む。 焼成：軟 色調：外面 明赤褐色（5YR5/6） 内面 黒色（7.5YR3/2）	15%
115	土師器	壷	井辺前山24号墳 後円部	h＝5.4	胎土：3㎜以下の結晶片岩含む。 焼成：中 色調：にぶい黄橙色（10YR6/4）	30%
116	須恵器	高杯	寺内22号墳 竪穴式石室床面	φ＝9.8 h＝9.1	ロクロ回転方向 時計廻り 脚部貼り付け突帯・三方透かし孔 胎土：3㎜以下の結晶片岩を含む。 焼成：中 色調：外面 暗青灰色（5B3/1） 内面灰色（10Y4/1）	100%
117	須恵器	杯蓋	寺内22号墳 土　第2層	φ＝15.4 h＝1.9	ロクロ回転方向 時計廻り、天井部不調整 胎土：2㎜以下の白色砂粒を含む。 焼成：中 色調：灰色（10Y6/1）	20%
118	須恵器	杯蓋	寺内22号墳 第1トレンチ 第Ⅱ層	φ＝16.0 h＝1.6	胎土：1㎜以下の砂粒を含む。 焼成：硬 色調：灰色（7.5Y5/1）	10%

報告書抄録

ふりがな	いわせせんづかしゅうへんこふんぐんきんきゅうかくにんちょうさほうこくしょ
書名	岩橋千塚周辺古墳群緊急確認調査報告書
副書名	
巻次	
編集者氏名	武内雅人　藤井幸司
編集機関	和歌山県教育委員会
所在地	〒640-8585 和歌山市小松原通1-1　℡ 073-441-3731
発行年月日	西暦 2000年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間
		市町村	遺跡			
岩橋千塚周辺古墳群	和歌山県和歌山市	3020150				平成7年4月1日 ～平成8年3月31日
花山古墳群	栗栖		184	34°12′38″	135°12′51″	平成8年4月1日 ～平成9年3月31日
大日山古墳群	鳴神		185	34°13′17″	135°13′22″	
井辺前山古墳群	井辺・森小手穂		186	34°12′38″	135°12′51″	平成9年4月1日 ～平成10年3月31日
寺内古墳群	森小手穂		187	34°13′ 7″	135°13′30″	平成10年4月1日 ～平成11年3月31日

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩橋千塚周辺古墳群	古墳	古墳時代	横穴式石室 竪穴式石室 円筒埴輪列 土器埋納土坑	土師器 須恵器 馬具 玉類 鉄製農耕具 鉄製武器類 鉄製鍛冶具 円筒埴輪 形象埴輪	

PL－1

花山36号墳

墳丘
（前方部から）

花山33号墳

墳丘
（前方部西裾から）

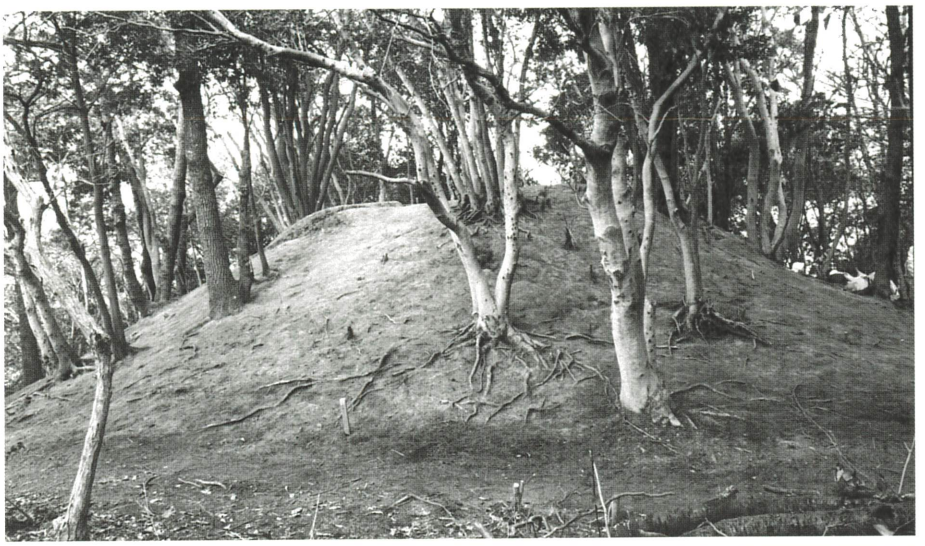
花山33号墳

横穴式石室
羨道部土器出土状況

大日山43号墳
墳丘
（東から）

大日山43号墳
横穴式石室
羨道部

大日山43号墳
横穴式石室
（奥壁部から）



大日山58号墳

墳丘
（北から）

大日山58号墳

横穴式石室
（東から）

大日山58号墳

横穴式石室
（北から）

大日山70号墳

横穴式石室
（奥壁部から）

大日山70号墳

横穴式石室
（東側壁部から）

大日山70号墳

玄室床面
遺物出土状況

PL－5

大日山71号墳

（南から）
墳丘

大日山71号墳

（南から）
石室

井辺前山26号墳

（南から）
竪穴式石室

井辺前山26号墳

竪穴式石室
（北から）

井辺前山26号墳

（南から）
SX-01・02
くびれ部

井辺前山26号墳

SX-01・02
蓋石除去後

井辺前山26号墳
（東から）
くびれ部
SX-01・02

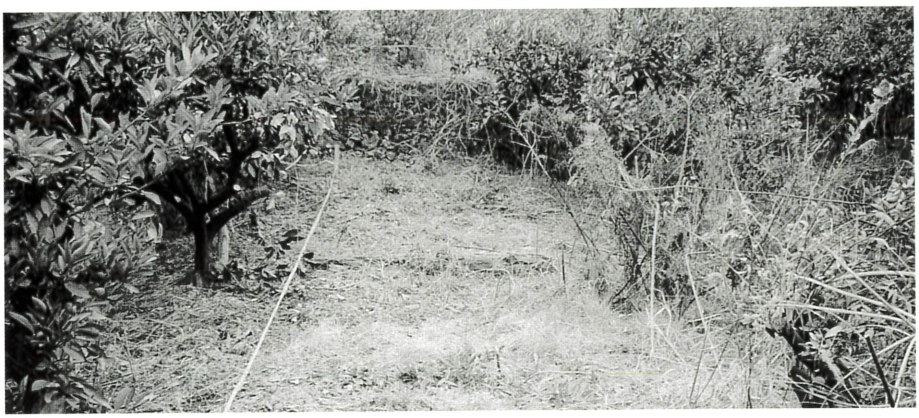
井辺前山26号墳
SX-01

井辺前山26号墳
SX-02

井辺前山24号墳
前方部

井辺前山24号墳
北側面

井辺前山24号墳
後円部トレンチ



寺内65号墳

（南から）
調査前の状況

寺内64号墳

（南から）
岩盤を掘り込んだ墓壙
トレンチ内の右半分は未発掘

寺内64号墳

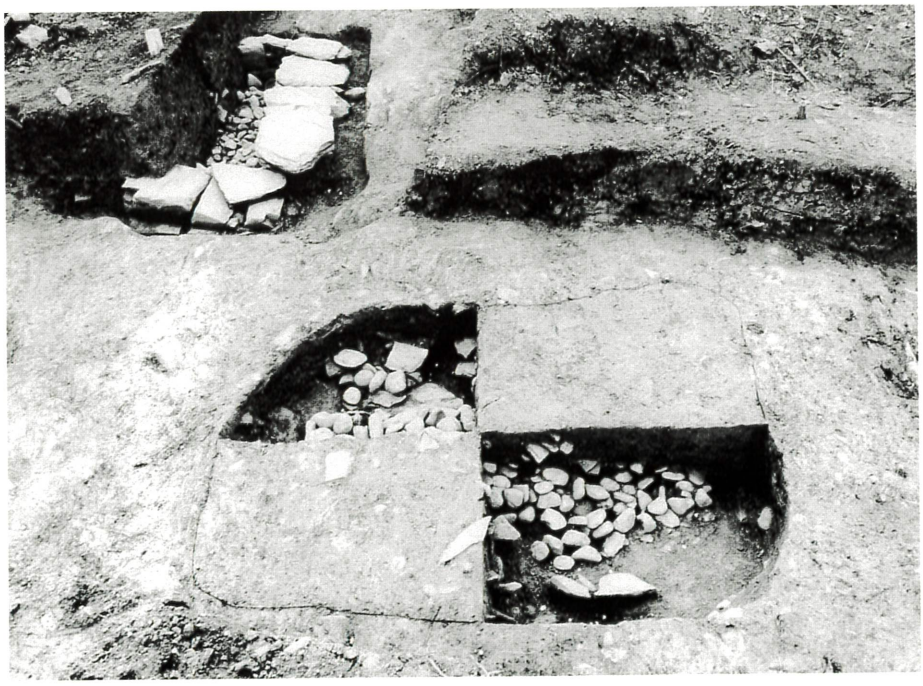
（南から）
左、墳丘の基底線
手前に見える結晶片岩の並びが基底線であろう。
右、寺内64号墳周溝土層
（東から）

寺内22号墳

（北から）
調査前の状況

寺内22号墳

（北東から）
全景
手前が周溝、向うに石室および1/4ずつ発掘した墓壙がみえる。



寺内22号墳

（東から）
埋葬施設
手前は石材の抜き取られた組み合せ式箱形石棺、向うが小型竪穴式石室

PL－11

寺内22号墳

（東から）
竪穴式石室遺物出土状況
床面に密着して須恵器高杯が出土した。

寺内22号墳

（北東から）
周溝の土層

土坑

（東から）
寺内22号墳の北側に8世紀の遺物を出土した、土坑が発見された。
土坑の大部分は調査区外にある。

寺内23号墳

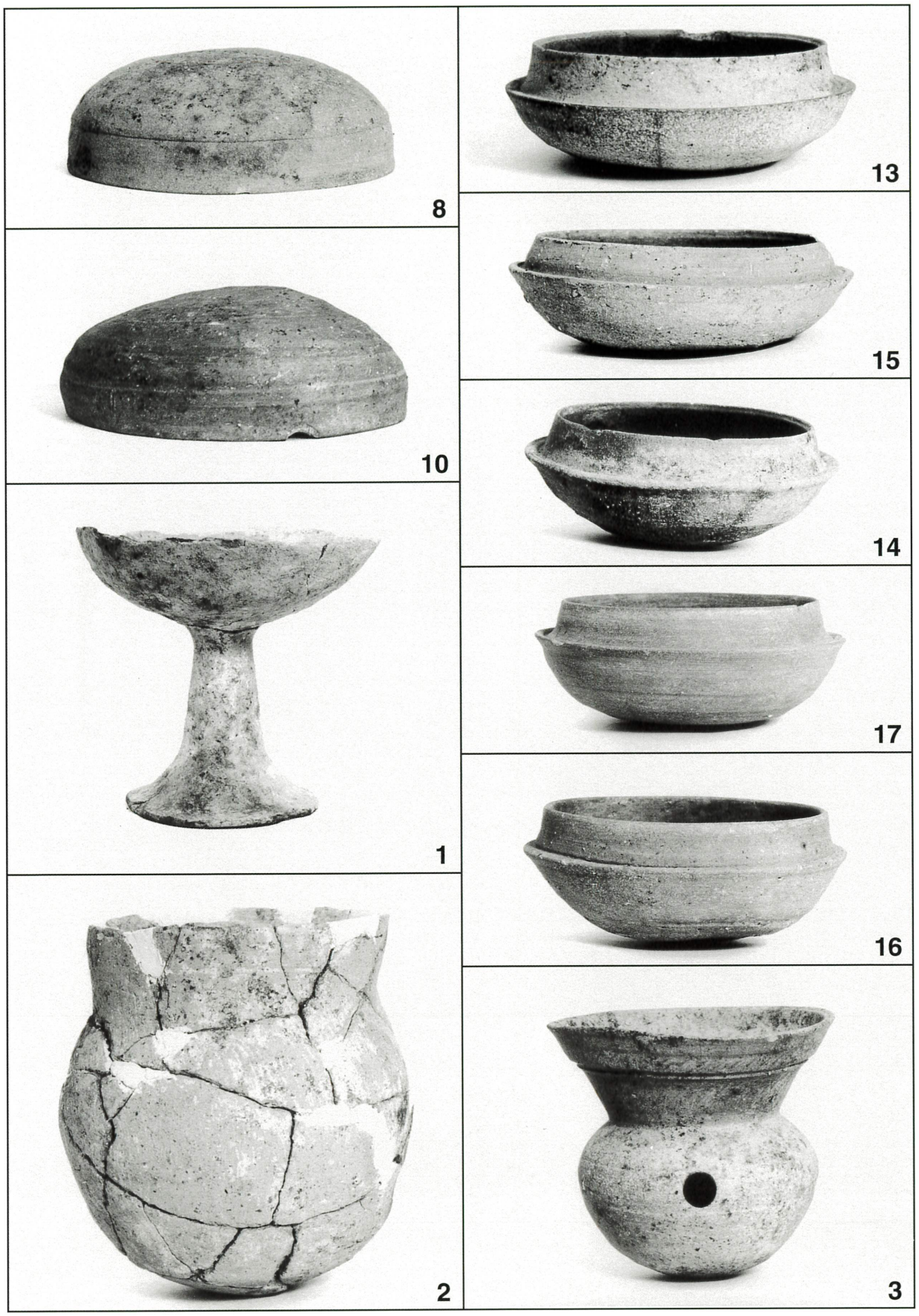
（南から）
調査前の状況

寺内23号墳

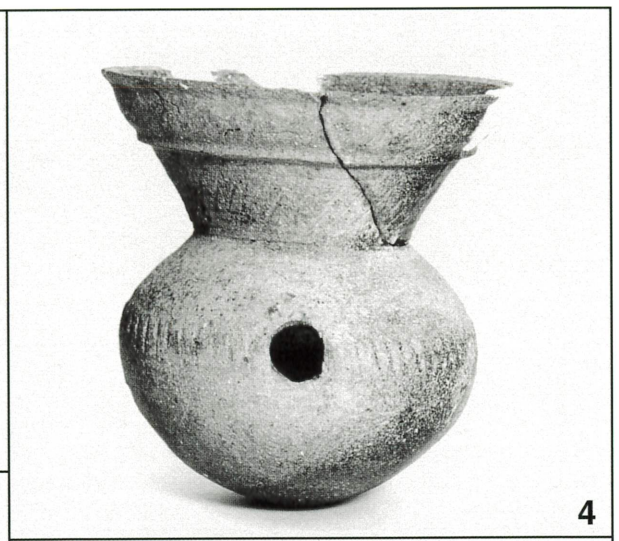
（南東から）
竪穴式石室
底面および壁は結晶片岩の割石で構築されている。

寺内23号墳

（南東から）
竪穴式石室


8
13
10
15
14
1
17
16
2
3

5

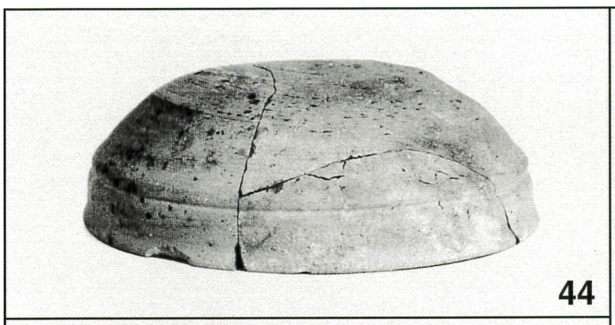

4

19

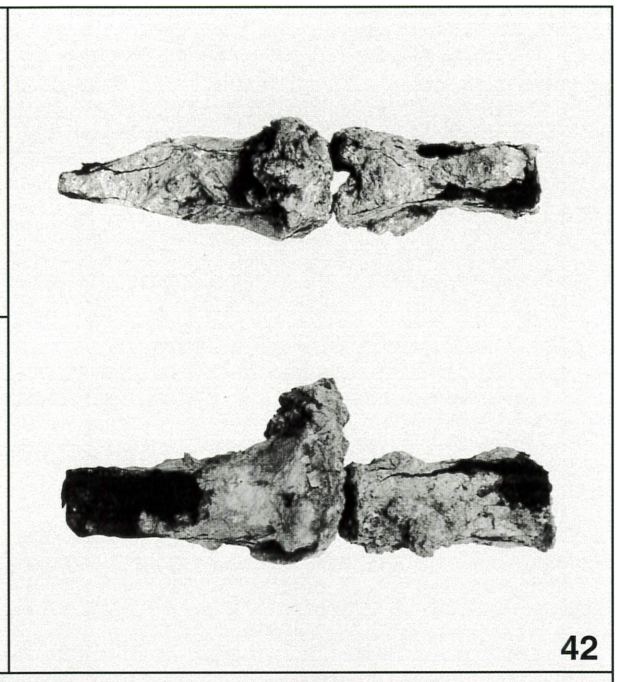
20

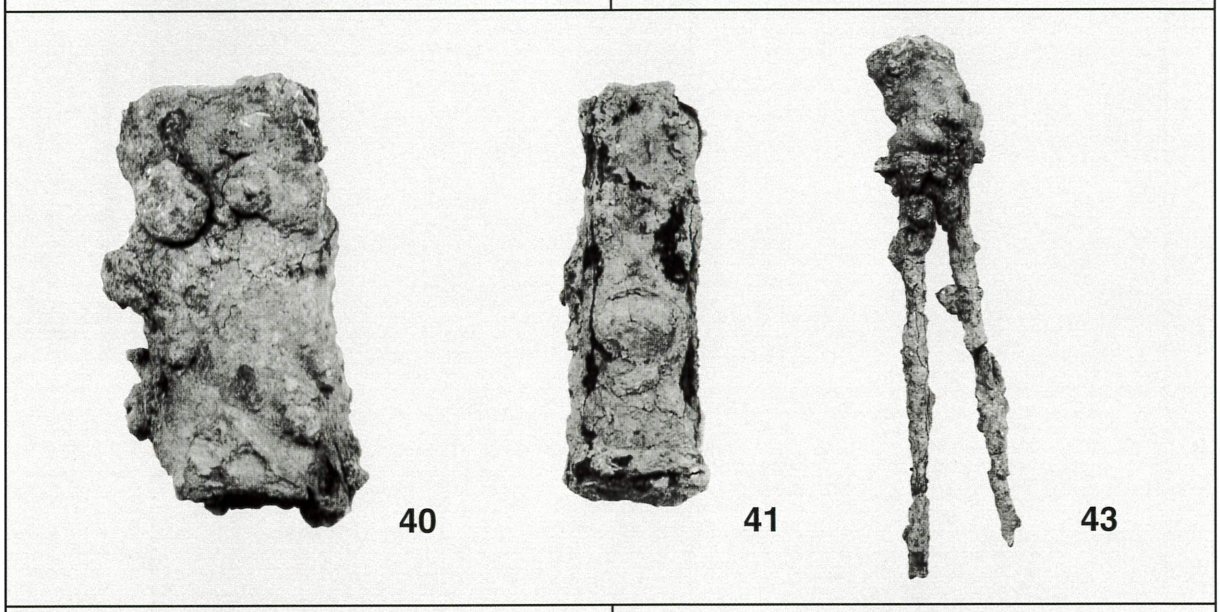
18

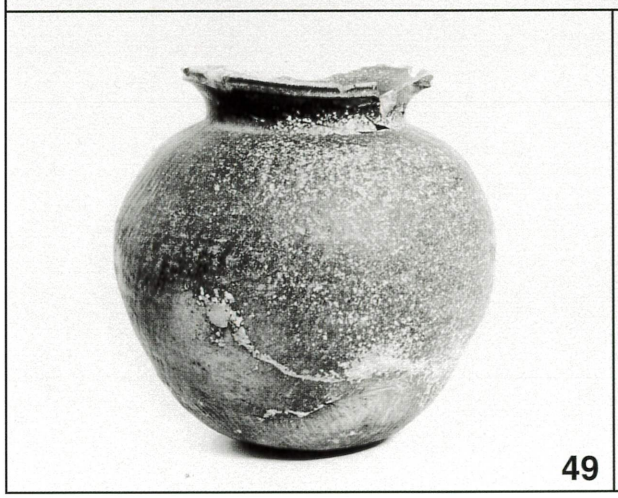
33


44

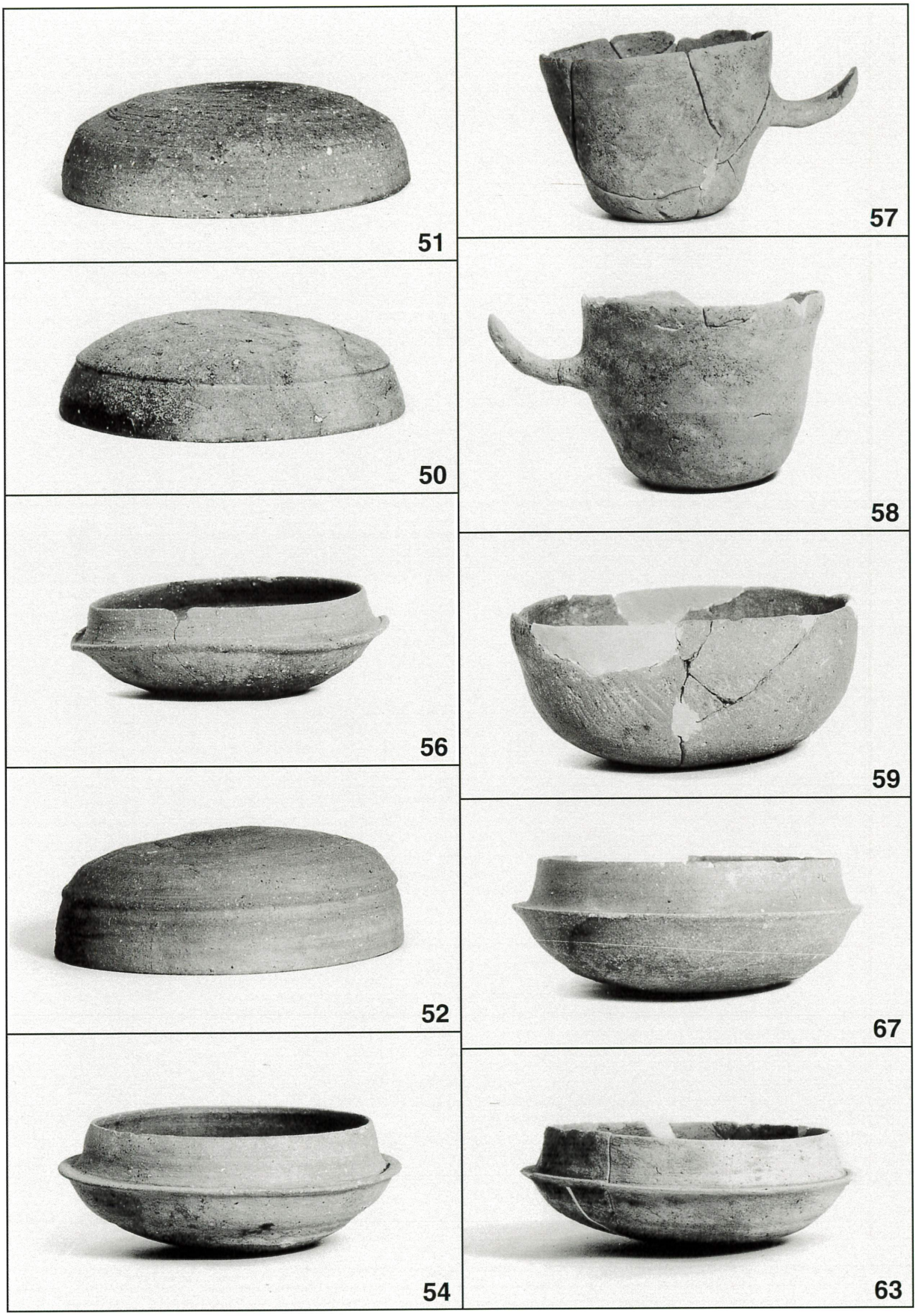
46

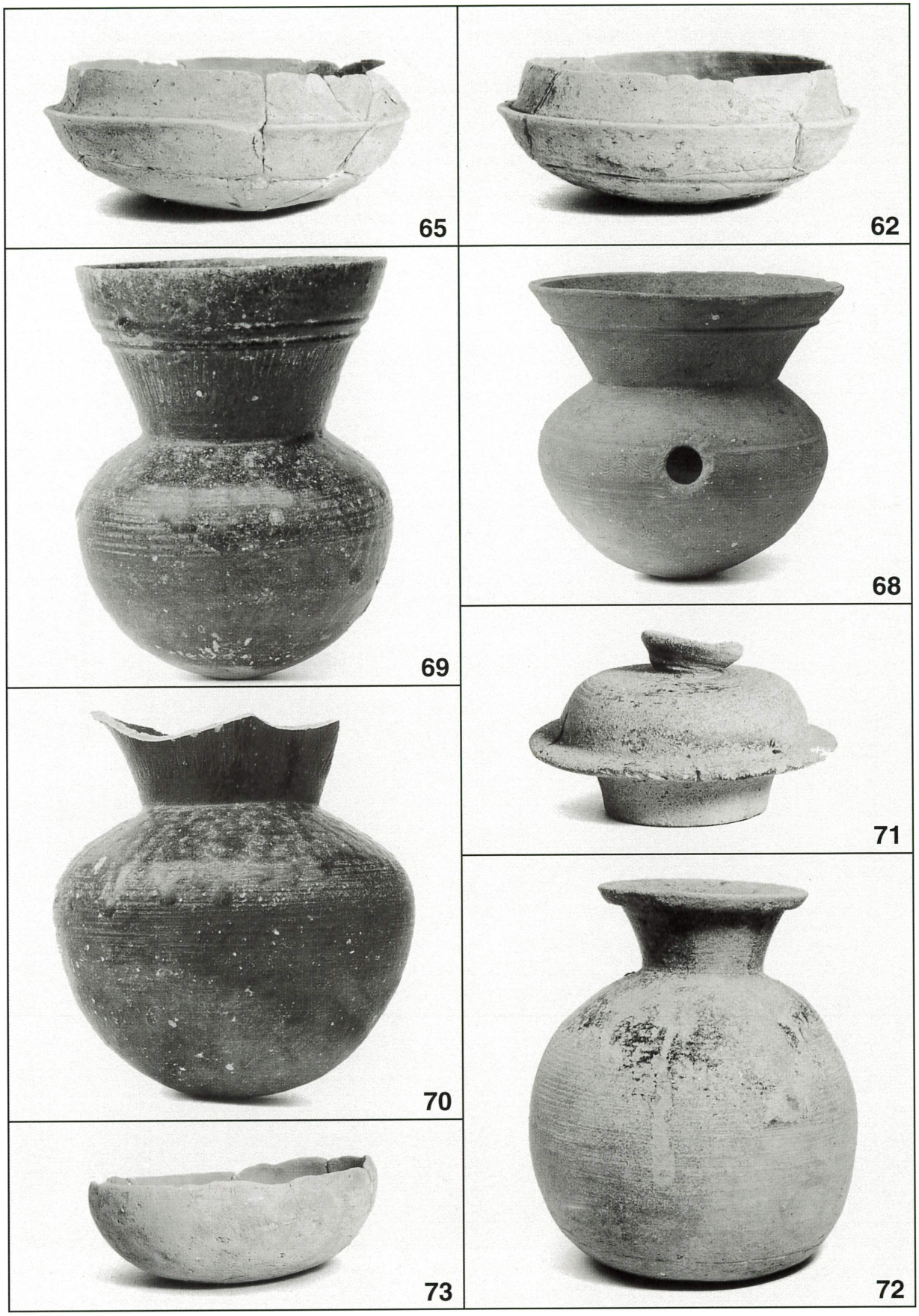

42

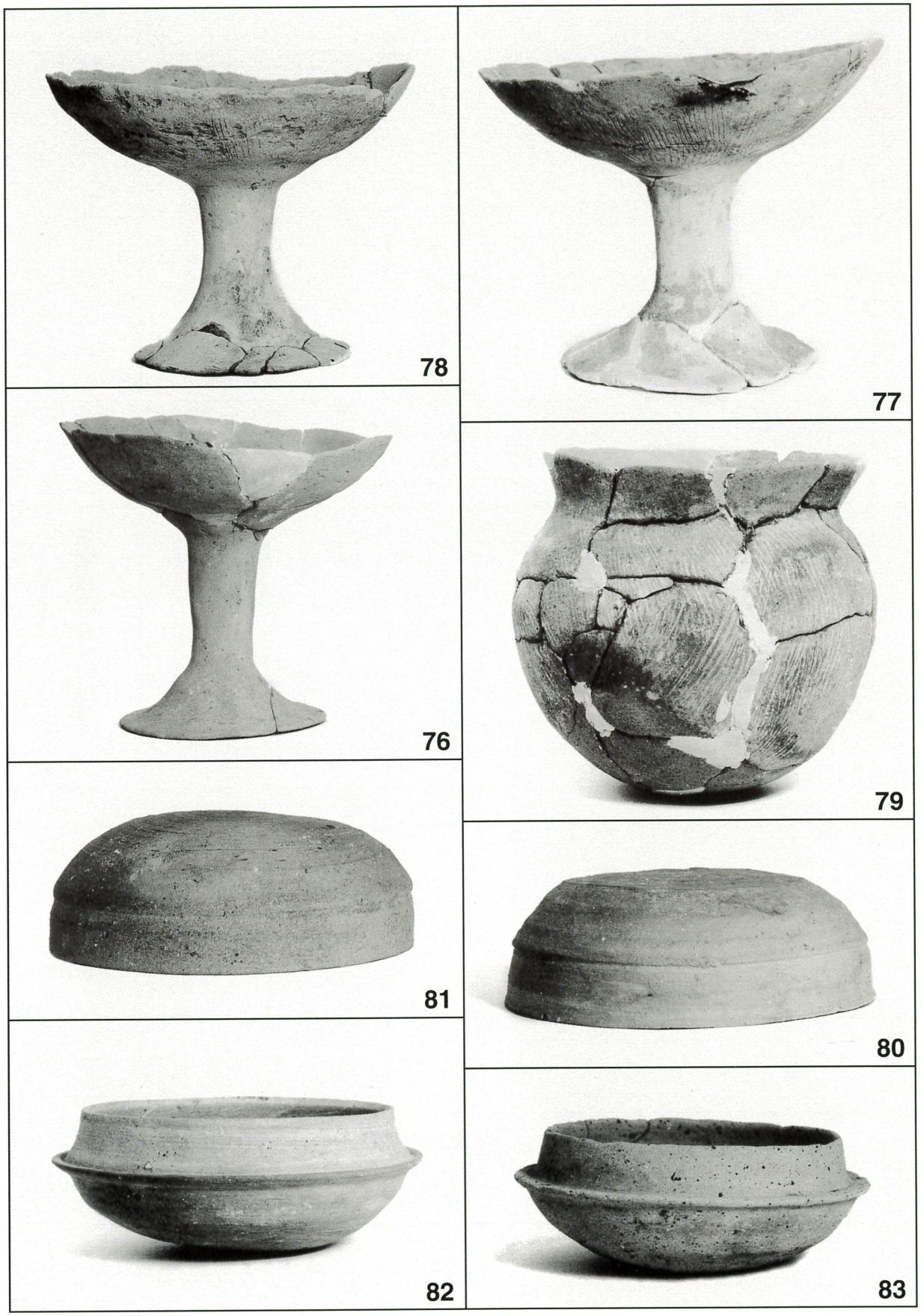

40 41 43


49

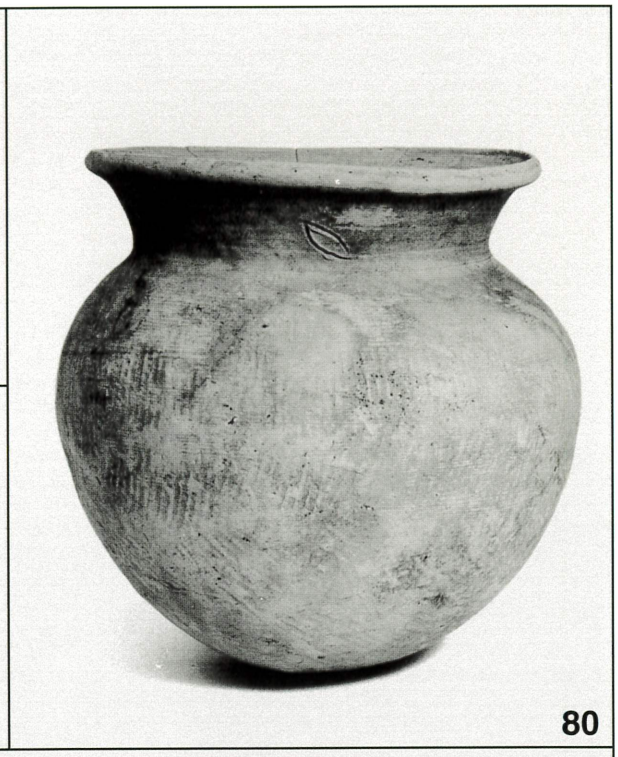
48

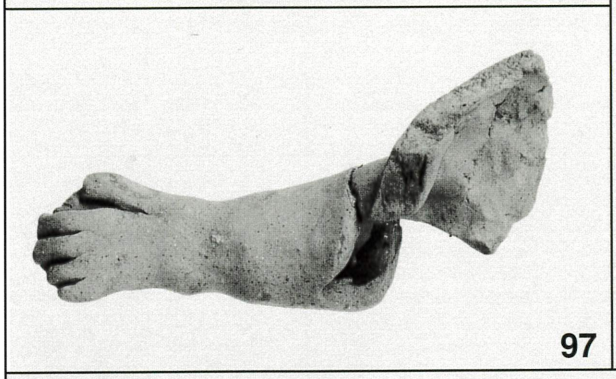

51
57
50
58
56
59
52
67
54
63

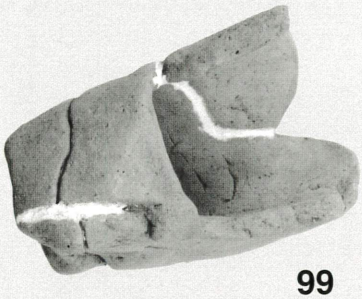

65
62
69
68
70
71
73
72

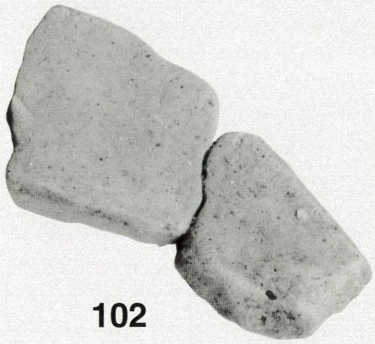

78
77
76
79
81
80
82
83

85


80

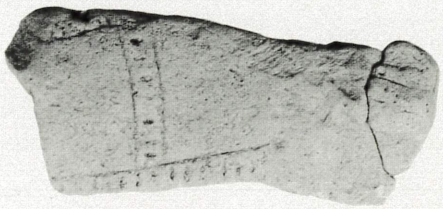

97

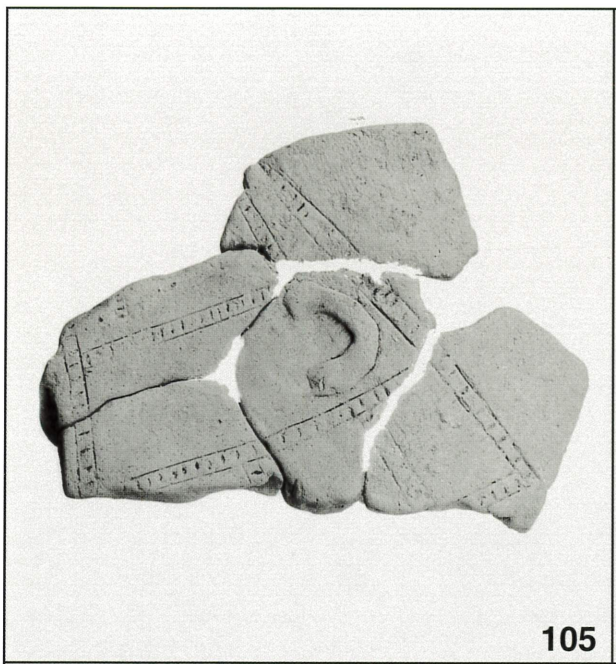

99


102

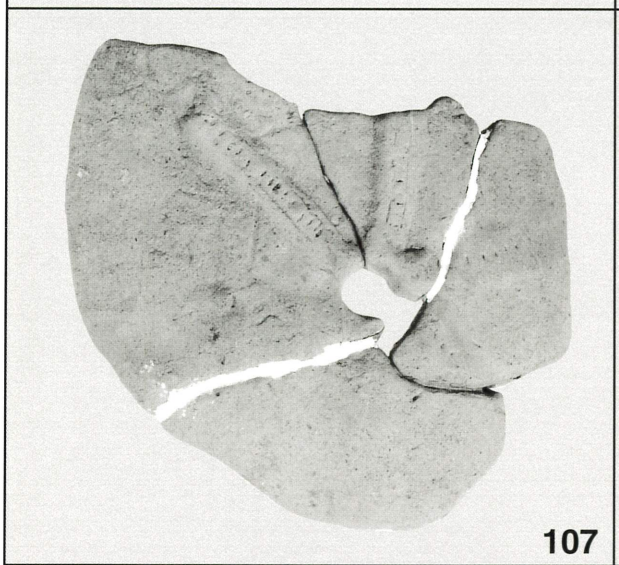
100

103


104

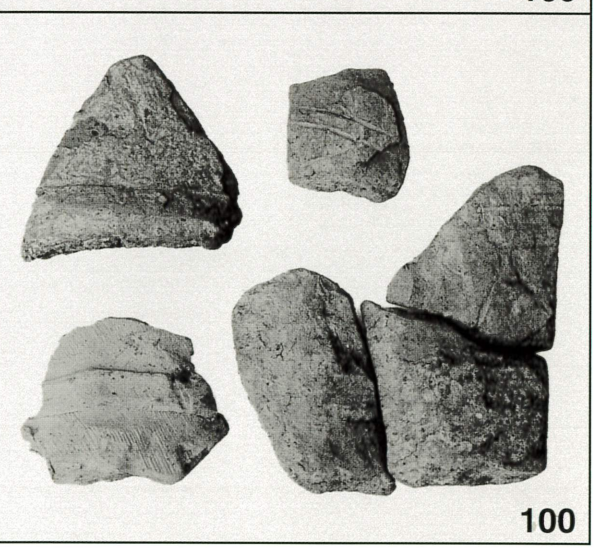

105

106


107

109

116


100

岩橋千塚周辺古墳群緊急確認調査報告書

平成12年3月31日 印刷・発行

編集・発行　和歌山県教育委員会
〒 640－8585 和歌山市小松原通1－1
TEL 073－441－3731
印　　刷　株式会社 昇和印刷
〒 640－8392 和歌山市中之島1707
TEL 073－433－3462